ANNUAL REPORT
CENTER FOR RESEARCH AND EDUCATION OF LIFELONG LEARNING
HIROSAKI UNIVERSITY
NO.23 2020

CONTENTS

Academic Article:
On the promotion of teenage students participation in local communities:
a case study “Children‘s town of Mini-Hirosaki” (Part 2)
Fukasaku Takurou…… 1

Activity Reports: Center for Research and Education of Lifelong learning …… 15

The Faculties and Other On-campus Organizations …… 47

Rules and Organization …… 109

令和元年度　弘前大学生涯学習教育研究センター年報　第二十三号
令和二年八月　弘前大学地域創生本部地域創生推進室地域創生人材育成部門

令和元年度

弘前大学生涯学習教育研究センター年報

第 23 号

令和２年８月

弘前大学地域創生本部地域創生推進室地域創生人材育成部門

目　次

はじめに（挨拶）
弘前大学理事（社会連携担当）・副学長　石川　隆洋
センター概略
歴代センター長よりご挨拶　佐藤　三三　教育学部教授（1996年５月～2002年３月）
浅野　　清　教育学部教授（2004年～2012年）
曽我　　亨　人文社会科学部教授（2012年～2018年）
伊藤　成治　理事（教育担当・副学長）（2018年～2020年）
※所属等は任期中のもの

Ⅰ．論文等
中高校生世代の地域参加の促進に関する一考察
～「こどものまちミニひろさき」の取り組みから（その２）～
弘前大学教育学部講師　兼　地域創生本部
地域創生推進室地域創生人材育成部門　部門員　深作　拓郎…… 1

Ⅱ．事業報告
１．生涯学習教育研究センター主催・共催事業
事業報告・アンケート集計結果 …… 15
２．学部の主催事業など
人文社会科学部 …… 47
教育学部 …… 52
医学研究科 …… 55
保健学研究科 …… 56
理工学研究科 …… 60
農学生命科学部 …… 64
地域社会研究科 …… 67
被ばく医療総合研究所 …… 69
医学部附属病院 …… 70
研究・イノベーション推進機構／研究推進部 …… 83
COI 研究推進機構 …… 86
COC推進室 …… 90
男女共同参画推進室 …… 91
事務局 …… 93

Ⅲ．センター関連規則等
１．センター関連規則 ……109
２．機構・組織 ……114
３．地図・連絡先 ……115

編集後記 ……116

はじめに

弘前大学生涯学習教育研究センターは、1996年（平成８年）５月に開設され、これまで23年間一貫して地元自治体との共催による公開講座の開催を軸に、地域の社会教育・生涯学習の発展の教育研究に努めてまいりました。地域が抱える課題や学習ニーズに応じたさまざまな学習プログラムを提供することで、地域に貢献することができたと自負しております。近年は、対象者を明確にした多様な学習プログラムの開発と提供に特段力を注いでまいりました。とりわけ、共催する自治体とは、実施したプログラムの効果や課題を導き出して次回以降の事業に活かせるよう、面接での省察を取り入れ、評価の工夫にも取り組んでまいりました。

人生100年時代を見据えた経済・社会システムを実現するための政策を検討していくことを目的に総理官邸主導で設置した人生100年構想会議では、2018年６月に『人づくり革命基本構想』をとりまとめました。その中で「大学改革」や「リカレント教育」が提唱されております。これまでは「公開講座」を手段とした大学開放が主でしたが、これからは、さまざまなニーズや学習スタイルに応じた「社会人の学び」の充実が求められることになるでしょう。また、2019年には、自治体で社会教育を推進する「社会教育主事」の養成課程の変更が図られ、新たに「社会教育士」という称号が誕生しました。地域での住民の学習は、従来の社会教育行政や社会教育施設にとどまらず、ＮＰＯや企業などの団体、福祉などの分野と協働して、多様な地域課題に対応する学習活動が盛んとなることでしょう。

しかしながら、かつては25の国立大学に設置されていた生涯学習系のセンターは、地域創生や高等教育を推進する部門との統廃合が図られていき、本学の生涯学習教育研究センターも2020年４月１日には、地域創生本部地域創生人材育成部門へ再編されました。これは大学における生涯学習の教育研究活動を廃止するのではなく、地元自治体や産業界、高等教育機関の連携を強化し、青森県全域の活性化を推進するうえで、これまでの社会人への学習のより一層の促進を図る役割が求められているからです。

新しい組織に移りましても、自治体等との共催による大学公開講座は継続して実施してまいりますので、引き続き、よろしくお願い申し上げます。

さて、今回刊行する年報第23号は、これまでと同じく「Ⅰ論文編」と「Ⅱ事業報告編」で構成されておりますが、生涯学習教育研究センターとして最後の刊行物となることから、これまでセンター長を歴任されてきた先生方からも寄稿いただきました。寄稿してくださいました先生方、お忙しい中ありがとうございました。

2020年７月７日

弘前大学理事（社会連携担当）・副学長　石川　隆洋

センター概略

弘前大学生涯学習教育研究センター（以下、センター）は、1996年（平成８年）５月に設立され、生涯学習に関する教育内容及び教育方法の研究、並びに社会人を対象とする公開講座等の生涯学習事業の実施を目的に設置された。

初代センター長として佐藤三三教育学部教授(1996年５月～2002年３月)が就任された。以降、祇園全録教育学部教授（2002年４月～2004年３月)、浅野清教育学部教授（2004年～2012年)、曽我亨人文社会科学部教授（2012年～2018年)、伊藤成治理事（教育担当）（2018年～2020年）が就任している。

専任教員は、藤田昇治准教授（1996年５月～2017年３月)、高嶋一敏准教授（1996年５月～2001年３月)、斎藤博准教授（2001年４月～2004年１月)、菅世知子准教授（2004年３月～2009年３月)、深作拓郎講師（2009年４月～2020年３月）である。

事務は、発足当初は総務部総務課が担当していたが、近年は社会連携部社会連携課が担当している。

他大学の生涯学習系センターと比較すると、自治体と共催して生涯学習事業(公開講座)を多数実施していることが当センターの特徴である。当初は、対象者を市民・一般とした講演会形式の講座がほとんどであったが、2014年度からは対象者を「専門家」「実践者」「市民･一般」と区分し、とりわけ「専門家」「実践者」を対象とした講座を充実させた。また、受講者同士が交流でき、より能動的に学習ができるワークショップ・ゼミナール形式の講座も積極的に導入していった。

ここ数年の当センターの事業は、公民館職員や社会教育関係職員を対象とした講座（青森市、弘前市)、児童厚生員・放課後児童支援員を対象とした講座（弘前市)、中高校生が大学生の援助を受けて映像制作をする講座（三沢市）などを自治体と共催して実施している。センター主催事業では、地域おこし協力隊を対象とした研修会、地域で子どもに携わる専門家・実践者向けのゼミナールを実施している。2016年度からは学部教員の提案型の公開講座、17年度には学生企画の公開講座も試行的に実施した。このほか、世界遺産「白神山地」とその周辺地域を活用した地域活性化のリーダーの育成を目指した「白神自然環境人材育成講座」を学校教育法の「履修証明制度」に基づくプログラムとして2016年度から開講している。

過去20年の受講者データを見ると中等教育修了者が圧倒的に多く、中学卒業の受講層もみられる。専門家・実践者向けの講座でも、中等教育機関修了者が半数を占める。このような背景を考慮に入れた専門家・実践家向けの学習プログラムを今後も継続して開発していくことが青森県における大学開放・生涯学習における課題である。

弘前大学教育学部講師　兼　地域創生本部
地域創生推進室地域創生人材育成部門　部門員　深作　拓郎

歴代センター長よりご挨拶

古くて新しい生涯学習

初代センター長（教育学部名誉教授）佐藤　三三

弘前大学に『生涯学習教育研究センター』が付置されたのは、1996（平成８）年のことであり、東北では、東北大学、福島大学に次いでのことであった。本来は、四月に開所のはずであったが、国会が荒れて予算が承認されず、五月に延期されるというハプニングもあった。

初代のセンター長に任命され、専任のお二人の助教授と三人で遮二無二走り出した頃のことが懐かしい。当時の大学は学部自治であり、学部の連合体であった。それゆえ、地域の人々には、学部の姿は見えても、学部を統一した全体としての弘前大学の実態はわかりにくかった。我々がまず取り組んだのは、「人文、教育、医、附属病院、理工、農生、医療短大、附属図書館、遺伝子実験施設、総合情報処理センター、地域共同センター」（当時の名称）を統一し、弘前大学としての一つの顔をつくり上げることであった。『センター運営委員会』は、すべての学部･研究施設の代表者をもって構成し『センター年報』には、毎号必ず、すべての学部・研究施設の委員から提言等をいただいた。また、当時の社会問題を切り取って、多彩なテーマを構成し、大学内のすべての教員の中から相応しい教員を割り振り、一講座、五～十回の公開講座をもって県内の市町村にお邪魔した。お陰でたくさんの大学内の先生だけでなく、市町村の職員や受講者の人々とも親しくさせていただくことができた。当時は多忙で、難題も多い毎日であったが、今になって思えば、二度と経験できない貴重な毎日であった。

生涯学習論は、1957年、ソ連（当時）による人類初の人工衛星の打ち上げを機に、米・ソ間に高まった宇宙規模の戦争を回避する方策として、1965年にユネスコが提唱した「成人への学習のすすめ」論である。「社会の加速度的変化」に生涯学習が必要な根拠を求めたが、今は、その時以上に国際関係は流動化した状況にある。また2016年、イギリスの経済学者がライフ・シフト―「100年時代の人生戦略」―（東洋経済新報社）の到来を、生き方・働き方・社会経済の在り方の急激な構造的変化の側面から指摘した。日本政府は、著者を招いて首相以下諸大臣が勉強会を開いている。生涯学習論の世界的再評価であり、今なお、生涯学習（教育）論とその振興は、古くて新しい重要課題であるといえよう。

歴代センター長よりご挨拶

生涯学習教育研究センターと私

３代センター長（教育学部名誉教授）浅野　清

教育学部の教授に昇任して３年が過ぎ、大学の法人化を目前に控えたある日、佐藤三三先生が祇園全禄先生を伴い、私の研究室に来られた。これは学内の委員会委員長就任をお願いされるにちがいない、どう断われば心証を害せずにいられるのか、一瞬目の前が見えなくなるほど頭の中は愚策で一杯になる。佐藤先生が切り出した。「生涯学習教育研究センター長になってもらえないか」というのである。このころ、教養部の廃止、大学院の設置、附置研究施設設置、サテライト設置など、深く関わらないと実態がつかめなくなるほど大学は大きく変貌しつつある状況でした。私もそんな波に飲み込まれて、センターが何処にあるのか、何を目的とした機関かもわからず、ただお二人の先生の顔を見るばかりでした。

「大丈夫、問題なくやれますよ」という言葉に押されて引き受けたものの、８年の就任期間中、何をしても「これで良いのだろうか」と不安な毎日を過ごしました。就任後はとりあえず、継続していた事業をより良いものにするよう取り組みました。毎年開催の講演会案内パンフレット『弘前大学で生涯学習を』作成では、特に誤字・脱字の修正、正しい表記等の確認作業に時間を費やしました。滞っていた年報発刊を該当年度毎に刊行できるようにすること、センターに関係する数少ない教職員間の意思疎通・情報共有を促すことなど、ストレスを感じる時が多かったように思います。それでも、同じ『地域貢献』という使命を担った施設であり個人的にお手本としていた地域共同研究センターとの関りから東京の弘前大学サテライトオフィス開所式に同席できたこと、センター創設 10 周年記念講演会『ひろさき・ひと、そして未来』（'06. ５.12 弘前駅前市民ホール）でセンター教員の藤田昇治・菅世智子・私の３人によるラウンドテーブル「大学って誰でも学べるところなんです」を開催、加えて劇作家の長谷川孝治氏による「地域演劇と県立美術館」の講演をいただけたこと、東京八重洲のホールで弘前大学生涯学習講演会『生涯学習と音楽』（'07. ３．８）の同僚を交えた講演と演奏会を開けたことなど、思い出深い経験もさせていただきました。

演奏の合間に話をすることがあまり得意ではない私でしたが、『生涯学習と音楽』で吹っ切れたのか、講演を含む『レクチャーコンサート』と『ピアノ指導者のためのブラッシュアップ講座』など、私の専門を生かした事業に躊躇なく参加できるようになるなど、私自身が成長することができたことはセンターの担当部局である社会連携課職員の後押しがあったからと、今更ながら痛感しています。

生涯学習教育研究センターがこれまで研究、教育、地域貢献に邁進し、成果を残すことができたことは大きな喜びです。この場を借りて、センター年報発刊に携わったすべての教職員の皆様、学習意欲を持ってセンター主催事業に参加してくださった方々に、元センター長として心より感謝申し上げます。

歴代センター長よりご挨拶

最後の生涯学習教育研究センター年報に寄せて

４代センター長（人文社会科学部教授）曽我　亨

2019年度末、弘前大学生涯学習教育研究センターが23年の幕を下ろしました。私はその終盤の６年間、センター長として運営に関わりました。センター長に就任したのは2012年で、専任教員は藤田昇治先生と深作拓郎先生でした。

最初は、のんびりしていたのですが、12月に学長・理事との意見交換会があり、「生涯学習教育研究センターは、カルチャーセンターではなく、大学らしいセンターになって欲しい。全学的なセンターになって欲しい」と指示されました。そこから苦難の日々が始まりました。

センターの事業をカルチャーセンターと同列に語られたことに傷つきましたが、事業を精査すると、自治体から求められるままに教養講座を開いていたり、毎年、同じ企画を依頼されるなど地域の力量形成が進んでいないことにも気づきました。そこで2013年からは、自治体の請負をするのではなく、自治体の力量形成を進めるという観点から、事業の後に評価書を求め、一緒に事業の改善を図っていくことにしました。

さらに大学らしさを前面に出すために、2014年からはセンターの事業を、①一般住民向けの教養講座等、②地域課題に取り組む実践者向けのゼミナール等、③地域の専門家向けのワークショップ等の３つに整理し、実践者・専門家の能力向上に力を注ぐことにしました。地域の実践者や専門家を支援することで、大学の力を何倍何十倍にも発揮しようというのが狙いです。「地域の子育て／子育ち」に携わる実践者向けのゼミナールや、「地域おこし協力隊員」を対象としたワークショップなどを行いました。

全学的なセンターという点では、各学部から協力教員を募り、企画を考えていきました。そのひとつが「白神自然環境人材」育成講座です。文部科学省が進める「履修証明制度」を活用し、系統的な学習プログラムを設計しました。白神自然環境研究所（現、白神自然環境研究センター）の協力を得て、充実した育成講座になりました。

一方、センターを取り巻く学内環境は大きく変化しました。そのきっかけは、弘前大学が2014年に採択された、文部科学省の「地（知）の拠点整備事業」だと思います。これは地域を志向した教育・研究・地域貢献を支援し、大学を地域コミュニティの中核的存在にしようとするものでした。これを機に、地域志向の大学改革が進み、地域課題に取り組むというセンターの機能は、大学全体へと広がっていきました。

生涯学習教育研究センターが無くなったことは寂しいものの、それは地域志向の大学になった結果なのだと思っています。

歴代センター長よりご挨拶

センター長経験者としてのこれからへの期待

５代センター長（弘前大学教育学部教授）伊藤　成治

現在大学では、文系理系を問わず全学生に、数理及びデータサイエンス教育を実施することが求められています。

現代の社会ではＩＣＴ (Information and Communication Technology) が急速に進化したことによって、多種多様なデータが得られ、膨大なデータが蓄積されています。一般にこのようなデータはビッグデータと称されていますが、データサイエンスはこのようなデータを処理し分析することで新たな知見を導き出すことを目的とした学問分野です。ＡＩやデータサイエンスは、もともと数学や情報処理といった主に理系の学問にルーツをもつ方法論ですが、それらの正しい発展のためには、法学・経済・文化・倫理などの文系と言われている学問の知見も必要不可欠ですし、またそれらの分野でも新しい学問的方法論としてＡＩやデータサイエンスの適用効果が期待されているようです。

ところで、皆さんの中には、中学校数学や高校数学でつまづいて、それ以来数学を敬遠してきた方はきっと多いのではないでしょうか。しかし、なんとかここまで数学なしにやってこれたとしても、「数学はできた方が便利だ」と思うようになっている方もまた多いと思います。数学を勉強する目的や理由はそれぞれでしょうが、ＡＩを始めとする新しい技術の理解に数学は欠かせないものです。

時代の変化とともに、社会が求める知識やスキル、ニーズは刻々と変化していきます。そのため、一度学んだ知識やスキルが、これからも変わらぬ価値があり、社会から求められ続けるものであるかどうかは分かりません。

弘前大学は、教養教育をはじめとして文理融合の考え方が既に浸透した大学です。今年の４月には「文理共創」を理念とした地域共創科学研究科が設置されました。このような大学だからこそ、学際的な観点で多彩な社会人向け講座を運営できると考えます。

私は２年間センター長を務めさせていただきました。最後の仕事は、公印の廃止に係る決裁でした。これからも、生涯学習やリカレント教育を担う組織がどのような形態を取ろうとも、教育研究の成果をもって、生涯にわたる一人一人の「可能性」と「チャンス」の最大化に貢献して欲しいと思います。

Ⅰ．論　文　等

中高校生世代の地域参加の促進に関する一考察

～「こどものまちミニひろさき」の取り組みから（その２）～

深　作　拓　郎

はじめに

筆者は、2019年度より、科学研究費助成金（基盤研究Ｃ、研究代表者：深作拓郎、研究課題：高校生・大学生世代における地域活動への参加促進につながる要因の解明）を受け、子ども・若者世代の地域参加の促進要因の解明を目指した研究に取り組んでいる。具体的には、概ね15歳～18歳の「高校生世代」と概ね18歳～22歳を中心とする「大学生世代」を対象に、彼らが地域社会を舞台に取り組む活動を検証し、主体的な参加と継続的な活動を可能とする原動力を明らかにすることを目的に研究に取り組んでいる。この研究では、彼らは地域において子どもと関わる際、「遊び」を最大の手段として用いていることに着目し、彼らが活動を通して「遊び」の意義や価値、技術などを相互学習する過程をフィールドワークから丁寧に捉えていく。そして、実際に即した子ども・若者の地域参加が促進される要点を明らかにしようとするものである。

本論文では、子どもや若者の主体的な参加を促す取り組みとして筆者がアクション・リサーチとして取り組んでいる「こどものまちミニひろさき」（以下、「ミニひろさき」と称す）の取り組みから、中高校生世代の主体的参画にについて考察する。

１．子ども・若者の地域参画の視座

⑴シティズンシップ教育

社会における子ども・若者世代の参画への関心が高まって久しい。その背景の一つには、1989年に国連総会で採択された「子どもの権利条約」である。「子どもの主体性」や「市民としての子ども」観が浸透していったことなどもあり、2000年代に入り子どもの居場所や主体的参加・参画をより意識した取り組みを必要とする機運が高まっていった。

もう一つの背景には、子ども・若者世代の社会体験・自然体験・生活体験不足や人間関係形成能力の弱さなどの指摘から、中央教育審議会の答申等が出された。以降、学校教育・社会教育の双方から、社会形成・社会参加に関する教育（シティズンシップ教育）が展開されていることが挙げられる。

市民性（シティズンシップ）は、主権者としての市民の在り方を意味するものである。T．H．マーシャルによると、17世紀の市民革命以降に定着した言葉で、市民の資格（権利と義務）や個人的自由を表す「市民的権利」や選挙権や被選挙権などに代表される「政治的権利」、福祉や最小限の安全が護られる「社会的権利」を指すという[1]。すなわち、権利に関する意味を示している。

一方、近年用いられるのは、市民として社会とのかかわり方、課題の発見や解決をめざした行動への能力や資質である。林幸克はいくつかの先行研究を引用しながら、市民権や公民権などの権利に関する権利、市民性や市民的行動の資質や能力に関する意味、この二つの側面があると示している[2]。

これらの市民性の育成を目指した教育活動が「シティズンシップ教育」である。1990

年代頃から注目されはじめた。経済産業省が2006年には『シティズンシップ教育と経済社会での人々の活躍についての研究会報告書』（シティズンシップ教育宣言）を出している。この宣言では、市民性を「多様な価値観や文化で構成させる社会において、個人が自己を守り、自己実現を図るとともに、よりよい社会の実現に寄与するという目的のために、社会の意思決定や運営の過程において、個人としての権利と義務を行使し、多様な関係者と積極的（アクティブに）関わろうとする資質」[3]であると定義づけ、シティズンシップ教育とは「市民一人ひとりが、社会の一員として、地域や社会での課題を見つけ、その解決やサービス提供に関する企画・検討、決定、実施、評価の過程に関わることによって、急速に変革する社会の中でも、自分を守ると同時に他者との適切な関係を築き、職に就いて豊かな生活を送り、個性を発揮し、自己実現を行い、さらによりよい社会づくりに関わるために必要な能力を身につけること」[4]を目的としている。さらには、シティズンシップが発揮される分野として (1)「公的･共同的な活動」、(2)「政治活動」、(3)「経済活動」を挙げ[5]、シティズンシップを発揮するために必要な能力を「意識」「知識」「スキル」と提示している[6]。

近年、「住民自治」への関心も高い。自治体の広域化や行財政改革による行政の地域委託化の進展や少子高齢・人口減少などに伴う都市と地方の偏在などの課題から、既存の地縁型のコミュニティ組織、ＮＰＯなど課題や目的共有・志縁型組織が行政と協働して、地域の潜在した力を十分に発揮するしくみづくりをしようとするものである。東日本大震災や「令和元年房総半島台風」「令和元年東日本台風」など大規模な自然災害が頻発していることなどを背景に、自主防災組織などの構築が急務となっていることも大きい。

橋本将志は、グローバル化による社会の多民族化、多様化の進行などによる政治的な知識やスキル理解を高め政治的なリテラシーを身に付けるための政治教育の側面と、地域の共通課題とその解決法を実践的に学習し、地域社会の再生産を担う人材育成という側面があると論じている[7]。林幸克は、「多文化社会の中で民主主義社会を形成・維持する資質能力」と「『古典的』ボランティア観から「市民的」ボランティア観へのパラダイムの転換期」にあることがその背景にあり、シティズンシップ教育の概念規定が「市民性の概念規定が非常に不明瞭・曖昧になっている」[8]と指摘している。

もう１点触れておきたいのが18歳までの投票権拡大である。2015年６月に「公職選挙法」等の一部が改正され、年齢満18年以上満20年未満の者が選挙に参加することができることとなった（2016年６月19日施行）。実施にあたっては、20歳代の投票率の低さが注目されたこともあり、主権者教育の必要性が唱えられたものである。2011年総務省『常時啓発事業のあり方等研究会最終報告書』において、主権者教育について、「社会参加に必要な知識、技能、価値観を習得させる教育」の中心である「市民と政治のかかわりを教えること」と定義している。

すなわち、「市民性の育成」とは、地域社会のシステムや産業の再生産の担い手として、政治との関わりを学び、社会との関わりに必要な知識や技術、価値観を育成するものであると整理できるだろう。

ここで注目しておきたいのが宮下与兵衛の指摘である。宮下は、戦後日本の学校教育制度は、「生徒参加」は奨励してきたものの、「生徒自治」を認めなかったこと、長年にわたり高校生の政治参加の禁止、教師の政治教育の禁止を示した「69年通達」の影響などを挙

げている。理不尽な校則（いわゆる「ブラック校則」）があり、変えてほしいと思っていても、変わるはずがないという体験を積んでしまっていること、入試にも推薦入試の割合が増加し、進学・就職においても学校の評価が影響してくること、新自由主義社会による「競争と自己責任」「市場原理主義」「貧困と格差」などの影響もあり、若者たちは孤立し、内向きになり、社会に目を向けなくなっていったことを問題点として挙げている。宮下は、話し合いの場に子どもたちが参加して、自分たちの要求を主張し、自分たちが作ったルールを守る責任がある、自分たちが要求して実現したことを大事にするという責任が生じることを体験的に学ぶ機会を設けていくことの重要性を唱えている[9]。

宮下の指摘は、社会を形成する一員としての意識（当事者性）を育むことが重要であり、そのためには身近な学校生活や地域社会との関り、問題や課題に気づき、周囲との協議・議論を重ねて実行に移し、その課題が変容していく一連の過程を10代に経験を重ねていくこと、すなわち、「社会への参加・参画」のしくみづくりを行うとともに、我々大人の意識を変えていかなければならないというものである。

⑵子ども・若者の「参加・参画論」

1989 年 11 月の国連総会において『子どもの権利条約』が採択され、日本でも 1994 年に批准した。批准をめぐる議論の過程から、子どもの社会参加は「権利」としてとらえられるようになった。ここでの「参加」は、木下勇が「子どもが動いて大人が動き出す」[10]と言うように、子どもに関わる社会の課題や問題に対しての改革を、子どもと大人が共同で意思決定をしていく過程への「参画」なのである。

子どもの参画のためのハンドブックとしてまとめられたのが、ロジャー・ハートの著書『子どもの参画』[11] である。ハートは、子どもが地域の環境、しいては地球規模の持続可能な開発のあり方について、調査をし、責任を分担し、みんなで力を出しあう気持ちが子どもには育つということ、それは大人になっても引き続き参画することができるであろうし、政策決定への参画の大切さも理解できるようになるだろうと述べている[12]。それを念頭に置き、単なる社会的動員をなくし、本質的な参画を促す実践の仕組みとしての「アクション・リサーチ」と、それらの実践を省察的に捉える指標としての「参画のはしご」を提起している。萩原建次郎は、この指標について、大人がかかわる子どもの活動の質を問うものであり、省察的にとらえ、次に反映させていく際の指標として実践的な意味を有するのであり、政治的意思決定過程での参画の推進の意味と環境教育（人的環境・自然環境）の意味が内包しており、地球と人間社会の持続可能性への展望を有していると指摘している[13]。

新谷周平は、これまでの「参画」からさらに一歩踏み込み、「社会つながり」と論じている。「参画」に関わるこれまでの議論から、参画とは言わないが参画的な実践があること、逆に「お飾り参画」や「あやつり参画」など、大人側の意図のもとに置かれてしまう危険性もはらんでいることなど、多義性を有していることであることを踏まえつつ、自分たちの「居場所」への意思決定への関与だけでなく、それを取り巻く社会や環境へのつながり、社会との関係性をもつことの必然性を意識してのものである[14]。

そもそも、子どもたちが社会に参画していくための原動力として、「〇〇してみたい」「〇〇してみよう」といった「欲求」や「意欲」が必要である。そのためには、自分自身に関

する知識や特徴を把握する「自己概念（self-concept）」を育成し、自分自身を肯定的に捉える「自尊感情（self-esteen）」を高めていくことが求められる。自己概念の形成において重要なのが「他者」の存在である。梶田叡一は、人間は他者からの評価から自分をイメージして取り込み、自己理解を図るという[15]。すなわち、「意味ある他者」の存在が注目される。この「意味ある他者」に関して、亀山佳明は「社会的オジ」と定義している。亀山は、親とはちがい「メタ・コミュニケーション」（二重切替）が可能な人物であり、身近には、おじ・おばがそれに近い存在であることに着目した[16]。筆者は、子どもの日常生活の領域である「地域」にその存在があることが重要であると考え『地域オジ』と提起している[17]。つまり、社会とのつながり、とりわけ大人との関係性は「子どもの参画」において不可欠な視点なのである。

２.「こどものまちミニひろさき」とは

「こどものまち」は、ドイツ・ミュンヘン市ではじまった「こどものまちミニ・ミュンヘン」が発祥と言われている。この取り組みは、７歳から15歳の子どもたちが自分たちで運営する「遊びのまち」である。現在日本でも多くの文献等でその活動が紹介されている[18]。ミニ・ミュンヘンは、子どもたちが遊びながらまちの運営を体験することを通して、社会の仕組みを学ぶことであり、まちの中には、市長、銀行、ハローワーク、学校、コック、運転手、大工など大人の社会と同様のさまざまな職業が設けられている。子どもたちはまちの中で働いて「ミミュ」というお金を稼ぎ、稼いだお金の一部は税金として徴収され、残ったお金で食べたり遊んだりとまちの中で使ったり、貯金をすることもできる。近年は２年に一度、夏休みの３週間にわたって開催されており、ミュンヘンオリンピックスタジアムにて延べ３万6000人（2004年）が参加する大規模なイベントとなっている。

このミニ・ミュンヘンをモデルとした取り組みとして、2001年に千葉県佐倉市で「こどものまち・ミニさくら」がスタートして日本各地にも広がっていった。

青森県では、弘前と八戸で「こどものまち」を開催している。弘前では、「こどものまちミニひろさき」と称し、大学生や社会人による実行委員会が組織されて運営している。

「ミニひろさき」では、「子どもの主体的参画」を担保し、大人の価値観を極力排除するための工夫をしている。１つが、「保護者の入国禁止」である。それは、子どもたちは、物語の舞台で遊びに夢中になっており、保護者が我が子に声をかけた瞬間、その子は現実の世界に引き戻されてしまうと危惧したからである。

そうなると、「ミニひろさき」をサポートするらぶちるメンバーをはじめ大人が「異質」な存在となってしまうため、スタッフは「先住民族“らぶチアーノ族”」（以下、らぶチアーノ族と称する）に扮して「ミニひろさき」での市民生活を寄り添い・見守り・サポートすることで、大人観を打ち消すため工夫をしていることが２つ目として挙げられる。

３点目が、「こどもスタッフ」（以下、こスタ、と称す）である。弘前市内の小学４・５・６年生を対象に公募し、毎年５～６回の「こどもスタッフ会議」（以下、「こスタ会議」と称す）を開催して、「ミニひろさき」の具体的内容を詰めている。この「こスタ会議」でこスタが自らミニひろさきの企画を練り上げている。

４点目が、過去に「ミニひろさき」のこスタや市民として経験した中高校生世代が「らぶチアーノ族・ジュニア」（以下、ジュニアと称す）として、らぶチアーノ族よりも子ど

もたちに近い存在としてサポートし、世代間交流を図っている。

「ミニひろさき」は、「こスタ会議」で内容が練られる。この会議は、概ね企画と準備で５回、振り返り１回の構成となっている。参加人数は毎年20名前後で推移している。まち当日は冬の時期に２日間開催しており、弘前市を中心に近隣市町村から300名前後の子どもたちが市民として参加している。「こスタ会議」や「ミニひろさき」当日の様子はすでに紹介している[19]ので本論では割愛する。

３．らぶチアーノ族ジュニアの活動

参加者に近いところでサポートしてもらうことにより、大学生世代や社会人だけでなく身近な中高校生をも含めた子どもに寄り添う体制（ナナメの関係）の強化を図り、異年齢交流を促進すること、を目指している。

ジュニア結成のきっかけとなったのが「ミニひろさき vol. ２」の時である。vol. １で市長に立候補した男子が、中学生になった vol. ２の当日２日間手伝いにきた。その姿を間近で見た当時小学６年生の「こどもスタッフ」たちが、中学生になっても「ミニひろさき」に参加したいという要望が出された。これを受けて「ミニひろさき vol. ３」からは公的に「ジュニア」を配置することとした。vol. ３はこどもスタッフ経験者に募集をかけたが、vol. ４からは市民経験者および市内の高等学校にも募集を呼び掛けている。

⑴ジュニア会議

「こスタ会議」がスタートする１か月頃前から「ジュニア会議」が始動する。この会議では、ジュニアの役割やこれからスタートするこどもスタッフ会議の持ち方などについて意見やアイデアを出し合っている。vol. ４以降は「ミニひろさき」未経験者もいるため、こどものまちの概要や「こども主体」についてのイメージを共有することも重視している。

ジュニア会議での一コマ

そして、「ミニひろさき」の約２か月前からはじまる「こスタ会議」において、会議前に１時間、会議後に90分、ジュニア会議を行う。会議前はその日の役割分担や会議の進行・到達目標を確認・共有する。こどもスタッフ会議後には、その日の振り返りとして、こどもスタッフのつぶやき、仕草、出された意見、課題などを共有し、次回の会議等へどう反映させていくか意見をだしてもらい、方向性を考え合っていく。

こスタ会議前のジュニアとのミーティング

「ミニひろさき」当日の約２週間前頃になると「こスタ会議」での検討が大詰めを

迎え、その年の「ミニひろさき」の概要が見えてくる。その頃（例年12月29日）に、らぶチアーノ族（実行委員をはじめ大学生・社会人スタッフ）とジュニアが一堂に会した会議を開催する。ここでは、こどもスタッフ会議で検討してきた内容を共有し、分担した役割ごとに分かれて細部を検討し、その結果を全体で改めて協議して当日を迎える。

⑵こどもスタッフ会議でのジュニアの役割

「こスタ会議」は、公募にて応募してきた小学４年生から６年生が、「ミニひろさき」の内容を検討し具体化させていく。子どもの主体的参画の実現を目指している本実践の真骨頂であるとも言える。

この会議の進行は、基本的にはらぶチアーノ族の大学生が担っている。進行役というよりは、引き出し役という方が適切であろう。具体的には、前回の話し合いのおさらいをして、何について話し合うかおおまかなテーマを投げかけると、こどもスタッフは、自然とグループになって話し合いをはじめる。

こスタの輪にジュニアがそっと寄り添い、話し合いの様子を見守り、必要に応じてアドバイスをしたりしている。ジュニアのほとんどが、こスタの経験者であるので、彼らの「やりたい」という想いや「夢」を形にしたいという気持ちがよくわかるのであろう。らぶチアーノ族よりも、つぶやきや声なき想いを拾うのことに長けている。加えて、こスタは小学生なので、集中力が切れて遊びだす子がいたり時間にルーズになったりするが、彼らの集中力や疲労度合いをみて、休憩をいれたりしている。

「こスタ会議」終了後は、こスタを全員で見送り、振り返りの会議を行う。ここで、こスタのつぶやきや表情なども含め話し合いの内容を共有し、次回の「こスタ会議」の進め方などについて意見交換をする。

ジュニアも自分で羽を作成

こスタ会議でのジュニアの寄り添い

話し合いに疲れたこスタをお相手をするジュニア

⑶ミニひろさき当日でのジュニアの役割

ミニひろさき当日のジュニアの動きはらぶチアーノ族とほぼ同様である。しかし、らぶチアーノ族よりも、市民やこスタに近い存在として役割を発揮していく。具体的には、こスタが起草したおしごと・おみせへのサポート、通称「国営」とか「族経営」と呼ばれている「市役所・かんこうかん」や「ぎんこう」「あそび場」「ステージ」「ラジオ局」などの運営を担っている。そのほか、１日目のオープニングイベントと２日目のファイナルイベントの企画と運営もジュニアが担当している。直近の vol. 5 の例を紹介しよう。

オープニングイベントは、「そもそも、やる必要があるのか」という疑問から検討がはじまった。ジュニアたちは「必要」と判断した。「何のために必要か」という検討に入ると、「初めて来た市民へのレクチャー」「楽しんでもらうための情報提供」「まちのしくみの紹介」などの意見が出された。参加する市民に事前配布する「オフィシャルガイド」とどう連動させるかという問いが生じてきた。また、市民の年齢層が幅広いため、どう伝えるかという点も苦慮した。その結果、「ようこそ」「みんなで楽しもう」「困ったことがあったら羽が生えているらぶチアーノ族とジュニアに聞いてね」の３点を短時間で分かりやすく伝えようという結論に至った。そして、こスタにも紹介や役割を担ってもらい、族・ジュニア・こスタが一体となって「ミニひろさき」を企画してきたことを表現したいというアイデアも登場した。当日は約５分のプログラムにその想いが凝縮したプログラムとなった。

オープニングイベントの様子

休憩中でも市民の相談に応対するジュニア

また、その過程において、vol. 4までこスタであったＫさんから「こスタをやっていた時に羽がうらやましかった。市民とこどもスタッフの違いというか、こスタの目印になるようなものがあると、こスタももっとテンションがあがると思う」とつぶやいた。その瞬間、その場にいたジュニア全員が「確かに！」とうなづき、らぶチアーノ族は「ハッ」とさせられた瞬間であった。Ｋさんのつぶやきは、こどもスタッフたちにも提案され、ジュニア手作りの「腕章」が誕生したのである。

ジュニア発案のこスタ腕章

ファイナルイベントにおいても、「楽しかったね」「また来たいね」という気持ちを共有できる内容にするのと同時に、興奮

さめやらない市民たちが帰宅時に予想される事故を未然に防ぐ対策の両方をどう実現させていくか検討がなされ、市民･こスタ･ジュニア・らぶチアーノ族全員でゲーム大会「300 人キャッチ」とジュニアとこスタがお見送りするアイデアが企画・実行された。

エンディングイベント「300 人キャッチ」

４．ジュニアの振り返りから

⑴ジュニアの振り返りから

「ミニひろさき」が終了してから約２週間後に開催している「こスタ会議」での振り返りの後、ジュニア会議も開催し、ジュニアによる振り返りも行っている。この振り返りは、らぶチアーノ族の大学生が進行し、全体を通しての感想、次回やってみたいこと、ジュニアとして参加する前後での「ミニひろさき」に対する印象の変化、ジュニアの役割などについて話し合いをしている。直近の vol. 5 のジュニア振り返りでは、9 名全員が参加し、さまざまなコメントを発している。コメントの記録は実行委員が書き取りをしている。

■全体の感想について

「スタッフの考えがすごかった。本番うまくいってよかった」「こどもスタッフも市民の子たちもそれぞれ工夫して町を動かしていて、すごいなあと思った」「こスタの勢いに圧倒されすぎてとても体力を使った」「こどものあたまのやわらかさに驚いた」「会議・本番全てにおいてこどもの意見全肯定すごい！！こども楽しそうだったけど、ずっと来てる子は慣れてまちのルールから外れてた？移動販売したりお金もうけすごかった」といった、こどもスタッフや参加した市民に対する印象が多く出されている。

次いで、「市民が楽しそうな雰囲気で帰っていった」「はじめた時はこのままの人数で、成功するのか疑問があったので、終わったときにみんなが楽しいといっていてうれしかった。いろいろな人によりそって仕事ができたので良かった」「みんながニコニコして帰っていったのが良かった」など、「ミニひろさき」全体の感想が多い。そして、こどもスタッフを経験したジュニア（特に中１）からは、「Jr だったけれど、去年と同じように楽しめた」「小さい子と話せた。裏方として、準備をすることで、より子どものまちを楽しめた」「２回しか出られなくてくやしい！今までスタッフとして参加していたが Jr として参加したら、少し年下のスタッフと話しやすくなった」といった、小学生目線から一段ステップアップした目線での意見が出されている。

■次回やってみたいこと

「きちんとラジオ局でのアルバイトの人数を決めておくべきだった」「仕事の予約はなしにする。パスポートに帰る方法を書く欄をつくる」「仕事で雇う人数を増やす。カフェの

やり方、物の置き方」「観光館でのおしごとの内容をもっとはっきり決めておく」「落し物を減らすこと。むかえにきているのに、バスで帰るといっていた人がいること」など、自分が担当したところでの課題を発見し、次への改善案を見いだしている。

このほか、「４～６年生の子にも、もっと働ける場所があっても良かった。次は、子どものまち全体をもっと見たい」「子ども（特に高学年）が遊べる場所を増やす」など、自分の役割だけでなく、「ミニひろさき」全体を見渡して見えた課題を挙げているジュニアのコメントも見られる。総じて、各自が感じとった課題や反省を改善していきたいという、積極的姿勢をみせるコメントが多い。

■ジュニアとして参加する前後での「まち」に対する印象・イメージの変化

「誰でも参加できる。けがをしていたり、いやなことがあったりしても自由に楽しく参加できる」「ただまちを考えてつくって楽しむだけじゃない。こどもスタッフにアイデアを出してみたりするとか、会議を後ろできいていたりするのもよかった」「こどものまちは２日間だけど、たくさん時間をかけて準備していたこと」「楽しそう→ある種の学びの場　こどももおとなもすごいところ～！！！創造力　こどもの自己表現の場」「結構子どもたちがわちゃわちゃやっているイメージだったけれど、しっかりとしたまちが子どもたちでもつくれていてびっくりした」。

これらのコメントから、参加者という当事者から、運営する側としての当事者性がうまれている様子がうかがえる。自由にできることや楽しさの追求だけでなく、創造性や考えを反映させていくこと（主体的参画）に触れているコメントがあることは特筆できる

■改めて、ジュニアの役割とは

「らぶチアーノ族のかわりになっている」「こスタと『こどものまち』にきた子が楽しめるようにサポートすること」「手伝い、裏方、一緒に楽しむ」「らぶちるよりも近くで子どもと接する、こスタのアイデアをいっしょにふくらませる」「大人よりも近い立場で一緒に寄り添う人」「こスタや市民の声を近くできくこと！」「子どもたちの声に耳をかたむけること」「マスコット的な物。時に見回り、時に一緒に遊んだりするため」「優しいでもちょっと怖い、大人」「子どもをまとめるだけじゃなく、一人になっても安心させられること？かな」「族　Jr　こども　クッションみたいな　両方の視点から見れる」「小学生の気持ちになって考えてあげる（気くばりができる）」。

以上のことから、参加者から運営者の側へ意識が移行していることが伺える。とりわけ、サポートする側になるのと同時に、「ミニひろさき」経験者として、あるいはらぶチアーノ族よりも参加者に近い立ち位置としての関わり方について言及している点が興味深い。実践を重ねていく中で、自分たちの役割を見いだしていることが示唆された。

⑵考察

市民やこスタである小学生だけでなく、この取り組みに対する中高校生世代の熱量も相当なものであることがお判りいただけるだろう。彼らがそうなる背景を考えていきたい。

彼らと活動をしている際、「自由にできる」「考えることができる」「楽しい」というつぶやきをよく聞く。これは、前項で紹介したコメントとも通底しており、明らかに、一人

ひとりが「当事者」になっている。それは、義務や付き合いではなく、自分の意志で参加してきていることが大きい。大半が経験者であることから、「ミニひろさき」の魅力を十分に理解し、続けて関与していきたいという想いが原点にあろう。「ミニひろさき」未経験の参加もあるが、差異はみられない。

では、なぜ彼らは当事者性が芽生えたのかいうと、「自分たちで役割を見い出している」「試行錯誤できる（失敗を失敗としない）」ことが挙げられる。自分たちの役割を考えるところから会議がはじまり、「こスタ会議」、「ミニひろさき」当日も自分たちが見いだした役割を発揮している。自分たちで創り出しているので、当然試行錯誤していかなければならない。課題として出されたコメントは、その成果や気づきなのである。

そして、「なんでも言える雰囲気」「自分たちのペース」が護られる関係性が築けていることもある。もちろん相手を傷つける発言は許されないが、アイデアや知恵を出しあって対話を重ね一つひとつ創りあげていく過程が担保されている。そして、市民－こスター－ジュニア－らぶチアーノ族間での対等な関係性（水平構造）が創られている。かつ彼らのペースで進められる（むやみに急かされない）点もその要因かと考えられる。

さらに、彼らは市民やこスタへのまなざしが形成されている。彼らのつぶやきやしぐさから、自分たちがどうすれば良かったのかという問いもみられ、「次世代へのまなざし」が形成されていることも伺える。

この実践は、子どもたち自身が検討・考察し、意思決定をしていくという一連のプロセスを可能な限り子どもたち自身が行うという、「決定権への参画」に主眼を置いている。とりわけ、こどもスタッフの活動は、「決定権への参加」であり、自分自身だけでなくまち当日に来場する同世代の参加者を意識した「最善の利益」を決めるプロセスの中枢を担っている。また、それらの活動を支えるジュニア自身も、単なるサポーターやお手伝いではなく、自分自身も「ミニひろさき」を形成する一員となっていることがわかる。

毎回こスタ会議の終了後や「ミニひろさき」当日の振り返りとして開催するジュニア会議に関与していて感じることがある。彼らのコメントにも表れているのだが、単に事実や情報の共有だけではなく、課題克服も含め先を見通した意見やアイデアが提案されてくる。それがファンタジー性に満ちているのだ。まさしく、エピソードとファンタジーが織りなしていると言えるだろう。

以上のことから、中高校生世代の地域参加活動促進の要因として、当事者性・主体性が形成されていくことが前提としてあり、そのためには、「役割を見いだす」「試行錯誤できる」「何でも言える対等な関係性」「自分たちのペースで展開できる」「異年齢交流が促進される」、というポイントがあることがこの実践から示唆された。

５．おわりに―今後の課題

本稿では、こどものまちミニひろさきに参画する中高校生世代の「らぶチアーノ族ジュニア」の実践について整理し、中高校世代の地域参加活動の促進要因について検討した。

この実践は、職業体験ではない。「まちごっこ『遊び』」である。やや乱暴な言い方をすれば（狭義の）教育目的も設定していない。阿比留久美は大村璋子の遊び論を援用しながら遊びを「子どもにとって生きること、他者や自然とかかわることそのものです。子どもの自発性や主体性が大切にされる遊びは、細かな『教育的効果』に還元されるようなもの

ではなく、子どもが生きることそのものを支えるもの」[20]と冗長性を有するものであると論じている。さらに阿比留は、学校や教員がお膳立てしておこなわせる「体験学習」における学びの限界性を指摘したうえで、自らの意識に基づいて参加・参画していくなかで、能動的に学びあうことの可能性を唱えている[21]。

「ミニひろさき」の取り組みは、保護者の入国は「原則禁止」としており、大人の関与はらぶチアーノ族に限定されており、保護者（大人）からすれば「あいまい性」をより強めている。すなわち、「ミニひろさき」のような活動は、あいまいで冗長的な世界だからこそ「居場所」的意味を有しているともいえるのだ。

参加する市民はもちろんのこと、こスタ、ジュニア、いずれも自発的参加が原則である。とりわけ、こスタやジュニアは、隔週で開かれる会議に参加し、自分たちで知恵やアイデアを出し合い、一つひとつ課題をクリアしてミニひろさきを創りあげていっている。西川正は、公共はつくるものではなく「発生する」ものだとした上で、「答え合わせではなく、応えあっていく」間柄を構築していくことが重要であるとして、「円卓のある文化」（集い・議論をして・持ち寄り・分かち合う）活動を提唱している[22]。まさしく公共が発生しているのだ。「学び／学習」の枠におしこめるのではなく「遊び」のなかで行えることの豊かさをもたらしている。まさしく、「学びのコミュニティ」を自らの手で具体化しているといえるだろう。

ジュニアとの関わりのなかで１点気になったことがある。vol. 5の振り返り会議の時に「おいちゃん、もっと遊びに来てほしかった」「らぶチアーノ族にはもっと休んでほしい」というつぶやきを聞いた。これまで、この取り組みでは、子どもの主体的参画に主眼をおいてきた。大人の価値観や意見を極力排除し、子どもたちの想いやアイデア考えを形にしていくことに意義を置いてきた。ジュニアのつぶやきは、子どもの主体的参加の機会や空間において、大人の関りについても検証しなければならないことを示唆している。静岡県富士市で子どもの居場所を運営している渡部達也は、「子どもと遊ぶのが好きではなく、子どもが遊ぶのが好き」という感覚が求められているという[23]。その背景には、「年齢も国籍も障害の有無」「支援する側・される側という関係性もなく」「何気ない日常を積み重ねていく」ことが大切であるからだという[24]。西川正は「お客さま化」するのではなく、顔を合わせ、対話し、揺れ、持ち寄るなどの過程こそに当事者性を育み「協働」が発生すると述べている[25]。それらに通底していることは、支援対象者として子どもと関わるのではなく、「一人の人」として関わっていくスタンスが大事さを示している。阿比留は「隣る人」と呼び、そばに大人がいること、そして想いやつぶやきを汲み、機を逃さずに応答する存在の意義を唱えている[26]。原京子が提起する「チャイルド・ファシリテート」のスキル形成とも重なってくる。

ただし、渡部や原の提起では、「日常の中」での子どもとの関わり合いを前提としている。「ミニひろさき」の取り組み自体は、市民やこスタにとっては明らかに「非日常」の世界である。しかしながら、ジュニアたちは「みんなと会いたい」と「ミニひろさき」以外でも集まる機会が増え、新たな取り組みをはじめたいと構想を練りはじめている。学年も学校の違う彼らが集いたいと思う背景には何があるのだろうか。そして、ジュニアのつぶやきは、我々らぶチアーノ族の大人は「隣る人」としての役割を果たしているのか、更なる資料の詳細な分析が必要である。今後もフィールドワークを通して明らかにしていきたい。

本論文は、科学研究費助成事業（基盤C 研究代表者 : 深作拓郎　研究期間2019年～2032年）「高校生・大学生世代における地域活動への参加促進につながる要因の解明」の研究活動の一つとして執筆した。

（注）

1　T．H．マーシャル『シティズンシップと社会的階級』法律文化社、1993年
2　林は、矢吹芳洋やシティズンシップ教育研究会などの先行研究を引用しながら説明している。詳しくは、林幸克『高校生の市民性の諸相』学文社、2017年、ｉ～iv頁を参照されたい。
3　経済産業省シティズンシップ教育と経済社会での人々の活躍についての研究会編『シティズンシップ教育と経済社会での人々の活躍についての研究会報告書』、2006年、20頁。
4　前掲３、20頁。
5　前掲３、20～22頁。
6　前掲３、23～28頁。
7　橋本将志「日本におけるシティズンシップ教育のゆくえ」『早稲田政治公法研究』第101号、63頁。
8　前掲２、iii頁。
9　詳しくは次の文献を参照されたい。宮下与兵衛『高校生の参加と共同による主権者教育』、かもがわ出版、2016年。宮下与兵衛編『地域を変える高校生たち』かもがわ出版、2014年。
10　木下勇「なぜ子ども・若者の参画なのか」子どもの参画情報センター編『子ども・若者の参画―R. ハートの問題提起に応えて』、萌文社、2002年、23～25頁。
11　ロジャー・ハート著、木下 勇・田中治彦・南 博文（監修）『子どもの参画―コミュニティづくりと身近な環境ケアへの参画のための理論と実際』萌文社、2000年。
12　前掲 11、15頁
13　萩原建次郎「子ども･若者の参画の必要性」萩原元昭『子どもの参画―参画型地域活動支援の方法』、学文社、2010年、10～17頁。
14　新谷修平「序説―居場所・参画・社会つながり」子どもの参画情報センター編『居場所づくりと社会つながり』、萌文社、2004年、７～12頁。
15　梶田叡一「自己理解の発達過程」梶田叡一編『自己意識の発達心理学 (オンデマンド版)』、金子書房、2011年、１～31頁。
16　亀山佳明「子どもの社会化と準拠者」柴野昌山編『教育社会学を学ぶ人のために』世界思想社、1985年、93～110頁。
17　深作拓郎「子どもの育ちと地域の教育力―21世紀初頭にみる子どもの育ちと地域の課題」白井慎監修小木美代子・姥貝壮一・立柳聡編『子どもの豊かな育ちと地域支援』、学文社、2002年、45頁。
18　一例として、木下勇・卯月盛夫・みえけんぞう編『こどもがまちをつくる―「あそびの都市 - ミニ・ミュンヘン」からのひろがり』、崩文社、2010年。
19　深作拓郎・岸本麻依編『大学生が本気で考える子どもの放課後』学文社、2018年。深作拓郎「子どもの主体的参画としての『こどものまち』実践の可能性～『こどものまちミニひろさき』４年間の取り組みから～」『弘前大学生涯学習教育研究センター年報第21号』2019年、を参照されたい。
20　阿比留久美「大学発の子どもの地域活動の可能性―楽しい！大変！くせになる“らぶちる”」前掲19、115頁。
21　前掲19、116頁
22　西川正『遊びのうまれる場所』ころから、2017年、210～277頁。
23　渡部達也「子どもたちの豊かな育ちを大らかに見守る共感の輪」子育ち学ネットワーク編『なぜ、今「子育ち支援」なのか―子どもと大人が育ちあうしくみと空間づくり』学文社、2008年、117～118頁。
24　渡部達也「何気ない日常を重ね続ける」教育科学研究会編『教育』2020年６月号、旬報社、70～75頁
25　前掲22、38頁。
26　阿比留久美「自分で選ぶ自分の『居場所』―子ども・若者と大人のかかわりかた」、教育科学研究会編『教育』2020年６月号、65～66頁。

深作　拓郎（ふかさく　たくろう）　弘前大学教育学部講師　兼　地域創生本部地域創生推進室地域創生人材育成部門

Ⅱ. 事　業　報　告

１．生涯学習教育研究センター主催・共催事業

県内自治体との共催事業

弘前市公民館関係職員研修会（全３回）

参加人数：延べ 145 人

主　催・共　催	弘前大学生涯学習教育研究センター・弘前市教育委員会
会　　場	①弘前市中央公民館岩木館　②弘前市総合学習センター ③弘前文化センター
対　象　者	公民館職員、生涯学習担当職員、社会教育委員
実　施　概　要	少子高齢化に伴い、健康問題や教育問題、地域活性化、住民の「絆づくり」など、様々な課題が生じています。こうした中で、地域連携の実践例などをもとに社会教育・生涯学習の担当職員として必要とされる専門的知識・企画立案等の技能の修得による資質向上を目指します。

日　　時	講　　師	所　　属	演　　題
①６月10日（月） 13:30～16:00	野口　拓郎	弘前市公民館活動等活性化アドバイザー	「お互いの事業計画に学びあおう」
②８月30日（金） 13:30～16:00	伊勢　みゆき	特定非営利活動法人 まなびのたねネットワーク 代表理事	「『ぐだめき』から学ぶ学校との連携」
③12月20日（金） 13:30～16:00	野口　拓郎 永井　温子	弘前市公民館活動等活性化アドバイザー 弘前市地域おこし協力隊（NCL 弘前）	「地域おこし協力隊と公民館の連携」

①「お互いの事業計画に学びあおう」　　参加者：54 人

講師：野口　拓郎（弘前市公民館活動等活性化アドバイザー）

【アンケート回答：45 人】

受講者の割合

20 代	3 人
30 代	3 人
40 代	8 人
50 代	14 人
60 代	16 人
70 代	1 人
無回答	0 人

受講者の割合

	よく理解できた	まあまあ理解できた	ふつう	難しい	無回答
理解度	18 人	25 人	1 人	0 人	1 人
内　容	15 人	27 人	2 人	0 人	1 人
資　料	12 人	30 人	1 人	0 人	2 人
話し方	18 人	24 人	2 人	0 人	1 人
雰囲気	17 人	23 人	2 人	0 人	3 人

②「『ぐだめき』から学ぶ学校との連携」　　参加者：44 人

講師：伊勢　みゆき（特定非営利活動法人まなびのたねネットワーク代表理事）

【アンケート回答:38 人】

受講者の割合

20 代	1 人
30 代	1 人
40 代	5 人
50 代	9 人
60 代	19 人
70 代	3 人
無回答	0 人

受講者の割合

	よく理解できた	まあまあ理解できた	ふつう	難しい	無回答
理解度	18 人	17 人	1 人	1 人	1 人
内　容	16 人	18 人	2 人	0 人	2 人
資　料	16 人	18 人	1 人	0 人	3 人
話し方	24 人	13 人	0 人	0 人	1 人
雰囲気	18 人	18 人	0 人	0 人	2 人

③「地域おこし協力隊と公民館の連携」　　参加者：47 人

講師：野口　拓郎（弘前市公民館活動等活性化アドバイザー）

永井　温子（弘前市地域おこし協力隊（ＮＣＬ弘前））

【アンケート回答:39 人】

受講者の割合

20 代	2 人
30 代	2 人
40 代	5 人
50 代	8 人
60 代	20 人
70 代	1 人
無回答	1 人

受講者の割合

	よく理解できた	まあまあ理解できた	ふつう	難しい	無回答
理解度	16 人	20 人	2 人	0 人	1 人
内　容	7 人	25 人	5 人	0 人	2 人
資　料	9 人	22 人	5 人	1 人	2 人
話し方	15 人	21 人	1 人	0 人	2 人
雰囲気	15 人	20 人	0 人	0 人	4 人

令和元年度　弘前市公民館関係職員研修会についての省察

弘前市教育委員会　生涯学習課　藤田　真徳

①企画・構想について

弘前市公民館関係職員研修会は、社会教育・生涯学習の担当職員として必要とされる専門的知識・企画立案等の技能の習得や資質向上を目指して実施しております。今年度の研修会は、地域おこし協力隊やコミュニティスクールのコーディネーターを講師に依頼し、弘前市以外の情報や事例を知る機会となる研修とすることができました。

またテーマも社会教育と密接に関わる「地域づくり」「地域と学校との連携」を取り上げ、受講者のアンケートでも「業務の参考になる」など、これからの業務へのヒントを得た職員も多く、受講者の興味を惹き付けた企画、内容であったと感じております。

②準備過程について

生涯学習教育研究センター様と早い段階から打ち合わせをさせていただいたことで、準備を円滑にすすめることができました。また、事前に講師ともお話しさせていただいたので担当者としても研修のイメージがしやすく大変助かりました。

③事業について

例年、100名に満たなかった受講者が150人近くまで伸び、職員の研修に対する意識が変わってきていると感じています。アンケートに自分の感想や意見を記入する受講者も多く、また、講師に対し積極的に質問する受講者も見られ、意欲的に取り組めたと思っております。

④達成度・到達度について

アンケート結果では、好意的なコメントも多く、「理解できた」「役に立つ」が大半であり、受講者たちにとっては有意義な研修であったと思います。目標としている社会教育・生涯学習の担当職員として必要とされる専門的知識の習得や資質向上にもつなげることができ、目的は概ね達成できたと感じています。

⑤今後の課題・展望について

アンケートでも、今後も「地域おこしや地域活性化の事例」などを取り上げてほしいとの声もあったので今年度同様に様々な事例や情報を盛り込み、知識などを深めることも継続していきたいと考えています。

しかし、その一方で、新たに公民館職員となった方も増えていますので生涯学習の概念等を知る機会をつくることも必要と感じています。

県内自治体との共催事業

青森市社会教育関係職員スキルアップ研修会（全３回）

参加人数：延べ58人

主　催・共　催	弘前大学生涯学習教育研究センター・青森市教育委員会
会　　場	①②青森市教育研修センター　③青森市中央市民センター　大会議室
対　象　者	市民センター、公民館等職員、学校支援･放課後子ども教室コーディネーター、生涯学習推進員、社会教育委員
実　施　概　要	市民センター・公民館における社会教育活動を充実するため、社会教育事業の実施に必要な実践的な知識及び技術等について研修を行うことで、市民センター・公民館関係職員の資質の向上を図ります。また、地域関係団体などが公民館との連携について、ともに学習することで、より実効性の伴った研修とします。

日　　時	講　　師	所　　属	演　　題
①６月17日(月) 13:30～15:30	深作　拓郎 松本　大	弘前大学生涯学習教育研究センター　講師 弘前大学教育学部　准教授	「地域における公民館の意味を改めて考えよう」
②７月８日(月) 13:30～15:30	土井　良浩	弘前大学大学院地域社会研究科　准教授	「公民館にできる地域づくりを考えよう」
③９月26日(木) 13:30～16:00	深作　拓郎 土井　良浩 松本　大	弘前大学生涯学習教育研究センター　講師 弘前大学大学院地域社会研究科　准教授 弘前大学教育学部　准教授	「地域を元気にする企画をつくろう」

①「地域における公民館の意味を改めて考えよう」　　参加者：26 人

講師：深作　拓郎（弘前大学生涯学習教育研究センター　講師）

松本　　大（弘前大学教育学部　准教授）

【アンケート回答:16 人】

受講者の割合

20 代	1 人
30 代	0 人
40 代	2 人
50 代	5 人
60 代	7 人
70 代	1 人
無回答	0 人

受講者の割合

	よく理解できた	まあまあ理解できた	ふつう	難しい	無回答
理解度	4 人	7 人	3 人	0 人	2 人
内　容	3 人	8 人	3 人	0 人	2 人
資　料	4 人	7 人	3 人	0 人	2 人
話し方	4 人	10人	0 人	0 人	2 人
雰囲気	4 人	8 人	2 人	0 人	2 人

②「公民館にできる地域づくりを考えよう」　　参加者：16 人

講師：土井　良浩（弘前大学大学院地域社会研究科　准教授）

【アンケート回答:15 人】

受講者の割合

20 代	0 人
30 代	0 人
40 代	1 人
50 代	4 人
60 代	9 人
70 代	1 人
無回答	0 人

受講者の割合

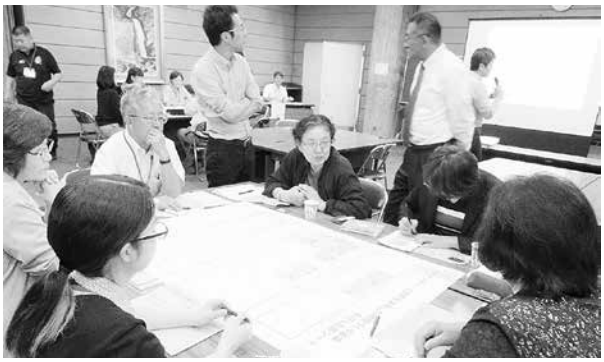
	よく理解できた	まあまあ理解できた	ふつう	難しい	無回答
理解度	1 人	11 人	3 人	0 人	0 人
内　容	2 人	10 人	3 人	0 人	0 人
資　料	1 人	10 人	4 人	0 人	0 人
話し方	3 人	11人	1 人	0 人	0 人
雰囲気	0 人	11 人	3 人	1 人	0 人

③「地域を元気にする企画をつくろう」　　参加者：16 人

講師：土井　良浩（弘前大学大学院地域社会研究科　准教授）

深作　拓郎（弘前大学生涯学習教育研究センター　講師）

松本　　大（弘前大学教育学部　准教授）



【アンケート回答:16 人】

受講者の割合

20 代	1 人
30 代	1 人
40 代	2 人
50 代	6 人
60 代	5 人
70 代	1 人
無回答	0 人

受講者の割合

	よく理解できた	まあまあ理解できた	ふつう	難しい	無回答
理解度	8 人	6 人	2 人	0 人	0 人
内　容	10人	5 人	1 人	0 人	0 人
資　料	7 人	8 人	1 人	0 人	0 人
話し方	10人	5 人	1 人	0 人	0 人
雰囲気	13人	1 人	2 人	0 人	0 人

「青森市社会教育関係職員スキルアップ研修会」内容評価について

青森市教育委員会　事務局文化学習活動推進課　三浦　一志

本事業は、市民センター・公民館における社会教育活動を充実するため、職員として社会教育事業の実施に必要な基礎的かつ実践的な知識及び技術等について研修を行い、市民センター・公民館関係職員の資質の向上及び相互の連携を図ることを目的としています。

①企画・構想について

本年度の研修会は、昨年度までの研修内容を踏まえつつ、地域の方にも参加していただき、地域づくり・地域活性化に欠かすことのできない地域関係団体との連携のあり方や、地域の底上げを考える機会にするべく、「地域の拠点機能としての市民センター･公民館」について考える実践的な内容となりました。

②準備過程について

年度途中と新年度の事業担当者及び分担事務の変更に伴い、昨年度までの研修内容や３月に実施した打ち合わせでの検討事項等が正確に反映できませんでした。また、年度初めの事務繁忙等により、市民センター・公民館職員への周知が遅れたこと、さらに、当初想定していた地域の方や地域団体への周知方法が不可能となったことなどから、結果的に参加希望者が集まりませんでした。

③事業について

３回連続講座として開催しました。１回目は「地域における公民館の意味」を改めて考え、実際に市民センターを利用している団体の代表者を交えての意見交換を行いました。２回目は「公民館にできる地域づくり」として、事例紹介と「自分と地域づくりの今後の関わりを考える」演習を行いました。３回目は、１回目・２回目の研修を踏まえ、「地域を元気にする企画をつくろう」をテーマに、マグネットテーブル方式により「地域で子育て」「異世代交流」「高齢者の交流」の３グループに分かれ、事業のアイディア、将来像などについて話し合い、発表しました。

市民センター・公民館はそれぞれの地域における課題解決や地域づくり・地域活性化の拠点としての役割があること、また、実際の事例紹介やワークショップなどにより、全３回に参加することにより、事業担当課としては、特に市民センター・公民館職員のスキルアップにつながる内容であったものと考えます。

④達成度・到達度について

メインターゲットである市民センター・公民館職員からは、「シフトの関係で出席は難しい」「研修内容が高度であり､必要とするものと違う」「勉強にはなるが､実践は難しい」などの声があり､研修テーマと参加者のニーズがマッチしていなかったように感じました。

⑤今後の課題・展望について

平成 27 年度から実施している本事業については、参加者の減少や一定の成果があった

ものと考え、今年度で終了することとします。今後は、県などが主催する研修会への参加、市生涯学習推進員の訪問等による支援、市民センター・公民館職員による情報交換会などにより、引き続き職員の資質向上に努めていきたいと考えます。

県内自治体との共催事業

むつ市放課後こども総合プラン指導員等スキルアップ研修会（全１回）　参加人数：延べ35人

主　催・共　催	弘前大学生涯学習教育研究センター・むつ市教育委員会
会　　場	むつ市中央公民館　講堂
対　象　者	放課後子ども教室関係職員、放課後児童支援員、児童館職員 等
実　施　概　要	放課後子ども教室教育活動サポーター、コーディネーターを中心として、放課後児童クラブの指導員や児童館スタッフ等を対象に特別な支援を要する子どもへの関わり方や、保護者との連携について学ぶ機会とします。

日　　時	講　　師	所　　属	演　　題
6月23日（日） 【講義】 10:00～12:00 【演習】 13:00～14:30	木戸　玲子	京都市修徳児童館　館長	「子どもにとって心地よい放課後にしていくために」

「子どもにとって心地よい放課後にしていくために」　参加者：35 人

講師：木戸　玲子（京都市修徳児童館　館長）

【アンケート回答:33 人】

受講者の割合

20 代	3 人
30 代	1 人
40 代	6 人
50 代	13人
60 代	7 人
70 代	1 人
無回答	2 人

受講者の割合

	よく理解できた	まあまあ理解できた	ふつう	難しい	無回答
理解度	21人	9 人	2 人	0 人	1 人
内　容	20人	12人	1 人	0 人	0 人
資　料	12人	19人	0 人	0 人	2 人
話し方	23人	8 人	1 人	0 人	1 人
雰囲気	22人	8 人	1 人	0 人	2 人

むつ市放課後こども総合プラン指導員等スキルアップ研修会内定評価

むつ市教育委員会　生涯学習課　倉光　伸

①企画・構想・ねらい

放課後子ども教室関係者より、特別な支援を要する子どもを中心に多種多様な子どもたちへの対応が複雑化しており、保護者との連携について難しいという意見が挙がっていた。そのため、放課後の児童に関わる方（放課後子ども教室、放課後児童クラブ、児童館）等を対象に特別な支援を要する子どもへの関わり方や、保護者との連携について学ぶ機会を設けることとした。

②準備

弘前大学生涯学習教育研究センターより講師の人選、派遣の手続きなどの協力を得ながら、役割分担を明確にした上で準備を進めることができた。

③事業（研修会）

ほぼ１日日程で日曜日の開催にも関わらず、放課後の支援に関わる若い世代を含めた多くの方の参加があった。研修会の内容について、午前の講演会は、講師の話し方に人を惹きつける力、自身の実体験を伝える力があり、より現実的に子どもの様子や取り巻く環境について深く知る機会となった。

午後の演習では、グループワーク形式により、放課後子ども教室や放課後児童クラブに関わっている方同士で、現状を出し合い、情報共有ができており、意見を出しやすい環境であったことが伺えた。

④達成度・到達度

アンケート調査より、「印象に残ったこと、気が付いたこと」の設問に対して「子どもの立場になって考えるということに気付かされた」というような、自分の状況と照らし合わせて記述している方が散見された。また、「これからどのように活かしていきたいか」への記述量が多く、参加者それぞれに視野が広がり、対応の仕方についてプラスになったと感じる。

⑤今後の課題・展望

年々特別な支援を要する子どもの数も増えているようであり、今後も対応に苦労する場面があると思われるため、このような子どもに対する関わり方などの研修会を一過性で終わらせず、継続的に開催していくことが必要である。

県内自治体との共催事業

中泊町放課後児童クラブ指導員スキルアップ研修会（全２回）

参加人数：延べ18人

主　催・共　催	弘前大学生涯学習教育研究センター・中泊町
会　　場	①②中泊町役場
対　象　者	中泊町放課後児童クラブ指導員
実　施　概　要	放課後児童クラブの指導員を対象に、子ども達が心地よい環境で放課後を過ごせるように、また、親が安心して子どもを預けることができるようにどのようなことができるかを学びます。

日　　時	講　　師	所　　属	演　　題
①７月４日（木） 14:00 ～ 18:00 ７月５日（金） 10:00 ～ 12:00	水野　かおり	一般財団法人児童健全育成推進財団　参事	「こどもにとって適切な放課後児童クラブの運営と環境のあり方について」
②９月20日（金） 10:00～12:00	渡邊　由貴	宮城県名取市下増田児童センター　館長	「災害時・非常時における放課後児童クラブでの子ども支援と対応について」

①「こどもにとって適切な放課後児童クラブの運営と環境のあり方について」　参加者：９人
講師：水野　かおり（一般財団法人児童健全育成推進財団　参事）

【アンケート回答：９人】

受講者の割合

20 代	０人
30 代	０人
40 代	２人
50 代	５人
60 代	２人
70 代	０人
無回答	０人

受講者の割合

	よく理解できた	まあまあ理解できた	ふつう	難しい	無回答
理解度	６人	３人	０人	０人	０人
内　容	６人	３人	０人	０人	０人
資　料	５人	４人	０人	０人	０人
話し方	７人	２人	０人	０人	０人
雰囲気	６人	３人	０人	０人	０人

②「災害時・非常時における放課後児童クラブでの子ども支援と対応について」 参加者：９人
講師：渡邊　由貴（宮城県名取市下増田児童センター　館長）

【アンケート回答：９人】

受講者の割合

20 代	０人
30 代	０人
40 代	１人
50 代	５人
60 代	３人
70 代	０人
無回答	０人

受講者の割合

	よく理解できた	まあまあ理解できた	ふつう	難しい	無回答
理解度	７人	２人	０人	０人	０人
内　容	９人	０人	０人	０人	０人
資　料	４人	４人	１人	０人	０人
話し方	８人	１人	０人	０人	０人
雰囲気	７人	２人	０人	０人	０人

中泊町学童保育指導員スキルアップ研修会を終えて

中泊町福祉課　秋田谷　竜一

放課後児童クラブ（学童保育）の指導員を対象に、子ども達が心地よい環境で放課後を過ごせるように、また親が安心して子どもを預けることができるようにどのようなことができるかを学ぶ機会として２回研修を行った。

１回目は「子どもにとって適切な放課後児童クラブの運営と環境のあり方について」をテーマに水野かおり先生に普段の現場を見ていただき、アドバイスをもらうことによって、子ども達にとってのよりよい環境づくりを考える機会となった。

２回目は「災害時・非常時における放課後児童クラブでの子ども支援と対応について」をテーマに、渡邊由貴先生が実際に東日本大震災で体験した話を聞くことができた。

今回も参加者は２回の研修と通して多くの事を学び、現場へ活かすことができている。子ども達にとってのよりよい放課後の環境や、災害時のことを考えて部屋の配置を変えたり、新たに必要なものを準備したりしている。まだまだ、改善できることはあると思うが、１つずつ確実に行っていきたい。

県内自治体との共催事業

夏休みサマースクール in 弘大　　参加人数：３人

主　催・共　催	弘前大学生涯学習教育研究センター・中泊町教育委員会		
会　　場	弘前大学内		
対　象　者	中泊町内の中学３年生		
実　施　概　要	中泊町内の中学３年生を対象に、弘前大学オープンキャンパスに参加することで、大学をより身近に感じ、またさまざまな体験をすることにより、青少年のキャリア形成を図ります。		
日　　時	講　　師	所　　属	演　　題
８月10日（土） 10:00～14:00	深作　拓郎	弘前大学生涯学習教育研究センター　講師	「夏休みサマースクール in 弘大」

「夏休みサマースクール in 弘大」　　参加者：３人

コーディネーター：深作　拓郎（弘前大学生涯学習教育研究センター　講師）

夏休みサマースクール in 弘大　内容評価

中泊町教育委員会　社会教育課　社会教育係　田中　寿和

①企画・構想

西北五地域には大学がないため、子どもたちに大学をより身近に感じさせることにより、今後の進路選択及び目標設定する機会、また様々な体験をすることにより青少年のキャリア形成を目的として実施した。

②準備過程について

大学との実施内容の確認、連絡調整。管内２中学校３学年を対象とし、学校を通してチラシを配布し参加者を募った。

③事業について

大学生を交えて、オープンキャンパス内のどこへ向かうか案内パンフレットを元に考えて、またオープンキャンパス内での体験活動をすることで世代をこえた交流や大学内の取り組みなどを学ぶことができた。

また、オープンキャンパスを見るだけではなく、オープンキャンパスの始まりと終わりのまとめでの大学生との会話により、大学内や生活などの話を聞くことでより現実的に大学

をイメージしていたように感じる。

④今後の課題・展望について

社会教育事業に参加したことがない子どもが参加するなど注目度が高く、参加者の感想からも満足度も高い事業だと感じます。中学生から大学を体験でき、キャリア教育の観点からも進路の一助を担えたと感じる。

しかしながら、その先である就職など夢を果たすために、その結果この学部を目指すなどオープンキャンパスだけではなく、早期に今後の人生設計ができるような事業を行いたいと考える。

県内自治体との共催事業

中泊町社会教育課研修会「中泊町の社会教育の更なる進化に向けて」　参加人数：延べ８人

主　催・共　催	弘前大学生涯学習教育研究センター・中泊町教育委員会		
会　　場	中泊町総合文化センター「パルナス」		
対　象　者	中泊町教育委員会社会教育課職員及び社会教育委員		
実　施　概　要	中泊町教育委員会社会教育課職員及び社会教育委員を対象として社会教育をテーマとした勉強会を開催し、情報共有や意見交換をすることで社会教育職員のスキルアップを図ります。		
日　　時	講　　師	所　　属	演　　題
11月１日（金） 10:00 ～ 12:00	深作　拓郎	弘前大学生涯学習教育研究センター　講師	「中泊町の社会教育の更なる進化に向けて」

「中泊町の社会教育の更なる進化に向けて」　参加者：８人

講師：深作　拓郎（弘前大学生涯学習教育研究センター　講師）

【アンケート回答：８人】

受講者の割合

20代	１人
30代	１人
40代	２人
50代	０人
60代	０人
70代	４人
無回答	０人

受講者の割合

	よく理解できた	まあまあ理解できた	ふつう	難しい	無回答
理解度	５人	２人	０人	１人	０人
内　容	６人	２人	０人	０人	０人
資　料	６人	２人	０人	０人	０人
話し方	８人	０人	０人	０人	０人
雰囲気	６人	２人	０人	０人	０人

「中泊町の社会教育の更なる進化に向けて」内容評価

中泊町教育委員会　社会教育課　社会教育係　田中　寿和

①企画・構想

これまで社会教育委員及び社会教育職員が一堂に会し研修することはなかったため、様々な情報を得るとともに情報を共有することにより、図書館、博物館、公民館等の資質向上や町民へ効果的な学習情報を提供するために実施した。

②準備過程について

大学との実施内容の確認、連絡調整。中泊町社会教育委員は文書により通知。社会教育関係職員については庁内メールにて案内した。

③事業について

研修の前半では、なぜ学習が必要か？や社会教育に関することなどを研修した。社会教育委員の改選や人事異動で１年目の方が多かったため社会教育を知るためにはいい研修だったと感じた。

後半はグループワークを行い、今現在の課題・それを解決していくにはどのような事業をすればいいのかを社会教育委員と社会教育職員の２グループに分かれて行いました。お互い違う課題やその解決策などを知ることができ、また課題を洗い出し、新たな事業を考えるための手法として今後の事業にも生かせればと思う。

④達成度・到達度について

研修を終えてアンケートを行った結果、全員満足のいく結果だった。職員からは「委員と職員の考え方が違い、色々な視点から行政運営を行っていくのが大切だと気づいた」や委員からは「学習意欲のない高齢者が増えているのでこれからの課題として考えてほしい」など新たな気づきや課題などを与えてくれた研修会だと思う。

⑤今後の課題・展望について

とても有意義な研修だったが午前中だけでは時間が少ないと感じたので、午前・午後で前後半を分けてより内容の濃い研修会にしていき、事業が重なったこともあり参加できない職員がいたため日程を考慮し設定していく。

県内自治体との共催事業

パパラボ遊び研究所 vol. 4「パパの体で遊んじゃえ！人力遊園地」　参加人数：延べ54人

主　催・共　催	弘前大学生涯学習教育研究センター・弘前市		
会　　場	弘前駅前こどもの広場イベントスペース（ヒロロ３階）		
対　象　者	育児中のお父さんとそのお子さん（３歳から小学校低学年くらいまで）、これから父親になる方や学生など興味のある男性		
実　施　概　要	父親が得意な子どもとの関わりを知り、父親・母親ともに承認欲求が満たされるような仕掛け作りを行うことで、父親が子育てを「楽しい」と感じ、自信を持って主体的に子育てに関わることができるような意識を啓発するために開催します。		
日　　時	講　　師	所　　属	演　　題
12 月 15 日（日） 10:30 ～ 12:00	高阪　麻子	愛知県東郷町兵庫児童館 館長	「パパの体で遊んじゃえ！人力遊園地」

「パパの体で遊んじゃえ！人力遊園地」　参加者：54 人（大人 24 人、子ども 30 人）

講師：高阪　麻子（愛知県東郷町兵庫児童館　館長）

【アンケート回答：20 人】

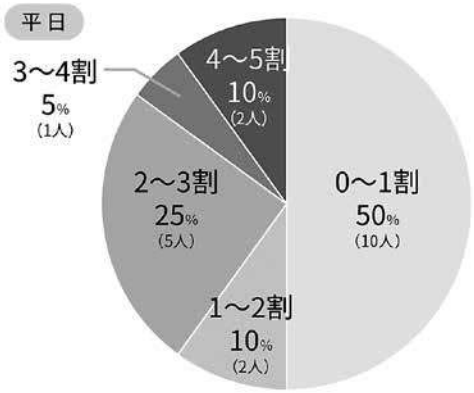
Ｑ１. お父さんの年代をお知らせください。

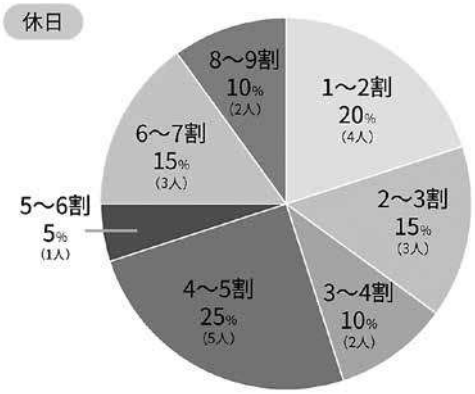
10 代	0 人	50 代	0 人
20 代	1 人	60 代	0 人
30 代	13人	70 代	0 人
40 代	6 人	無回答	0 人

Ｑ２. お子さんの年齢をお知らせください。

0 歳	1 人	4 歳	12人
1 歳	0 人	5 歳	4 人
2 歳	2 人	6 歳	2 人
3 歳	4 人	7 歳以上	2 人

Q 3. あなたは現在、家事・育児にどの程度関わっていると思いますか？





Q 4. 参加して気付いたことや感想を自由にお書きください。

・身近にあるものが工夫しだいで遊べる遊具になること、子どもの好奇心を尊重する大切さ
・楽しかったので、またこのような機会があれば参加したいと思います。
・非常に楽しく遊ぶことができました。ありがとうございました。
・すぐに実践したいものが多くて、時間いっぱい楽しむことができました。
・特にないです。
・楽しかったです。
・子どもがゲームをしている時より、いきいきしている気がする。
・楽しかったです。体力の衰えを感じました。
・娘の運動能力の高さにビックリ。
・とても楽しかったです。また来年も参加したいです。ありがとうございました。
・事前に申し込みが必要だとわからなかった。
・子どもと遊べる機会（遊び方等）学べました。また、日頃の運動の成長が見れました。
・子どもの動きがいつもと違った。
・スペースをもっと広く使ってもいいのかなと思います。少し狭かったです。
・親子で遊ぶのがもっと楽しくなりそうです。
・良い時間だった。
・楽しく過ごせました。ありがとうございました。

令和元年度　駅前こどもの広場託児付き講座内容評価書

弘前市健康こども部こども家庭課　健全育成係　工藤　麻美

①企画・構想について

母親の子育てに対する不安感の軽減のためには、父親の育児への関わり方も大きな要因であると考えられる。父親が主体的に楽しみながら育児に関わるためには、父親に向けての積極的な情報提供なども必要である。市の子育て支援の拠点施設である駅前こどもの広場の取り組みの一つとして、父親・母親がお互いを認め合い、子育てを楽しむことができるような周知啓発事業を実施したいと企画した。

②準備過程について

例年どおり保育園・幼稚園・駅前こどもの広場でのチラシ配布、広報ひろさきや市ホームページへの掲載により周知を行ったことに加え、例年幼稚園のみに行っている全園児へのチラシ配布を、今年度は保育園でも行った。

③事業について

定員を超える申込みがあり、当日のキャンセルもほぼなかったため、昨年度より参加者は大幅に増えた。要因としては、開催曜日を土曜日から日曜日に変更したことや周知をより広く行ったこと、子どもと一緒に遊べる参加しやすいプログラムだったことが考えられる。

多くの参加者がいたが、道具や場所をあまり使わず、かつ父親ならではの体を使った遊びをリズミカルに行っていく構成や、講師のノウハウを活かした声がけと進行により、全員が親子で楽しみながら取り組めている様子だった。

④達成度・到達度について

参加者アンケートでは、参加の動機として「子どもと一緒に遊びたかった」、「子どもとの時間を作りたかった」などを挙げている方が多かった。これは、本企画の開催要項において目的として掲げた、父親が子育てを『楽しい』と感じ、自信を持って主体的に子育てに関わることができるような意識の啓発が、ニーズと合致した結果だと考えられる。

また、参加後の満足度も 95% と非常に高かったほか、今後の子どもとの関わりに活かしていきたいなど前向きな意見が多く、一定の効果があったものと考える。

⑤今後の課題・展望について

昨年度の反省を踏まえ、時期は大きく動かさずに曜日を変えたことや、親子で楽しめる参加しやすい構成としたことで、参加者が例年と比べ大幅に増加した。参加者の満足度も高く、また参加したいなどの意見もあったため、来年度以降もより多くの方に参加してもらい、引き続き父親が主体的に育児に関わり、楽しみながら子育てをするための周知啓発事業を行いたい。また、事業の実施にあたっては、今年度の良い結果を踏まえて時期や内容を検討していきたい。

県内自治体との共催事業

放課後の子どもの居場所づくりを考える研修会（全３回）

参加人数：132 人

主　催・共　催	弘前大学生涯学習教育研究センター・弘前市
会　　場	①③市民文化交流館ホール（ヒロロ４階） ②みやぞの児童センター・東部児童センター
対　象　者	児童館の児童厚生員やなかよし会などの学童保育スタッフ、放課後子ども教室のスタッフ、希望する一般市民
実　施　概　要	子ども達にとって居心地の良い居場所や環境について考え、学ぶための研修会を開催します。児童館ガイドラインが平成30年10月に改正になったことを踏まえ、改めて放課後の居場所となる児童館・児童クラブ、指導員のあり方について考える機会とし、実践を交えながらスタッフの資質向上と子どもを取り巻く環境の向上を目指します。

日　　時	講　　師	所　　属	演　　題
①８月 30 日（金） 9:30 ～ 11:30	【講義】 鈴木　一光 【シンポジウム】 渡邊　由貴 深作　拓郎	一般財団法人児童健全育成推進財団　理事長 宮城県名取市下増田児童センター　館長 弘前大学生涯学習教育研究センター　講師	「改定児童館ガイドラインの理念を児童館・児童クラブで活かすには」
②【運動あそび】 ９月21日（土） 10:00～12:00 【感覚･造形あそび】 10月12日（土） 10:00～12:00	【運動あぞび】 渡邊　由貴 【感覚･造形あそび】 高阪　麻子	宮城県名取市下増田児童センター　館長 愛知県東郷町兵庫児童館館長	「児童館・児童クラブでのあそびの実践研究」
③12月２日（月） 10:00～12:00	金坂　尚人	兵庫県神戸市六甲道児童館館長	「子ども主体の児童館・児童クラブの運営とは」

①「改定児童館ガイドラインの理念を児童館・児童クラブで活かすには」　参加者：52人

講　　師：鈴木　一光（一般財団法人児童健全育成推進財団　理事長）

シンポジウム：渡邊　由貴（宮城県名取市下増田児童センター　館長）

深作　拓郎（弘前大学生涯学習教育研究センター　講師）

【アンケート回答：44 人】

受講者の割合

	20 代	30 代	40 代	50 代	60 代以上	無回答
男性　6 人 女性　38人	9 人	10 人	12 人	6 人	7 人	0 人

講座の評価

	満足	やや満足	ふつう	やや不満	不満	無回答
満足度	33 人	7 人	4 人	0 人	0 人	0 人

②「児童館・児童クラブでのあそびの実践研究」

参加者：14 人（参加児童：45 名）

【運動あそび編】講師：渡邊　由貴（宮城県名取市下増田児童センター　館長）

【アンケート回答：9 人】
受講者の割合

	20 代	30 代	40 代	50 代	60 代以上	無回答
男性　1 人 女性　8 人	3 人	1 人	2 人	3 人	0 人	0 人

講座の評価

	満足	やや満足	ふつう	やや不満	不満	無回答
満足度	9 人	0 人	0 人	0 人	0 人	0 人

【感覚・造形あそび編】講師：髙阪　麻子（愛知県東郷町兵庫児童館　館長）

参加者：16 人（参加児童：61 名）

【アンケート回答：16 人】
受講者の割合

	20 代	30 代	40 代	50 代	60 代以上	無回答
男性　2 人 女性　14人	2 人	5 人	5 人	1 人	3 人	0 人

講座の評価

	満足	やや満足	ふつう	やや不満	不満	無回答
満足度	16 人	0 人	0 人	0 人	0 人	0 人

③「子ども主体の児童館・児童クラブの運営とは」　　参加者：50 人

講師：金坂　尚人（兵庫県神戸市六甲道児童館　館長）

【アンケート回答：41 人】

受講者の割合

	20 代	30 代	40 代	50 代	60 代以上	無回答
男性　8 人 女性　33人	8 人	15 人	9 人	5 人	4 人	0 人

講座の評価

	満足	やや満足	ふつう	やや不満	不満	無回答
満足度	31 人	8 人	1 人	0 人	0 人	1 人

令和元年度　放課後の子どもの居場所づくりを考える研修会　内容評価

弘前市健康こども部こども家庭課　健全育成係　工藤　麻美

①企画・構想について

少子化の中でも利用が増加している放課後児童クラブについて、子ども達にとって居心地のよい居場所や環境を考え、学び、健全育成を図っていくために、放課後児童クラブや児童館のスタッフを対象とした研修会を行うこととした。前年度と同様に、訪問型の講座も設定し、直接的に子どもたちとの関わり方を学ぶ機会も設けながら、指導者等の資質向上を目指した。

②準備過程について

周知については例年どおり行ったほか、前年度同様青森県との共催であったため、県からの周知もあった。また、適宜打合せの時間を持ったことにより、内容や目指す効果についてよく共有できたと感じている。

③事業について

今年度は、平成30年10月に改定された児童館ガイドラインをテーマに全３回の研修を実施した。１回目は、児童館ガイドラインの改定にも携わった（一財）児童健全育成推進財団の理事長のほか、県外の児童館長から、現場における児童館ガイドラインの活かし方を学んだ。２回目は、市内の児童センター２か所を会場とし、プログラムを事前に児童センターの職員と講師で組み、当日実践を通して講師の子ども達との関わり方を参加者に見てもらう訪問型の研修とした。３回目は、県外の児童館長から、児童館ガイドラインを踏まえた具体的な取組について学んだほか、２回目の訪問型研修を実施した児童センターの職員から、その内容等について発表してもらった。

参加人数は全体を通して昨年度より多かったが、２回目は土曜日午前中の開催のためか、２か所の参加者を合計しても、１・３回目と比べると参加者が少なかった。また、昨年度の反省を踏まえ、間隔をなるべく開けずに開催日程を組んだためか、３回連続しての参加者が昨年度より増加したように見受けられた。

④達成度・到達度について

研修会終了後のアンケートによると、満足・やや満足と回答した方が１回目 91%、２回目 100%、３回目 96%と例年に比べて満足度は高い結果となった。また、その他の意見でも、研修で学びを得ただけでなく、メインテーマとした改定・児童館ガイドラインや、訪問型研修の発表内容を踏まえ、現場での実践に取り入れていきたいといった前向きな意見も多く見られたため、本研修会のねらいは概ね達成できたものと考えられる。

⑤今後の課題・展望について

今年度は、指導者等の関心が高いテーマの研修会だったことも、参加者の増加や満足度の向上につながったと考えられるため、今後も時期やニーズを捉えたテーマの設定を意識したい。

また、アンケート結果から、現場での実践に向けた前向きな意見も多くあった一方で、意欲は持ちつつも実践は難しいと感じる指導員等も一定数いたことを踏まえ、訪問型研修の児童館・児童センター以外での実施を検討するほか、今年度に引き続き、講義形式のみでなく、シンポジウムなどの親しみやすい形式も取り入れた研修会とするなど、より実践可能な取組を考えるきっかけとしてもらいやすいよう、内容を工夫していく必要があると考える。

生涯学習教育研究センター主催事業

子どもの放課後を考えるゼミナール（全６回）

参加人数：延べ 39人

主　催・共　催	弘前大学生涯学習教育研究センター
会　　場	弘前大学生涯学習教育研究センター多目的室
対　象　者	児童厚生員、放課後児童支援員、地域で子どもの放課後活動に携わる実践者
実　施　概　要	2018年10月に「児童館ガイドライン」が改訂されるなど、放課後や学校外における子どもの受け皿の整備や環境醸成を図ることが求められています。そこで、ゼミナール形式の学習会を定例開催し文献や事例を通した検討・論議を重ねていくことで、専門家・実践者の育成と質の向上を図ることを目的に開催します。

日　　時	講　　師	所　　属	演　　題
①６月12日（水） 19:00 ～ 20:30	深作　拓郎	弘前大学生涯学習教育研究センター　講師	「子どもの放課後を考えるゼミナール」
②７月10日（水） 19:00 ～ 20:30			
③９月11日（水） 19:00 ～ 20:30			
④10月９日（水） 19:00 ～ 20:30			
⑤11月13日（水） 19:00 ～ 20:30			
⑥12月11日（水） 19:00 ～ 20:30			

「子どもの放課後を考えるゼミナール」　　参加者：39 人 (合計)

講師：深作　拓郎（弘前大学生涯学習教育研究センター　講師）

【アンケート回答：６人】

受講者の割合

20 代	０人
30 代	０人
40 代	２人
50 代	２人
60 代	１人
70 代以上	１人

受講者の割合

	よく理解できた	まあまあ理解できた	ふつう	難しい	無回答
理解度	４人	２人	０人	０人	０人
内　容	４人	２人	０人	０人	０人
資　料	４人	２人	０人	０人	０人
雰囲気	４人	２人	０人	０人	０人

2019 年度　子どもの放課後を考えるゼミナール　内容評価

弘前大学生涯学習教育研究センター講師　深作　拓郎

①企画・構想

この事業は、2009年度からスタートした「子どもの育ちを考えるゼミナール」が基礎となり、今年度から、テーマと対象を絞り込み、児童厚生員・放課後児童支援員、地域の実践者と限定した。その理由は、2015年度から弘前市との共催で実施している「子どもの放課後の居場所を考える研修会」の発展版として、参加者が抱える課題意識や問題点を言語化し、他者と議論をして深めていくことで、各自の実践に反映できるようにすることの必要性があるからである。

今後、児童厚生員、放課後児童支援員の専門性も高まりに伴い、研修の内容も高度化も求められることが想定されることから、このプログラム開発という意図もある。

②準備の過程

例年同様、過去の受講者、児童館・放課後児童クラブ (学童保育) へチラシを配布し、定員である８名の参加が得られた。そのうち、前回からの継続参加者は３名（児童厚生員１・地域の実践者１・公的機関の専門家１）である。継続的に学習に参加する意欲の高い受講者層であることが伺える。

新規の受講者は、弘前市内の児童厚生員、放課後児童支援員であった。

③講座の内容について

前例と同様に、今年度も６月からスタートし12月までの６回連続の講座 (毎月第２水曜日) として開催した。

毎回報告者を２名指定し、各自が抱える課題や問題意識などをレジュメにまとめ、それに基づいてそれぞれ約30分ずつ報告し、その後全体討議という時間配分とした。

アンケートの自由記述を見ると、「参加の理由」と「気づきや学び」が呼応しており、参加者の期待には沿えたのではないかと考えている。

④今後の課題・展望

このゼミナールは、自身が抱える課題や問題を言葉にして表現し、相手の意見や想いを聞き取れるようになるというスキルが育成される。初参加者とこれまでの参加者とのあいだにスキルの差がストレートに出てしまった。その差をいかに埋めていくかは今後の課題である。

しかしながら、過酷な雇用条件の下で勤務する児童厚生員・放課後児童支援員は、単なる「愚痴」ではなく、それを課題として受け止め、言葉や文字にして他の参加者と話し合いを深めていくことを体験できたことは、意義深いものと考える。

また、「参加者間のネットワーク形成」「協働で何らかの実践」への機運が醸造されたことは特筆できる。この機運が形になるようにしていくことが次のテーマとなるであろう。

放課後の子どもの居場所づくり研修会（弘前市との共催）
子どもの放課後を考えるゼミナール（生涯学習教育研究センター主催）
に関する外部評価

評　価　者：一般財団法人児童健全育成推進財団　総務部長　阿南　健太郎　氏
評価実施日：2020年２月26日（水）13：30 ～ 15：30

■事業に対する評価

自治体予算にゆとりがあった時代は、現場の厚生員にも力があったので、自分たちから必要とする研修を提案したり、自前でやれる時代があったが、近年は脆弱化している。その背景には、児童館への指定管理者制度が進んだことや、放課後児童健全育成事業が市町村事業になり、職員育成も各自治体が責任をもするように法体系も変えたこともあるだろう。単発的・散発的な研修しか組めなくなっている。

自治体の立場に立ってみると、大学が１つのリソースとしてある。そこを活用できるってことはすごく有難いことだと思う。確かに、学校組織と役所は全然また違うスキームで事が流れているので、どこの自治体もお願いするとしても、講師をお願いして来てもらい、単発・散発で終わっているのが現状である。

弘前大学と弘前市が取り組むこれらの研修会は、大学と自治体が一緒に組んでプログラムから創っていくということ自体がモデルになる。

大学としての地域貢献もあるであろうが、それ以上に生み出す価値があるのではないだろうか。

そこの価値をどう言語化・顕在化させていくか。現場の変化が一番であるが、子育て支援、児童福祉分野以外のところの変化、隣接領域への波及効果をも言語化や顕在化ができると、この町に大学があることの価値がより浸透していくのだろうと思う。

■児童館・放課後児童クラブの向かうべき姿

児童館とは何？学校でもない、保育所でもない。

児童館は児童館なりの存在意義があるが、そのこと自体を現場にいる職員が気づいていない。もしくは言語化できない。“地域と繋がる”、“地域に還元していく”ことが、地域の中での児童館の役割。地域の多彩な人たちを巻き込んでいく、地域の人たちに「見える化」することによって、児童館・放課後児童クラブが子どもにとって、かつ地域にとって、どんな役割を担っているか理解してもらえるようになる。そしてその先には、子どもだけではなくて、地域住民一人ひとりが児童館や放課後児童クラブを自分にとっても地域にとっても必要だと思ってもらえることが目指すべき方向性である。

■事業の方向性

それを踏まえて、青森県、特に弘前市の課題である、児童厚生員・放課後児童支援員のモチベーションをつくる、厚生員・支援員の横の繋がりをつくることについて。

前者において、１つは彼ら・彼女らと同じ地域で頑張っている、労働環境が似ているなど親近感がある講師をつけて研修をする。もう１つは、職員の働きかけや自身がやってい

ることが、市民や他分野の大学の先生など第三者から認められることによって、自信に繋がる。また研修を行うにあたって、職場によって賃金体系・労働体制・職員の階層の有無が異なり、その中でどこに基準を合わせるかが難しくいため、研修内容が偏り単発的になり現場に活かせない内容になってしまう。だが、研修の中でお互いに学び合うことで、地域の現状を知り課題に気づき、地域全体への職員の意識が変化し、それがリスク回避にも繋がる。例え仕事を辞めたとして、子どもを理解する大人になったり、市民活動をするきっかけにもなる。

後者については、横の繋がりをつくりながらも、職員同士、大学同士で完結せず、そこに保護者や子どもを取り巻くことが必要だ。その中で厚生員・支援員の働きかけが地域に開かれ、子どもへの関わり、子どもの放課後への重要性が見える化し、地域の人たちに理解される。それによって、地域の人たちから自分たちの働きかけの価値を気づかされ、職員自身も徐々に自信をつけていく。

放課後というものの必要性とそれに伴う児童館・放課後児童クラブの役割を言語化し、地域の人たちに理解され、認識されること。そうしていく中で、地域からみる児童館・放課後児童クラブへの眼差し、態度、関り、雰囲気を変えていくこと。これらを実現させるために、地域の人・子ども・保護者を何らかの過程に巻き込む機会をつくったり発信したり。言語化して伝えていく必要がある。そうする中で市民をも育てていき、児童館や放課後児童クラブが地域に還元されていく。

■大学が果たす役割

そこでの大学の役割は、講師育成と厚生員・支援員と講師間のクッション役、市役所や他分野へ波及効果を与えることである。研修をするにあたって大学の先生が講師に講談内容を提案・改善することで、講師が自らを省み、言語化し、考え、それを形にしていく過程で自身の力を培うことになる。また職員同士で意見交換する中でお互いに現場にいるからこそ、言い合いづらいことや受け止めづらいことも出てくる。そこに大学の先生が仲介することによって、客観的視点で物事を受け止められるようになる。そして研修を積み重ねていく中で、役所の人の変化があり、そして子ども関係以外の分野からの理解が変わっていき、それが少しずつ児童厚生員や放課後学童支援員の労働環境に良い変化をもたらす。また放課後への認識・気持ちの変化によって、子どもがどう変わっていくのかについて研究することも大学だからこそできることである。地域における大学の価値は大きい。

（文責：深作拓郎）

※阿南氏の肩書は当時のもの

生涯学習教育研究センター主催事業

大学生と語り合おう　らぶちるカフェ

参加人数：延べ 70 人

主　催・共　催	弘前大学生涯学習教育研究センター		
会　　場	弘前大学生涯学習教育研究センター多目的室		
対　象　者	小学生、中学生、高校生		
実　施　概　要	総合文化祭に来場する子どもたちを主対象に、日常のことや学校での生活や友人関係などについて大学生と語り合う「サロン形式」の交流会を開催します。従来、成人が主対象であった生涯学習事業を、大学生が企画・運営し、総合文化祭に来場する小～高校生世代が利用するスタイルを採ることにより、成人だけに捉われない大学開放・生涯学習事業の「ニーズ」を掘り起し、大学生による大学生涯学習事業への参画のあり方を探ることをねらいとします。		
日　　時	講　　師	所　　属	演　　題
① 10月26日（土） 10:00 ～ 16:00	深作　拓郎	弘前大学生涯学習教育研究センター　講師	「大学生と語り合おう　らぶちるカフェ」
② 10月27日（日） 10:00 ～ 16:00			

「大学生と語り合おう　らぶちるカフェ」　　参加者：70 人（合計）

講師：深作　拓郎（弘前大学生涯学習教育研究センター講師）

2019年度　大学生と語り合おう　らぶちるカフェ　内容評価

弘前大学生涯学習教育研究センター　講師　深作　拓郎

企画・構想

この事業は、学生主体で行っている取り組みで、今回で８回目（８年目）を迎えた。当初は、「第58回こどもを守る文化会議」が弘前大学で開催された際に行われたプログラムのひとつ「子どものフォーラム」の前哨戦として企画したのであったが、大学祭においても予想以上に中高校生の居場所が少なく、ニーズが高いことから継続して開催している。

準備・当日

総合文化祭で行っていることはもちろんのこと、事業の性質から広報等は行っていない。また、複数年と同じ会場で開催していることから、準備も特に支障なく実施できた。

１日目は天候もあり出足は少なめで、午前は常連の中学生女子３組10名が昼過ぎまで、入れ替わるように同じく常連の高校生世代２名も来室した。彼らは、いつもと同じようにふらっとやってきて、我々が用意した遊具や彼ら自身が模擬店で購入してきた飲食物などを楽しみながら、日常の出来事や学校や塾での人間関係に関する悩み、自身の進路について語っていった。

２日目は、前日も来室した中高校生世代約20名のほか、天候も良く小学生や幼児とその保護者などの家族づれの来場が多数みられた。昨年ほどではないものの、小学生や幼児が休息したり、のんびりと遊べる空間が少ないとのことで、長時間滞留していた。

今後の課題・展望

昨年度も記したが、中高校生を中心に地域の子どもたちの居場所を常設開設が必要であることは明白で、とりわけ「ナナメの関係」とされる大学生が取り組むことの意義は大きい。この事業を開始した頃の中学生たちは現在大学生となり、進学先の大学祭で「らぶちるカフェ」と同様の取り組みをしているという報告を毎回得られている。このような取り組みが広がっていくことを強く願っている。

また、上記で記したように、中高校生世代をはじめ、小学生や乳幼児の家族連れの来場も多数みられることから、本学の総合文化祭は地域社会に浸透してきていることがわかる。

それに呼応するように新たな課題も明らかとなっている。ある中学生が、このようなコメントをわたしたちにつぶやいている「大学生は楽しそうだけど、中学生には疲れる」。昨年度は、「おむつ替え・授乳スペースがない」と乳児づれの方たちからコメントが寄せられている。

大学生が企画する大学生目線で「楽しい大学祭」なので仕方がないことではあるが、地域に開放する以上は、地域の方々は「弘前大学総合文化祭」に何を期待して来場するのかを調査し、そういう方々のニーズや配慮についても検討していく必要がある。これは、一団体の課題としてだけでなく、学生課や学祭本部とも共有し、克服に向けて検討をしていきたい。

白神自然環境人材育成講座　第二期生

参加人数：延べ 34 人

主　催・共　催	弘前大学生涯学習教育研究センター
会　　場	【9】白神学Ⅱ…弘前大学総合教育棟 305 講義室 【5】自然ガイド実践論…弘前大学創立 50 周年記念会館２階　会議室２
対　象　者	白神山地で今やっている自分の活動を学術的に考えたい人、白神山地をテーマに地域活性化に取り組みたい人

日　　時	講　　師	所　　属	演　　題
【9】白神学Ⅱ 講義 ①４月16日(火) ②４月23日(火) ③５月７日(火) ④５月14日(火) ⑤５月21日(火) ⑥５月28日(火) ⑦６月18日(火) ⑧６月25日(火) 実査 ⑨６月１日(土) ⑩６月22日(土)	大高　明史 石川　幸男 中村　剛之	弘前大学教育学部　教授 弘前大学農学生命科学部附属白神自然環境研究センター教授 弘前大学農学生命科学部附属白神自然環境研究センター准教授	①ガイダンス＋講義 ②対馬海流の影響 ③動物相の調査方法 ④木の年輪から知る環境変動の実態 ⑤群落分布の成り立ち ⑥二ホンジカが植物群落にもたらす影響 ⑦大きい湖・小さい湖 ⑧ミジンコはすごい ⑨西目屋村野外観察 ⑩十二湖で環境測定、サンプリング、森林観察
【5】 自然ガイド実践論 講義＋ＷＳ ①７月 27 日（土） ②７月 27 日（土） ③７月 28 日（日） ④７月 28 日（日） ※三期生合同	中村　剛之 佐藤　崇之 楊　銀佳 今村　かほる	弘前大学農学生命科学部附属白神自然環境研究センター准教授 弘前大学教育学部　准教授 弘前市広報公聴課国際交流員 弘前学院大学文学部　教授	①自然解説のための資料整理 ②自然解説の基本技術 ③中国からのお客さまをもてなす ④津軽の薫り豊かな案内

【9】白神学Ⅱ（実査：西目屋村）

【9】白神学Ⅱ（実査：深浦町）

二期生修了式

白神自然環境人材育成講座　第三期生

参加人数：延べ 329 人

主　催・共　催	弘前大学生涯学習教育研究センター
会　　場	【４】青森の自然ー白神学Ｉ－…弘前大学総合教育棟101講義室 【５】自然ガイド実践論…弘前大学創立50周年記念会館２階　会議室２ 【６】世界自然遺産論…生涯学習教育研究センター多目的室 【７】地球環境ー21世紀の地球環境問題②－…弘前大学総合教育棟101講義室 【８】白神ブランド戦略論…※令和２年度へ移行
対　象　者	白神山地で今やっている自分の活動を学術的に考えたい人、白神山地をテーマに地域活性化に取り組みたい人

日　　時	講　　師	所　　属	演　　題
【4】 青森の自然 ー白神学Ｉー 講義 ①４月16日(火) ②４月23日(火) ③５月７日(火) ④５月14日(火) ⑤５月21日(火) ⑥５月28日(火) ⑦６月４日(火) ⑧６月11日(火) ⑨６月18日(火) ⑩６月25日(火) ⑪７月２日(火) ⑫７月９日(火) ⑬７月16日(火) ⑭７月23日(火) ⑮７月30日(火)	石川　幸男 他 14 名	弘前大学農学生命科学部附属白神自然環境研究センター教授	①ガイダンス＋講義 ②白神山地の気象 ③春に咲く花たち ④白神山地の大地の生い立ち ⑤白神山地の自然環境の歴史的変遷 ⑥森に支えられる河川生態系 ⑦白神山地のキノコ ⑧白神山地に侵入する二ホンジカとその影響 ⑨白神山地の土壌 ⑩白神山地に生息するプラナリアの知見から出発した研究 ⑪リモートセンシングとＧＩＳデータから見える白神山地 ⑫白神山地の植物ーシラネアオイの生活史特性ー ⑬白神山地は「緑のダム」になり得るか ⑭白神山地におけるブナ林の遺伝子多様性について ⑮白神に暮らす昆虫たち
【５】 自然ガイド実践論 講義＋ＷＳ ①７月27日(土) ②７月27日(土) ③７月28日(日) ④７月28日(日) ※二期生合同	中村　剛之 佐藤　崇之 楊　銀佳 今村　かほる	弘前大学農学生命科学部附属白神自然環境研究センター准教授 弘前大学教育学部　准教授 弘前市広報公聴課国際交流員 弘前学院大学文学部　教授	①自然解説のための資料整理 ②自然解説の基本技術 ③中国からのお客さまをもてなす ④津軽の薫り豊かな案内
【６】 世界自然遺産論 ①７月２日（火） ②７月９日（火）	石川　幸男	弘前大学農学生命科学部附属白神自然環境研究センター教授	①世界自然遺産の目的と日本の自然遺産 ②海外の世界遺産と支援遺産の問題点

【7】 地球環境―21世紀の地球環境②― ①10月１日(火) ②10月８日(火) ③10月15日(火) ④11月５日(火) ⑤11月12日(火) ⑥11月19日(火) ⑦11月26日(火) ⑧12月３日(火) ⑨12月10日(火) ⑩12月17日(火) ⑪12月24日(火) ⑫１月14日(火) ⑬１月14日(火) ⑭１月21日(火) ⑮１月28日(火)	伊藤　大雄 他４名	弘前大学農学生命科学部附属生物共生教育研究センター教授	①ガイダンス ②③④地球温暖化問題 ⑤地すべり、土石流と災害軽減対策 ⑥⑦汚染者支払い原則・社会的制度 ⑧⑨⑩重金属・ダイオキシンと酸性雨 ⑪⑫⑬生物大絶滅期と人間活動 ⑭⑮明治以降の人間活動と野生生物

【５】自然ガイド実践論※二期生・三期生合同

２．学部の主催事業など　　講座担当：人文社会科学部

フォーラム「津軽における寺院資料の世界―深浦円覚寺の古典籍を基点として―」

開　催　日	令和元年７月 13 日（土）13:00 ～ 16:30
主催・共催	【主　催】深浦町・弘前大学・深浦町教育委員会・弘前大学人文社会科学部地域未来創生センター 【後　援】弘前市・東奥日報社・陸奥新報社
会場・対象・定員・参加費	【会　場】弘前大学コラボ弘大８階　八甲田ホール 【対　象】一般市民 【定　員】100 名　【参加費】無料
参加人数	160 人
講　師	【特別講演】阿部　泰郎　（名古屋大学高等研究院　教授） 【講　演】①瀧本　壽史　（弘前大学教職大学院　教授） ②渡辺　麻里子（弘前大学人文社会科学部　教授）
内　容	弘前の寺院や歴史を，新たな視点から学んでみませんか？近世の津軽と深浦との関係を絵図や古文書からひもときます。 【特別講演】地方寺院資料が照らし出す中世宗教の世界像 ―聖教調査とアーカイヴス化の意義とは何か― 【講　演】①近世代津軽と深浦 ②深浦円覚寺所蔵古典籍の意義 ―津軽の寺院における「知」のネットワーク―

りんご講演会　世界のりんご生産とクラブ制品種「ピンクレディー」の世界戦略

開　催　日	令和元年 10 月８日（火）13:30 ～ 17:40
主催・共催	【主　催】弘前大学人文社会科学部 【共　催】日本ピンクレディー協会
会場・対象・定員・参加費	【会　場】弘前大学コラボ弘大８階　八甲田ホール 【対　象】りんご農家、県庁や市役所、研究所などの職員、りんご関係者、教員、学生など 【定　員】特になし　【参加費】なし
参加人数	120 人
講　師	世界ピンクレディー連盟総会（2019 年）に出席される各国の代表ら
内　容	クラブ制品種ピンクレディーの運営現状、世界主要産地のリンゴ生産流通事情など

地域未来創生塾@中央公民館

開　催　日	①令和元年10月９日（水）　⑥令和元年12月25日（水） ②令和元年10月23日（水）　⑦令和２年１月８日（水） ③令和元年11月13日（水）　⑧令和２年１月22日（水）　18:30～20:00 ④令和元年11月27日（水）　⑨令和２年２月12日（水） ⑤令和元年12月11日（水）　⑩令和２年２月26日（水）
主催・共催	【主　催】弘前大学人文社会科学部地域未来創生センター 【後　援】弘前市教育委員会
会場・対象・定員・参加費	【会　場】弘前市文化センター２階　第３会議室※②のみ視聴覚室 【対　象】弘前市および近隣にお住まいの高校生・一般の方 【定　員】特になし　【参加費】無料
参加人数	173 人

講　　師	①②杉山　祐子　（弘前大学人文社会科学部　教授） 　　白石　壮一郎（弘前大学人文社会科学部　准教授　＜専門＞人類学・社会学） ③熊田　憲　　（弘前大学人文社会科学部　准教授 　　＜専門＞地域イノベーション、イノベーション） ④亀谷　学　　（弘前大学人文社会科学部　講師　＜専門＞イスラーム史） ⑤小杉　雅俊　　（弘前大学人文社会科学部　教授　＜専門＞管理会計･原価計算） ⑥花田　真一　　（弘前大学人文社会科学部　講師　＜専門＞計量経済学） ⑦工藤　正明　　（青森県企画政策部統計分析課 副参事） ⑧原　克昭　　（弘前大学人文社会科学部　教授　＜専門＞日本思想史･宗教文化史） ⑨木村　宜美　　（弘前大学人文社会科学部　教授　＜専門＞英語学（生成文法理論）） ⑩李　永俊　　（弘前大学人文社会科学部　教授　＜専門＞労働経済学）
内　　容	①「イスラーム留学生の弘前ぐらし①」 ②「イスラーム留学生の弘前ぐらし②」 ③「地域イノベーションの考え方」 ④「中東イスラーム世界から地域の特色を考える」 ⑤「農福連携って何だろう？ ―管理会計の理論から―」 ⑥「統計データを活用しよう！統計調査の重要性」 ⑦「統計データで見るあおもりの「働く」」 ⑧「〈神〉と〈仏〉がコラボする信仰世界―図像学からのアプローチ―」 ⑨「この日本語、ちょっと変って、どうしてわかるの？習ってもいないのに！」 ⑩「人口 80 万人時代の青森を生きる―経済学者からのメッセージ―」

弘前大学人文社会科学部　国際公開講座 2019
「日本を知り、世界を知る」人文学で／人文学を探究する【文化の日は、弘前大学へ行こう！】

開　催　日	令和元年 11 月 3 日（日・祝）10:00 ～ 16:30
主催・共催	【主　催】弘前大学人文社会科学部・弘前大学人文社会科学部地域未来創生センター
会場・対象・定員・参加費	【会　場】弘前大学創立 50 周年記念会館２階　岩木ホール 【対　象】一般の方 【定　員】80 名　【参加費】無料
参加人数	133 人
講　　師	畑中　杏美　（弘前大学人文社会科学部　講師） 原　克昭　　（弘前大学人文社会科学部　准教授） 上條　信彦　（弘前大学人文社会科学部　准教授） 渡辺　麻里子（弘前大学人文社会科学部　教授） 張　文薫　　（台湾大学文学部・副教授）
内　　容	人文学の「今」―日本や世界の文化・歴史に関する最新の研究成果―をわかりやすくお伝えします。今年度は「人文学で／人文学を探究する」をテーマとして、弘前大学における多彩な「人文学」研究を、４名の教員が紹介します。また、台湾の研究者をお招きして特別講演も行います。世界各地の文化や歴史について、最新の研究成果に基づき、地域の皆さまにわかりやすくお伝えします。

シンポジウム「青森県の裁判員裁判―これまでの 10 年間を振り返る」

開　催　日	令和元年 11 月 3 日（日・祝）14:00 ～ 17:30
主催・共催	【主　催】弘前大学人文社会科学部地域未来創生センター・弘前大学人文社会科学部
会場・対象・定員・参加費	【会　場】弘前大学人文社会科学部棟４階　多目的ホール 【対　象】本学教職員、学生、一般の方等どなたでも 【参加費】無料
参加人数	52 人
講　師	【第１部】報 告 者：平野　潔　（弘前大学人文社会科学部） 宮﨑　秀一（北里大学教職課程） 飯　考行　（専修大学法学部） 古玉　正紀（青森地方裁判所） 【第２部】登 壇 者：裁判員経験者 進　行：平野　潔　（弘前大学人文社会科学部） 【第３部】パネリスト：裁判員経験者 古玉　正紀（青森地方裁判所） 吉武　恵美子（青森地方検察庁） 竹本　真紀（青森県弁護士会） コーディネーター：飯　考行　（専修大学法学部）
内　容	本シンポジウムでは、法曹三者、市民（裁判員経験者）、研究者それぞれの目に裁判員裁判がどのように映っているのか、10年目を迎えた裁判員制度の成果と課題は何かを検証していきます。その上で、次の10年に向けて、裁判員制度をどのように育てていくべきかを参加者を交えて議論したいと思います。 【第１部】「裁判員裁判10年の成果と課題」 【第２部】「裁判員経験者が感じた裁判員裁判」 【第３部】「市民・法曹の目から見た裁判員制度」

2019 年度東奥義塾高校所蔵　旧弘前藩藩校稽古館資料調査報告会

開　催　日	令和元年 11 月 17 日（日）13:30 ～ 17:00
主催・共催	【主　催】弘前大学人文社会科学部・弘前大学人文社会科学部地域未来創生センター 【共　催】東奥義塾高等学校
会場・対象・定員・参加費	【会　場】弘前市立観光館１階　多目的ホール 【対　象】一般市民 【定　員】100 名　【参加費】無料
参加人数	93 人
講　師	【講　演】大石　学（東京学芸大学　名誉教授） 【研究発表】弘前大学人文社会科学部教員６名
内　容	2014 年度より、東奥義塾高等学校に所蔵されております旧弘前藩藩校「稽古館」所蔵資料について調査を進めております。今年度の調査においては、『淵鑑類函』など唐本（中国からの輸入本）の購入や『大日本史』『礼儀類典』の書写など、藩校設立の早い段階から書籍購入に尽力していた様子が明らかになりました。また、本年度は大河ドラマを監修なさっている、東京学芸大学名誉教授　大石学先生をお招きし、幕末における藩校の「教育力」について、ご講演いただきます。

自然栽培と管理会計

開　催　日	令和２年２月８日（土）13:20 ～ 17:00
主催・共催	【主　催】弘前大学人文社会科学部・公益財団法人メルコ学術振興財団
会場・対象・定員・参加費	【会　場】弘前大学50周年記念会館　岩木ホール 【対　象】自然栽培農家、農業関係者、研究者、学生 【参加費】無料
参加人数	90 人
講　師	①黄　孝春　（弘前大学人文社会科学部　教授） ②宮尾　浩史（宮園農園） 　星野　優太（名古屋市立大学） ③唐澤　秀　（鹿嶋パラダイス） 　小杉　雅俊（弘前大学人文社会科学部　准教授） ④阿部　知里（阿部自然農園） 　内藤　周子（弘前大学人文社会科学部　准教授） ⑤高橋　啓一（NPO 法人岡山県木村式自然栽培実行委員会） 　加藤　惠吉（弘前大学人文社会科学部　教授）
内　容	①「自然栽培を経営する」 ②「自然栽培の稲作と平飼い養鶏を組み合わせた経営」 ③「この世のパラダイスの作り方～鹿嶋編～」 ④「稲作経営を支える自然栽培」 ⑤「自然栽培は契約栽培から」

「地域未来創生センターの挑戦―人文社会科学系アプローチの課題と可能性―」

開　催　日	令和２年２月 28 日（金）18:00 ～ 20:30
主催・共催	【主　催】弘前大学人文社会科学部地域未来創生センター
会場・対象・定員・参加費	【会　場】弘前市民文化ホール（ヒロロ４階） 【対　象】一般、行政関係者、学生、関係者 【定　員】100 名　【参加費】無料
参加人数	58 人
講　師	①田中　則雄　（島根大学法文学部長・山陰研究センター長） 　豊福　裕二　（三重大学人文学部副学部長・三重の文化と社会研究センター副センター長） ②李　永俊　（弘前大学人文社会科学部　教授） ③大山　健　（青森県企画制作部統計分析課　副参事） 　澁谷　明伸　（弘前市企画部企画課長兼ひとづくり推進室長） 　杉山　裕子　（弘前大学人文社会科学部　教授） 　渡辺　麻里子（弘前大学人文社会科学部　教授）
内　容	人文社会科学系の地域センターを核として積極的に事業を展開している他大学の諸事例を学び、意見交換を通して、人文社会科学系地域センターのアプローチの課題と今後の方向性を議論することを目的として開催致します。 【第１部】「『地域とつながる人文学の挑戦』の諸活動から学んだこと」 「三重大学人文学部における地域連携の取り組み」 「『三重の文化と社会研究センター』設立の背景と目的」 【第２部】「地域未来創生センターの挑戦」 【第３部】パネルディスカッション

公開講座「裁判官の仕事・検察官の仕事～青森県の刑事司法の実情を踏まえて～」

開　催　日	令和２年２月 29 日（土）14:00 ～ 17:10
主催・共催	【主　催】専門家集団「らの会」･弘前大学人文社会科学部地域未来創生センター
会場・対象・定員・参加費	【会　場】弘前市民会館　第１・第２小会議室 【対　象】どなたでも 【定　員】50 名　【参加費】無料
参加人数	58 人
講　師	①古玉　正紀　（青森地裁裁判官） ②吉武　恵美子（青森地検次席検事）
内　容	普段あまり接することのない裁判官や検察官から直接話を聞くことで、司法を身近に感じてもらい、地域の一員として考える機会となるよう公開講座を開催します。この機会に是非、裁判官や検察官がどんな仕事をしているのかを知ってください。 ①「青森県の裁判～裁判員裁判～」 ②「検事の仕事、検察庁の役割」

講座担当：教育学部

青森でつながる―子どもの貧困をみんなで考えよう―子どもの貧困対策
全国47都道府県キャラバン in 青森

開　催　日	令和元年７月 28 日（日）13:00 ～ 17:00
主催・共催	【主　催】弘前大学「子どもの貧困」プロジェクト、公益財団法人あすのば 【共　催】青森県
会場・対象・定員・参加費	【会　場】リンクステーションホール青森　中会議室 【対　象】教育関係者、福祉関係者、地域支援者、学生、一般市民 【定　員】150 名　【参加費】無料
参加人数	140 人
講　師	久保杉　嘉衛（青森県健康福祉部こどもみらい　課長 ） 三和　明久　（青森県教育庁学校教育課　主任指導主事） 金澤　拓紀　（子ども・若者サポート「つがる・つながる」代表） 花澤　昴乃　（慶応義塾大学４年・あすのば若者理事） 平間　恵美　（特定非営利活動法人「はちのへ未来ネット」代表理事） 山田　まり子（青森県スクールカウンセラー）
内　容	今年発表された「青森県子どもの生活実態調査」の結果にも示される通り、青森県においても深刻な課題である「子どもの貧困」について知り、貧困の当事者である若者の声を聴きながら、どのような支援ができるのか、行政・学校関係者・学生・市民が立場を超えて語り合う場をつくっていきます。

ＮＩＴＳカフェin弘前
「飾らないことばで参ります―子どものために対話する大人の集いVol.２―」

開　催　日	令和元年８月 17 日（土）9:30 ～ 12:00
主催・共催	【主　催】弘前大学大学院教育学研究科教職実践専攻
会場・対象・定員・参加費	【会　場】弘前大学教育学部２階　大教室 【対　象】青森県内一般教員及び県教委関係者、弘前大学教職大学院生及び教員、その他、子どものために対話する大人の方 【定　員】50 名　【参加費】無料
参加人数	34 人
講　師	【ファシリテーター】下山　達彦（弘前大学教職大学院　院生）
内　容	近年重視されている「コミュニケーション能力」。学校現場でも、子どもたちの「コミュニケーション能力」を育むため、様々な取組が行われている。しかし、「コミュニケーション能力」とは、具体的にはどんな力なのか。子どもたちのどんな姿をもって「コミュニケーション能力」が高い（または低い）と私たちは判断しているのか。案外、それぞれの考える子どもたちの姿は違っているのかもしれない。そんなことを切り口に、哲学対話的に交流しながら、教育への思いと情熱を交流させてみませんか？

「子どもの貧困」への支援を考える連続講座（全２回）

開　催　日	①令和元年９月29日（日）9:30～12:15 ②令和元年11月24日（日）9:30～12:15
主催・共催	【主　催】弘前大学「子どもの貧困」プロジェクト
会場・対象・定員・参加費	【会　場】弘前大学教育学部１Ｆ中教室 【対　象】教育関係者、福祉関係者、地域支援者、学生、一般市民 【定　員】各回 40 名　【参加費】無料
参加人数	80 人

講　　師	佐井　由美子（全国学校事務職員制度研究会　常任委員） 大里　文男　（弘前市立南中学校　校長） 三上　浩一郎（青森県立尾上総合高等学校　校長） 千葉　祐子　（青森県立三沢高等学校　スクールソーシャルワーカー） 岡田　加奈子（弘前乳児院　副院長） 吉田　美穂　（弘前大学教職大学院　准教授）
内　　容	青森県内の子どもの貧困の現状を、学校や地域で子どもたちに接している講師から学び、学校現場で、地域で子どもの貧困に対して何ができるかを、参加型ワークショップでご一緒に考えていきます。

2019年度セミナー「保育者・教師のための『気になる子』の保護者対応」

開　催　日	令和元年11月９日（土）13:00～16:15
主催・共催	【主　催】弘前大学教育学部附属特別支援教育センター 【共　催】日本臨床発達心理士会　東北支部
会場・対象・定員・参加費	【会　場】弘前大学教育学部大教室 【対　象】臨床発達心理士（臨床発達心理士の資格をお持ちでない方も参加可能） 【定　員】80 名　【参加費】無料
参加人数	91 人
講　　師	七木田　敦（広島大学大学院教育学研究科教育学講座　教授）
内　　容	インクルーシブ教育の推進にともない、配慮が必要な子、発達に課題のある子など「気になる子」への対応に不安を抱えている通常学級教師や保育者に向けた実践的内容をどのように助言するかについての研修が求められていると考えました。そこで、専門家のひとりである七木田敦氏に講演をお願いし、インクルーシブ教育実践につながる配慮や工夫の助言におけるヒントを得る機会にしたいと考えております。

インクルーシブスポーツ公開研修会「インクルーシブスポーツをやってみよう」

開　催　日	令和２年１月10日（金）13:00～16:00
主催・共催	【主　催】弘前大学教育学部附属特別支援学校 【共　催】弘前大学教育学部附属特別支援教育センター
会場・対象・定員・参加費	【会　場】弘前大学教育学部附属特別支援学校 【対　象】インクルーシブ・スポーツに関心のある人たち 【定　員】100 名　【参加費】無料
参加人数	54 人
講　　師	澤江　幸則（筑波大学体育系アダプテッド体育・スポーツ学）准教授
内　　容	弘前大学教育学部附属特別支援学校では、スポーツ庁委託事業「Special プロジェクト 2020」として、「インクルーシブスポーツ公開研修会～インクルーシブスポーツをやってみよう！～」を開催します。

公開研修会「幼児・障害児とのボールを使った活動実践の展開」

開　催　日	令和２年２月20日（土）9:00～19:00
主催・共催	【主　催】弘前大学教育学部附属特別支援教育センター 【共　催】Ballschule 北海道
会場・対象・定員・参加費	【会　場】弘前大学教育学部附属特別支援学校 【対　象】幼児・障害児とのボールを使った活動実践の展開 【定　員】20 名　【参加費】無料
参加人数	19 人
講　師	奥田　知靖（北海道教育大学岩見沢校スポーツ教育学科　准教授）
内　容	ドイツ・ハイデルベルクでは、バルシューレ・プログラムと称したボールを用いた身体活動支援があり、上記のような「気になる」子どもも分けられることなくインクルーシブ支援が幅広く展開されている。奥田氏はバルシューレ・プログラムの国内の第一人者であり、本研修により、特別支援教育をはじめとする障害児者支援の質の向上につなげる機会にしたいと考えている。

講座担当：医学研究科

令和元年度弘前大学大学院医学研究科公開講座「メンタルヘルス」

開　催　日	令和元年９月６日（金）18:00 ～ 20:00
主催・共催	【主　催】弘前大学大学院医学研究科 【共　催】公益財団法人 青森医学振興会
会場・対象・定員・参加費	【会　場】弘前大学医学部コミュニケーションセンター 【対　象】一般の方 【定　員】80 名　　【参加費】無料
参加人数	96 人
講　師	①井原　一成（弘前大学大学院医学研究科社会医学講座　教授） ②鄭　松伊　（弘前大学大学院医学研究科健康と美医科学講座　助教） ③栗林　理人（弘前大学大学院医学研究科附属子どものこころの発達研究センター　特任准教授）
内　容	①「高齢期のうつ病」 ②「身体活動とメンタルヘルス」 ③「子どものメンタルヘルス」

弘前大学大学院医学研究科「健康・医療講演会」「あなたの元気、応援するために教えたいこと」

開　催　日	令和元年10月19日（土）14:00～16:00
主催・共催	【主　催】弘前大学大学院医学研究科 【共　催】国民健康保険 五戸総合病院・公益社団法人 青森医学振興会
会場・対象・定員・参加費	【会　場】五戸町立公民館　小ホール 【対　象】一般の方 【定　員】なし　　【参加費】無料
参加人数	53 人
講　師	①安藤　敏典（国民健康保険五戸総合病院　外科・院長） ②中路　重之（弘前大学大学院医学研究科社会医学講座　特任教授）
内　容	①「日常生活に支障をきたす外科疾患（痔・下肢静脈瘤・脱腸など）」 ②「生活習慣病をきたす嗜好品（タバコやお酒）の影響」

講座担当：保健学研究科

育児中の母親のためのリフレッシュ講座@中泊

開　催　日	①令和元年６月３日(月)10:00～11:00 ②令和元年６月18日(火)10:00～11:30
主催・共催	【主　催】弘前大学大学院保健学研究科・中泊町教育委員会
会場・対象・定員・参加費	【会　場】①こども園こどまり　②中里こども園 【対　象】育児中の母親 【定　員】特になし　【参加費】無料
参加人数	20 人
講　師	高間木　静香(弘前大学大学院保健学研究科　助教) 北島　麻衣子(弘前大学大学院保健学研究科　助教) 橋本　美亜　(弘前大学大学院保健学研究科　助手)
内　容	①ヨーガ体験 ②精油を用いた製作体験（エアーフレッシュナー製作)、こどもの健康と育児のお話

ママの同窓会

開　催　日	①令和元年６月７日(金)　⑥令和元年11月15日(金) ②令和元年７月18日(木)　⑦令和元年12月６日(金 ③令和元年８月15日(木)　⑧令和２年１月16日(木)　10:30～11:30 ④令和元年９月12日(木)　⑨令和２年２月13日(木) ⑤令和元年10月17日(木)
主催・共催	【主　催】弘前大学大学院保健学研究科・弘前市駅前こどもの広場
会場・対象・定員・参加費	【会　場】駅前こどもの広場（ヒロロ３階） 【対　象】育児中の母親 【定　員】各回 15 名　　【参加費】無料
参加人数	59 人
講　師	高間木　静香(弘前大学大学院保健学研究科　助教) 北島　麻衣子(弘前大学大学院保健学研究科　助教) 橋本　美亜　(弘前大学大学院保健学研究科　助手)
内　容	精油を用いた製作体験（①～⑤エアーフレッシュナー製作、⑥～⑨ハンドクリーム製作)、座談会

育児中の母親のためのリフレッシュ講座@みどり保育園

開　催　日	①令和元年６月12日(水)　②令和元年11月８日(金)　10:00～11:00
主催・共催	【主　催】弘前大学大学院保健学研究科
会場・対象・定員・参加費	【会　場】みどり保育園 【対　象】育児中の母親 【定　員】各回 10 名　　【参加費】無料
参加人数	13 人
講　師	高間木　静香(弘前大学大学院保健学研究科　助教) 北島　麻衣子(弘前大学大学院保健学研究科　助教) 橋本　美亜　(弘前大学大学院保険学研究科　助手)
内　容	精油を用いた製作体験(①エアーフレッシュナー製作､②ハンドクリーム製作)

育児中の母親のためのリフレッシュ講座@弘大病院

開　催　日	①令和元年６月19日(水) ②令和元年７月23日(火)13:30～14:30 ③令和元年12月13日(金)
主催・共催	【主　催】弘前大学大学院保健学研究科
会場・対象・定員・参加費	【会　場】弘大病院　小児科病棟 【対　象】育児中の母親 【定　員】制限なし　【参加費】無料
参加人数	24 人
講　師	高間木　静香(弘前大学大学院保健学研究科　助教) 北島　麻衣子(弘前大学大学院保健学研究科　助教) 橋本　美亜　(弘前大学大学院保健学研究科　助手)
内　容	精油を用いた製作体験（①②エアーフレッシュナー製作、③ハンドクリーム製作)、座談会

青森継続看護研究会

開　催　日	令和元年９月４日(土)13:00～17:00
主催・共催	【主　催】弘前大学大学院保健学研究科
会場・対象・定員・参加費	【会　場】弘前大学医学部保健学科　63 講義室 【対　象】一般、教職員、学生の方等 【定　員】200 名程度　【参加費】無料
参加人数	122 人
講　師	講師：網塚　貴介(青森県立中央病院総合周産期母子医療センター) シンポジウムファシリテーター：奥寺　さおり(八戸市立市民病院) 扇野　綾子　(保健学研究科) 指定発言者：石田　紋子　(訪問看護ステーションケアサポート) 木村　いち子(八太郎山療養園) 佐藤　誠子　(下田こども園)
内　容	臨床・地域における継続看護の実践及び研究に関心を有するものが集まり、知識と技術の向上を図り、人々の健康と福祉に貢献することを主旨とした青森継続看護研究集会として、「子どもが医療的ケアを受けながら家族と共に安心して暮らすための支援」をメインテーマに講演及びシンポジウムを開催した。

第２回OSG内膜LBC研修会 in 弘前

開　催　日	令和元年９月14日(日) 13:00～18:00
主催・共催	【主　催】大崎内膜細胞診研究会 (OSG) 【後　援】弘前大学大学院保健学研究科・青森県臨床細胞学会・青森県細胞検査士会
会場・対象・定員・参加費	【会　場】弘前大学医学部保健学科 E 棟３階　顕微鏡実習室 【対　象】一般、教職員、学生の方等 【定　員】50 名　　【参加費】3,000 円
参加人数	50 人
講　師	①平井　康夫(獨協医科大学　産婦人科学教室) ②渡邉　純　(弘前大学大学院保健学研究科　教授) ③則松　良明(愛媛県立医療技術大学　保健科学部　教授)

内　　容	①「子宮内膜細胞診の国際標準化を目指して」 ②「ＯＳＧ式子宮内膜細胞診判定の実状と有用性」 ③「子宮内膜細胞診の精度向上のために―特に内膜腺間質破綻（ＥＧＢＤ）の判定について―」 「標本の観察におけるポイントについて」

第14回泌尿器細胞診新報告様式に沿ったワークショップ in 弘前

開　催　日	令和元年９月22日（日）9:55～16:30
主催・共催	【主　催】泌尿器細胞診（別府）カンファレンス 【後　援】弘前大学大学院保健学研究科・日本臨床細胞学会・青森県臨床細胞学会・青森県細胞検査士会
会場・対象・定員・参加費	【会　場】弘前大学医学部保健学科Ｅ棟３Ｆ総合医療・医療生物実験室（鏡検実習室）、２Ｆ　第21・22講義室（講義、休憩室） 【対　象】一般、教職員、学生の方等 【定　員】50名 【参加費】泌尿器細胞診カンファレンス会員：4,000円　非会員：6,000円
参加人数	43人
講　　師	渡邉　純　（弘前大学大学院保健学研究科生体検査科学領域） 堀江　香代（弘前大学大学院保健学研究科生体検査科学領域） 三浦　弘守（東北大学病院病理部） 熊谷　直哉（弘前大学医学部付属病院病理部） 福田　正彦（ヒッサンメディカルサポートセンター） 四釜　育与（黒石病院臨床検査科） 熊谷　直哉（弘前大学医学部附属病院病理部） 小島　啓子（弘前大学医学部附属病院病理部）
内　　容	「泌尿器細胞診新報告様式の概要と細胞像について」他

市民公開講座「日常の放射線量を知り、災害に備える」

開　催　日	令和元年９月29日（日）13:00～16:00
主催・共催	【共催】むつ総合病院放射線科・地域連携部 弘前大学大学院保健学研究科生体応答科学研究センター 【後援】むつ市
会場・対象・定員・参加費	【会　場】公済会館　３階ホール（むつ市） 【対　象】むつ市及び近隣町村住民の方々、地域包括支援センター等職員 【定　員】特になし　　【参加費】無料
参加人数	40人
講　　師	甲田　久美子（むつ総合病院　看護局） 山本　八重子（東通地域包括支援センター　社会福祉士） Goh Valerie SweeTing（Singapore nuclerresearch & safetynitiative 研究員、弘前大学大学院保健学研究科 大学院生） 三浦　富智　（弘前大学大学院保健学研究科　准教授）
内　　容	【第１部】実績報告 ①2017年度比較「放射線に関する意識調査の結果から」 ②「放射線量測定を通じての地域包括ケア」 【第２部】特別講演 特別講演Ⅰ「福島調査の経験を通して考える地域ネットワーク」 特別講演Ⅱ「福島県浪江町の活動を通して学んだ備えと理解の重要性」

育児中の母親のためのリフレッシュ講座@岩木ぴよぴよひろば

開　催　日	令和元年10月25日(金)10:00～11:30
主催・共催	【主　催】弘前大学大学院保健学研究科
会場・対象・定員・参加費	【会　場】岩木児童センター 【対　象】育児中の母親 【定　員】20 名　【参加費】無料
参加人数	16 人
講　師	高間木　静香(弘前大学大学院保健学研究科　助教) 北島　麻衣子(弘前大学大学院保健学研究科　助教) 橋本　美亜　(弘前大学大学院保健学研究科　助手)
内　容	精油を用いた製作体験（ハンドクリーム製作)、こどもの健康と育児のお話

講演「足の科学からみたスポーツ障害の予防」

開　催　日	令和元年10月26日(土)10:00～11:30
主催・共催	【主　催】弘前大学大学院保健学研究科
会場・対象・定員・参加費	【会　場】弘前大学創立 50 周年記念会館　岩木ホールＡ・Ｂ 【対　象】一般市民・スポーツ指導者、運動部員、保護者 【定　員】70 ～ 80 名　【参加費】無料
参加人数	57 人
講　師	尾田　敦(弘前大学大学院保健学研究科　教授)
内　容	足は万病のもとといいます。スポーツでけがをしては、せっかく鍛えた成果を充分出せずに終わってしまいます。特に足はどのようなスポーツでも基本になるものです。そこで、昨年に引き続いて、足の機能や形態について科学的見地からスポーツ時の障害予防について講師がわかりやすく説明します。また、足の健康について実際に足部計測して相談にのります。

つがるブランド地域先導ナース育成事業終了後フォローアップ研修

開　催　日	令和元年12月14日(土)
主催・共催	【主　催】弘前大学大学院保健学研究科
会場・対象・定員・参加費	【会　場】弘前大学医学部保健学科 【対　象】つがるブランド地域先導ナース育成事業修了生 【定　員】40 名程度　【参加費】無料
参加人数	15 人
講　師	齊藤　純子(ひいらぎ訪問看護ステーション所長)
内　容	つがるブランド地域先導ナース育成事業修了後フォローアップ研修として、[「看護って何？」病院の外で感じること　在宅看護の何がわからないのかを具体的に考えてみよう］をテーマに、齊藤純子氏（弘前市　ひいらぎ訪問看護ステーション所長）による講演後、地域包括ケア時代の病院看護師にかかる課題等について意見交換がされた。

講座担当：理工学研究科

地質の日in弘前2019

開　催　日	令和元年５月12日（日）13:30～15:00
主催・共催	【主　催】弘前大学大学院理工学研究科
会場・対象・定員・参加費	【会　場】弘前大学理工学部１号館２階　第２講義室 【対　象】おおむね高校生以上 【定　員】100 名　【参加費】無料
参加人数	20 人
講　師	島口　天　（青森県立郷土館　学芸員） 根本　直樹（弘前大学大学院理工学研究科　講師）
内　容	「地質の日」に合わせて、地質学を普及する催しを行う。今年度は「青森県における地質研究」に関する数件の講演を行う。

令和元年度第1回日本工学アカデミー北海道・東北支部講演会

開　催　日	令和元年７月12日（金）14:30～16:30
主催・共催	【主　催】日本工学アカデミー北海道・東北支部 【共　催】弘前大学大学院理工学研究科
会場・対象・定員・参加費	【会　場】弘前大学創立 50 周年記念会館２階　岩木ホール 【対　象】一般　【参加費】無料
参加人数	67 人
講　師	①中路　重之（弘前大学大学院医学研究科社会医学講座特任教授・弘前大学 COI 拠点長・全体・研究統括（RL）） ②本田　明弘（弘前大学地域戦略研究所長　教授） ③片岡　俊一（弘前大学大学院理工学研究科副研究科長　教授）
内　容	①「健康づくりを基点とした大学の地域貢献」 ②「地域と再生可能エネルギー」 ③「弘前大学の地震防災研究」

2019年度「化学への招待」弘前大学一日体験化学教室

開　催　日	令和元年８月９日（金）10:00～16:30
主催・共催	【主　催】日本化学会東北支部　弘前大学大学院理工学研究科 【共　催】弘前市教育委員会・青森県教育委員会・東北ポリマー懇話会・弘化会
会場・対象・定員・参加費	【会　場】弘前大学理工学部・教育学部・農学生命科学部 【対　象】高校生（中学生・一般も可） 【定　員】60 名　【参加費】無料
参加人数	110 人
講　師	①竹内　大介（弘前大学大学院理工学研究科　教授） ②川上　　淳（弘前大学大学院理工学研究科　准教授） ③糠塚　いそし・北川　文彦・野田　香織（弘前大学大学院理工学研究科） ④阿部　敏之（弘前大学大学院理工学研究科　教授） ⑤長南　幸安（弘前大学大学院理工学研究科　教授） ⑥山崎　祥平（弘前大学大学院理工学研究科　准教授） ⑦宮本　量　（弘前大学大学院理工学研究科　准教授） ⑧増野　敦信（弘前大学大学院理工学研究科　准教授） ⑨栗田　大輔（弘前大学農学生命科学部　准教授）

内　　容	先端科学・技術の一端を担う化学に興味を抱いてもらえるよう，高校生（中学生）を対象に「化学への招待」を開催します。 【Ⅰ.講演（午前)】 ①「金属触媒でつくる新しい高分子」 【Ⅱ.実験（午後)】 ②「果物のにおいを作る」・「ルミノールを用いた発光反応」 ③「色で測る！！―ドリンク剤中の鉄の定量―」 ④「バイオ光化学電池」・「色が変わる無機高分子」 ⑤「プラスチックの性質を探ろう」 ⑥「コンピュータの中で分子をつくる」 ⑦「酸素を吸う錯体の最高」 ⑧「色付きガラスをつくってみよう」 ⑨「進撃の大腸菌！！ DNA 抽出実験 +VR で見る！光るタンパク質の正体」

東北地区特別講演会「柔らかいロボットと超スマート社会」

開　催　日	令和元年８月23日（金）15:00～17:00
主催・共催	【主　催】日本機械学会 【共　催】弘前大学大学院理工学研究科 弘前大学大学院理工学研究科附属医用システム創造フロンティア
会場・対象・定員・参加費	【会　場】弘前大学理工学部１号館４階　第８講義室 【対　象】学生、教員、一般　【参加費】無料
参加人数	42 人
講　　師	①大日方　五郎（中部大学工学部ロボット理工学科　教授） ②長縄　明大　（秋田大学大学院理工学研究科システムデザイン工学専攻　教授）
内　　容	①「人の筋骨格から考えるソフトロボティクス」 ②「超スマート社会構築に必要なテクノロジーについて」

総合文化祭「楽しい科学・サイエンスへの招待」

開　催　日	令和元年10月27日（日）10:00～16:00
主催・共催	【主　催】弘前大学大学院理工学研究科
会場・対象・定員・参加費	【会　場】弘前大学理工学部 【対　象】楽しい科学：小学生以上（23 企画）　サイエンスへの招待：高校生以上（15 企画） 【参加費】無料
参加人数	528 人
講　　師	弘前大学大学院理工学研究科教職員
内　　容	理工学部の実験室をみなさんに開放します。教員や学生のていねいな指導のもとで、いろいろな実験や学習を体験することができます。

有機合成化学協会東北支部主催「青森地区講演会」

開　催　日	令和元年11月８日(金) 13:00～15:00
主催・共催	【主　催】有機合成化学協会東北支部 【共　催】弘前大学大学院理工学研究科
会場・対象・定員・参加費	【会　場】弘前大学理工学部１号館５階 第10講義室 【対　象】学生、教員、一般　【参加費】無料
参加人数	70人
講　師	平間　正博(東北大学名誉教授　㈱アクロスケール)
内　容	「地の利・人の和・好奇心－シガトキシンの全合成と異なる展開」

第53回「日本生体医工学会東北支部大会」

開　催　日	令和元年11月９日(土) 9:30～17:00
主催・共催	【主　催】日本生体医工学会東北支部 【共　催】精密工学会東北支部・弘前大学大学院理工学研究科・弘前大学大学院理工学研究科附属医用システム創造フロンティア
会場・対象・定員・参加費	【会　場】弘前大学理工学部１号館４階 第８講義室 【対　象】一般　【参加費】無料
参加人数	44人
講　師	福田　幾夫(弘前大学大学院医学研究科 胸部心臓血管外科学講座　教授)
内　容	「医工連携が切り拓く新たなフロンティア―弘前大学での18年の経験から」

日本鉄鋼協会「湯川記念講演会」

開　催　日	令和元年12月４日(水) 14:30～17:30
主催・共催	【主　催】日本鉄鋼協会東北支部 【共　催】弘前大学大学院理工学研究科 日本鉄鋼協会･自主フォーラム「材料特性の各種要因の解析と設計」
会場・対象・定員・参加費	【会　場】弘前大学創立50周年記念会館　岩木ホール 【対　象】一般　【参加費】無料
参加人数	30人
講　師	①田中　俊一郎(東北大学マイクロシステム融合研究開発センター　教授) ②阿部　冨士雄(特定国立研究開発法人　物質・材料研究機構)
内　容	①「大きな物体の局所応力を迅速に測る」 ②「CO2削減に向けた高効率火力発電用フェライト系耐熱鋼の材料設計」

日本気象学会東北支部気象講演会
「気象と漁業 Chain of changes ～気候変動がもたらす極端な気象現象と漁業資源の変化の連鎖～」

開　催　日	令和元年12月７日（土）13:30～16:00
主催・共催	【主　催】日本気象学会東北支部 【共　催】弘前大学大学院理工学研究科・青森地方気象台
会場・対象・定員・参加費	【会　場】弘前大学創立 50 周年記念会館　みちのくホール 【対　象】一般　【参加費】無料
参加人数	131 人
講　師	①加藤　輝之（気象庁　気象大学校　教頭） ②木所　英昭（国立研究開発法人水産研究・教育機構 東北区水産研究所　資源環境部　沿岸資源グループ長）
内　容	①「近年の極端な気象現象の変化と豪雨をもたらす線状降水帯」 ②「気候変動と日本の水産資源・旬の食卓の変化」

講座担当：農学生命科学部

公開講座「無肥料無農薬栽培（自然栽培）と農業の未来」

開　催　日	令和元年10月27日（日）13:30～15:00
主催・共催	【主　催】弘前大学農学生命科学部
会場・対象・定員・参加費	【会　場】弘前大学農学生命科学部４階　433 講義室 【対　象】一般、教職員、学生の方等 【定　員】特になし　【参加費】無料
参加人数	42 人
講　師	杉山　修一（弘前大学農学生命科学部生物学科　教授）
内　容	無農薬でなぜ病気や害虫を抑えられるか？について最近の研究を紹介します。

公開講座「リンゴを科学する」

開　催　日	令和元年12月14日（土）9:00～16:00
主催・共催	【主　催】平川市・弘前大学農学生命科学部附属生物共生教育研究センター
会場・対象・定員・参加費	【会　場】平川市生涯学習センター２階　多目的ホール 【対　象】一般 【定　員】特になし　【参加費】無料
参加人数	89 人
講　師	①林田　大志（弘前大学農学生命科学部　助教） ②今井　和人（平川市超りんご会議実行委員会） ③長田　恭一（明治大学農学部　教授） ④田中　和明（弘前大学農学生命科学部　准教授）
内　容	①「変なリンゴ大集合 !!」 ②「特別報告『平川市超リンゴ会議』を開催して」 ③「リンゴに含まれる機能性成分とその摂取効果」 ④「病原菌も頑張って生きている」

戦略１プロジェクト成果公開事業「稲わら利活用促進フォーラムin弘前」

開　催　日	令和２年１月14日（火）13:30～15:30
主催・共催	【主　催】弘前大学農学生命科学部
会場・対象・定員・参加費	【会　場】弘前大学創立 50 周年記念会館　会議室１ 【対　象】一般 【定　員】特になし　【参加費】無料
参加人数	12 人
講　師	①泉谷　眞実　（弘前大学農学生命科学部　教授） ②青森県農林水産部 食の安全・安心推進課 ③ワラ屋 .com ④佐々木　修一（佐々保商店）
内　容	本フォーラムでは、稲わら利活用の重要性と北東北における利活用の現状を市民や農家の方、関係機関の皆様に広く知っていただくことを目的としています。 ①稲わらの利活用方法とその意義 ②青森県の稲わら利活用の取り組みについて ③青森県の稲わら収集事業について ④秋田県のわら縄製造事業について

令和元年度「戦略１」事業 国際競争力のある青森ブランド食産業の創出に向けた“青森型地方創生サイクル”の確立（取組３）研究成果報告会

開　催　日	令和２年２月４日（火）10:00～16:30
主催・共催	【主　催】弘前大学農学生命科学部
会場・対象・定員・参加費	【会　場】弘前大学コラボ弘大８階　八甲田ホール 【対　象】本学教職員・学生、産学官金等関係者、農業関係団体　等 【定　員】特になし　【参加費】無料
参加人数	80 人
講　師	【事業全体状況報告】石川　隆二（弘前大学農学生命科学部　教授） 【研究成果報告】戦略１プロジェクト参画教員 64 名
内　容	『令和元年度「戦略１」事業 国際競争力のある青森ブランド食産業の創出に向けた“青森型地方創生サイクル”の確立（取組３）研究成果報告会』を開催いたします。

弘前大学白神自然環境研究センター･白神山地ビジターセンター合同セミナー「今の自然を切り取り，後世に残す」

開　催　日	令和２年２月22日（土）13:00～16:00
主催・共催	【主　催】弘前大学農学生命科学部附属白神自然環境研究センター・ 白神山地ビジターセンター
会場・対象・定員・参加費	【会　場】白神山地ビジターセンター、白神自然環境研究センター田代分室 【対　象】一般 【定　員】特になし　【参加費】無料
参加人数	30 人
講　師	①中村　剛之 （弘前大学農学生命科学部附属白神自然環境環境研究センター　准教授） ②山岸　洋貴 （弘前大学農学生命科学部附属白神自然環境環境研究センター　助教）
内　容	このセミナーでは、標本を作り後世に残す意味とさまざまな標本の形態、作成方法を解説し、標本を集め残すことへの理解を深めます。地域の自然を学術的にもしっかりと見つめ、伝えていくための知識と技術として，標本について考えてみましょう。講演の後は場所を移動し、標本を見ながらディスカッションを行います。 ①「標本を残す意義，さまざまな動物標本と作成」 ②「植物法本とその管理」

戦略１プロジェクト成果公開事業 講演会
「岩手大学, 山形大学, 弘前大学の地域活性化事業の展望」

開　催　日	令和２年３月４日(水)15:30～17:50
主催・共催	【主　催】弘前大学農学生命科学部
会場・対象・定員・参加費	【会　場】弘前大学コラボ弘大８階　八甲田ホール 【対　象】本学教職員、産学官金等関係者、農業関係団体　等 【定　員】50 名程度　【参加費】無料
参加人数	27 人
講　師	①石川　隆二(弘前大学農学生命科学部　教授) ②高畑　義人(岩手大学　名誉教授) ③片平　光彦(山形大学農学部　教授)
内　容	弘前大学農学生命科学部が中心に取り組んでいる戦略事業の活動内容並びに岩手大学農学部が実施している地域貢献事業、山形大学農学部における地域活性化への取り組みや成果について、最新情報を共有し情報交換することにより、今後の更なる地域への貢献に資する事を目的とする。 ①弘前大学戦略１取組３による地域貢献 ②岩手大学農学部の地域貢献事業とその成果 ③山形大学農学部での地域活性化に関する取り組み－ＩｏＴを用いて地域資源に光をあてる－

講座担当：地域社会研究科

公開セミナーin青森市「自治体政策の課題と展望」

開　催　日	令和元年11月３日（日）9:30～15:30
主催・共催	【主　催】弘前大学大学院地域社会研究科
会場・対象・定員・参加費	【会　場】青森県観光物産館アスパム８階「しらかみ」 【対　象】地域の社会人、自治体関係者、教育研究関係者、地域おこし等地域で活動する団体・NPO 等関係者※大学院レベルの研究分野に興味がある方 【定　員】30 名　　【参加費】無料
参加人数	18 人
講　師	①佐々木　純一郎（弘前大学地域社会研究科　教授） ②内山　大史　　（弘前大学地域社会研究科　教授） ③金目　哲郎　　（弘前大学人文社会科学部　准教授）
内　容	本セミナーは、普段は大学院生を対象に大学院地域社会研究科の授業カリキュラムとしている内容を、地域の社会人を対象に公開セミナーとして開放するものであり、これまでに講師それぞれが実践してきた様々な地域の課題とその解決の取組みをテーマに掲げて講義を行います。 ①「自治体中小企業政策の焦点～地域商社の可能性～」 ②「地域産業振興の取組み～食産業における高付加価値化～」 ③「地域活性化に向けた自治体財政の可能性と課題」

公開セミナーin函館市「つながりをデザインする」

開　催　日	令和元年11月16日（土）13:00～17:40 令和元年11月17日（日）9:00～12:30
主催・共催	【主　催】弘前大学大学院地域社会研究科
会場・対象・定員・参加費	【会　場】ホテルサンシティ函館：大ホール 【対　象】地域の社会人、自治体関係者、教育研究関係者、地域おこし等地域で活動する団体・NPO 等関係者※大学院レベルの研究分野に興味がある方 【定　員】30 名　　【参加費】無料
参加人数	24 人
講　師	①北原　啓司　（弘前大学大学院地域社会研究科長　教授） ②池ノ上　真一（札幌国際大学　教授） ③平井　太郎　（弘前大学大学院地域社会研究科　准教授） ④土井　良浩　（弘前大学大学院地域社会研究科　准教授）
内　容	①「海峡を越えたつながりのデザインとは」 ②「人口減少社会のつながりのデザインとは」 ③「時間のつながりのデザイン―SDGs にむかうプロセスとは―」 ④「人々のつながりのデザイン―“つながり”を生み出す場所の在り方―」

公開セミナーin紫波町「真の公民連携を科学する」

開　催　日	令和元年11月23日（土）13:00～17:00 令和元年11月24日（日）9:00～12:30
主催・共催	【主　催】弘前大学大学院地域社会研究科
会場・対象・定員・参加費	【会　場】オガール紫波敷地内　紫波町情報交流館 【対　象】地域の社会人、自治体関係者、教育研究関係者、地域おこし等地域で活動する団体・NPO 等関係者※大学院レベルの研究分野に興味がある方 【定　員】30 名　　【参加費】無料
参加人数	27 人
講　師	①北原　啓司（弘前大学大学院地域社会研究科長　教授） ②鎌田　千市（紫波町企画総務部　企画課長） ③平井　太郎（弘前大学大学院地域社会研究科　准教授） ④土井　良浩（弘前大学大学院地域社会研究科　准教授）
内　容	①「『公』をデザインする！？」 ②「紫波町の公民連携」 ③「SDGs にむかうプロセスとは」 ④「市民組織による公的事業―公的空間の管理運営や利活用に着目して―」

講座担当：被ばく医療総合研究所

第95回「知の拠点セミナー」

開　催　日	令和２年２月21日（金）18:00～20:00
主催・共催	【主　催】弘前大学被ばく医療総合研究所 【共　催】金沢大学がん進展制御研究所
会場・対象・定員・参加費	【会　場】京都大学東京オフィス 【対　象】一般市民 【定　員】70 名　　【参加費】無料
参加人数	約 50 人
講　師	①松本　邦夫 （金沢大学がん進展制御研究所　腫瘍動態制御研究分野　教授） ②三浦　富智（弘前大学大学院保健学研究科　准教授）
内　容	①「がんの無限増殖と創薬」 ②「福島県に生息する野生生物への放射線影響」

講座担当：医学部附属病院

第11回さくらミーティング

開　催　日	令和元年４月27日（土）15:00～17:00
主催・共催	【主　催】弘前大学大学院医学研究科・消化器乳腺甲状腺外科講座・小児外科学講座 【共　催】NPO 法人外科支援機構弘前
会場・対象・定員・参加費	【会　場】弘前市立中央公民館　中会議室 【対　象】医療従事者，医学生 【定　員】特になし　【参加費】無料
参加人数	60 人
講　師	①小田切　理（弘前大学大学院医学研究科地域救急医療学講座　助手） 岡野　健介 （弘前大学医学部附属病院消化器外科、乳腺外科、甲状腺外科　助教） 山名　大輔（弘前大学大学院医学研究科消化器外科学講座　助教） ②瀬戸　泰之 （東京大学大学院医学系研究科消化管外科学・乳腺内分泌外科学　教授）
内　容	①「私の成長―次のステップに向けて―」 ②「よりよい手術で治す」

第13回・第14回青森県抗菌化学療法セミナー「耐性菌を考慮した抗菌薬適正使用１・２」

開　催　日	令和元年５月13日（月）　【第１部】18:00～18:45　【第２部】18:45～19:30 令和元年５月14日（火）　【第１部】18:00～18:45　【第２部】18:45～19:30
主催・共催	【主　催】弘前大学医学部附属病院感染制御センター
会場・対象・定員・参加費	【会　場】弘前大学医学部臨床大講義室・臨床小講義室 【対　象】医師、薬剤師、感染制御に関わっている職員 【定　員】特になし　【参加費】無料
参加人数	390 人
講　師	齋藤　紀先（弘前大学医学部附属病院感染制御センター　副センター長）
内　容	「耐性菌を考慮した抗菌薬適正使用１・２」

2019年度弘前大学医学部附属病院看護部　認定看護師による公開講座（全６回）

開　催　日	①令和元年５月24日（金） ②令和元年６月14日（金） ③令和元年７月19日（金） ④令和元年９月13日（金） ⑤令和元年10月８日（火） ⑥令和元年11月15日（金） 18:00～19:00
主催・共催	【主　催】弘前大学医学部附属病院看護部
会場・対象・定員・参加費	【会　場】①～⑥　弘前大学医学部附属病院　Ｂ１看護部研修室 【対　象】看護師 【定　員】①③④⑤⑥ 30 名　② 50 名　【参加費】無料
参加人数	258 名（６回合計）

講　　師	①福岡　幸子　（弘前大学医学部附属病院　看護師） ②奈良　順子　（弘前大学医学部附属病院　看護師） 　片山　美樹　（弘前大学医学部附属病院　看護師） ③佐藤　絢子　（弘前大学医学部附属病院　看護師） ④横山　昭菜　（弘前大学医学部附属病院　看護師） ⑤桜庭　咲子　（弘前大学医学部附属病院　看護師） ⑥佐藤　千紗斗（弘前大学医学部附属病院　看護師）
内　　容	本公開講座の趣旨は、認定看護師による確かな知識と技術を学び、各医療機関でよりよい看護サービスを提供する支援となることをめざしております。また、同じような悩みを抱えている看護職のネットワークの機会となればと願っております。 ①「これで安心♪脳卒中院内発生時に必要な看護」 ②「実践に活かそう！基礎から学ぶ心電図」 ③「急変時に行う観察・初期対応・報告「急変時に何を見て何をして何を伝えるのか」」 ④「周術期看護の基礎知識～安全な手術を提供する術前準備～」 ⑤「これは知っておきたい血糖のはなし～血糖の見方が変わる！～」 ⑥「こんな時、どうすればいい？～終末期患者の家族へのケア～」

特別講演会「ペリー幼児教育計画から学ぶ質の高い幼児教育の実現に向けて」

開　催　日	令和元年６月１日（土）13:30～15:30
主催・共催	【主　催】弘前大学大学院神経精神医学講座・弘前大学大学院医学研究科附属子どものこころの発達研究センター・弘前大学教育学部・弘前大学医学部保健学科 【共　催】公益社団法人子どもの発達科学研究所
会場・対象・定員・参加費	【会　場】弘前大学教育学部　大教室 【対　象】幼児教育に関心を持つ方（保護者、幼稚園保育園関係者など） 【定　員】200 名　【参加費】資料代：1,000 円
参加人数	92 人
講　　師	シャノン･ロックハート（HighScope 教育研究財団　幼児教育副ディレクター） 若林　巴子（オークランド大学准教授）
内　　容	本セミナーでは､ペリー幼児教育計画において､『質の高い幼児教育』を提供し、その後も研究を続けているアメリカ、デトロイトに本部を置く HighScope 教育財団の専門家であるシャノン・ロックハート先生、元 HighScope 教育財団幼児教育評価研究センター長で、現在オークランド大学の准教授である若林巴子先生を招聘し、ペリー幼児教育計画から何を学ぶべきか、また子どもたちの将来の幸せを約束する『質の高い幼児教育』とは何かについて語っていただきます。 ■全ての子どもにつけたい「生きる力」とは？ ■HighScope カリキュラムで重視する非認知スキル ■実行機能を育む “Plan-Do-Review” タイム ■主体的な学習者である子どもを支える大人の役目

糖尿病を知って防ごう健康維持セミナー

開　催　日	令和元年６月１日（土）13:30～15:40
主催・共催	【主　催】青森県腎臓バンク 【共　催】弘前大学大学院医学研究科先進移植再生医学講座、 弘前大学大学院医学研究科泌尿器科学講座、 青森県透析医会
会場・対象・定員・参加費	【会　場】アスパム４Ｆ「十和田」 【対　象】一般の方ならどなたでも 【定　員】特になし　【参加費】無料
参加人数	45 人
講　師	大山　力（弘前大学大学院医学研究科泌尿器科学講座　教授）
内　容	腎臓を大切にして健康長寿を実現しよう～腎不全とその治療～ ■「糖尿病のと知識と予防について」 ■「腎臓を大切にして健康長寿を実現しよう」

「腎不全医療　入門」

開　催　日	①令和元年６月22日（土）10:20～11:50 ②令和元年７月30日（火）16:00～17:30
主催・共催	【主　催】青森県腎臓バンク 【共　催】弘前大学大学院医学研究科先進移植再生医学講座、 弘前大学大学院医学研究科泌尿器科学講座、青森県透析医会
会場・対象・定員・参加費	【会　場】①弘前学院大学講義室　②弘前大学大学院保健学研究科 【対　象】①弘前学院大学学生　②弘前大学医学部保健学科学生 【定　員】特になし　【参加費】無料
参加人数	130 人
講　師	①②⑴村上　礼一 （弘前大学大学院医学研究科先進移植再生医学講座　講師） ⑵畠山　真吾（弘前大学医学部附属病院泌尿器科　講師） ⑶鈴木　旬子（青森県臓器移植コーディネーター）
内　容	①②⑴「腎不全とその治療」 ⑵「腎移植の実際」、「青森県の腎移植と弘大病院の役割」 ⑶「臓器移植コーディネーターの役割

外科手術体験セミナーin五所川原

開　催　日	令和元年６月29日（土）12:00～16:10
主催・共催	【主　催】弘前大学医学部附属病院　外科 【共　催】青森県・つがる西北五広域連合つがる総合病院
会場・対象・定員・参加費	【会　場】つがる総合病院 【対　象】県内の高校生 【定　員】特になし　【参加費】無料
参加人数	56 人
講　師	弘前大学医学部附属病院、つがる総合病院の外科の医師
内　容	医療従事者自身が病院から外に出て現地で子供たちと触れ合い、７つの模擬手術を体験してもらい、子供たちに医師の仕事の素晴らしさを知ってもらう。

「若手研究セミナー」のご案内

開　催　日	令和元年７月８日（月）17:50～
主催・共催	【主　催】NPO 法人外科支援機構弘前　消化器外科学講座
会場・対象・定員・参加費	【会　場】健康未来イノベーションセンター　１階 【対　象】教員・大学院学生・医学部学生など 【定　員】特になし　【参加費】無料
参加人数	35 人
講　師	①鈴木　貴弘　（弘前大学大学院医学研究科　２年次大学院生） ②増田　しのぶ（日本大学医学部病態病理学系腫瘍病理学分野主任　教授）
内　容	①「日本大学医学部腫瘍病理学講座での研究報告」 ②「これからキャリアを重ねる若手医師へ」

弘前市特別公開講座「子どもの発達を伸ばすために知っておきたい睡眠の知識」

開　催　日	令和元年７月12日（金）18:00～19:00
主催・共催	【主　催】弘前大学大学院医学研究科附属子どものこころの発達研究センター・ 弘前大学大学院医学研究科神経精神医学講座
会場・対象・定員・参加費	【会　場】弘前大学本町キャンパス　健康未来イノベーションセンター 【対　象】養育者、保護者、一般の方々、学生、教職員、福祉職員など 【定　員】特になし　【参加費】無料
参加人数	30 人
講　師	毛利　育子 （小児科専門医・大阪大学大学院連合小児発達学研究科・准教授）
内　容	「子どもの発達を伸ばすために知っておきたい睡眠の知識」

令和元年度　青森県肝炎県民公開講座　「ウイルス性肝炎についてもっと知ろう」

開　催　日	令和元年７月27日（土）14:00～16:00
主催・共催	【主　催】青森県 【共　催】青森市・弘前大学医学部附属病院
会場・対象・定員・参加費	【会　場】青森国際ホテル３階　孔雀の間 【対　象】一般の方ならどなたでも 【定　員】100 名　【参加費】無料
参加人数	75 人
講　師	①沼尾　宏　　（青森県立中央病院消化器内科　部長） ②成田　芽生　（青森県立中央病院薬剤部　薬剤師） ③白取　麻衣子（青森県立中央病院栄養管理部　管理栄養士）
内　容	①「ウイルス肝炎の最新情報」 ②「肝疾患に関わる治療薬」 ③「肝臓に優しい食事～食生活を振り返ろう～」

第５回ELNEC-J in弘前 コアカリキュラム　看護師教育プログラム

開　催　日	令和元年７月27日（土）8:20～18:30 令和元年７月28日（日）8:10～15:30
主催・共催	【主　催】弘前大学医学部附属病院　腫瘍センター 【共　催】弘前大学大学院保健学研究科地域保健医療教育研究センター・ 未来がん医療プロフェッショナル養成プラン
会場・対象・定員・参加費	【会　場】弘前大学医学部附属病院外来棟５階 大会議室 【対　象】看護師など 【定　員】40 名前後　【参加費】無料
参加人数	37 人
講　師	秋庭　聖子　（函館おしま病院　看護師） 佐藤　美紀　（下北医療センターむつ総合病院　看護師） 馬場　教子　（八戸市立市民病院　看護師） 佐井　菜央美（独立国立機構弘前病院　看護師） 力石　圭子　（十和田市立中央病院　看護師） 一戸　真紀　（青森市民病院　看護師） 若松　歩　　（青森市民病院　看護師） 宮﨑　紫穂　（八戸赤十字病院　看護師） 柴田　麻由子（あおもり協立病院　看護師） 高橋　由香子（黒石病院　看護師） 野戸　結花　（弘前大学大学院保健学研究科　教授） 佐藤　千紗斗（弘前大学医学部附属病院　看護師） 浅利　三和子（弘前大学医学部附属病院　看護師）
内　容	エンド･オブ･ライフ･ケアにおける看護、痛み･症状のマネジメント、エンド･オブ・ライフ・ケアにおける倫理的問題など、エンド・オブ・ライフにある患者さんとご家族に必要なケアを包括的に学習します。

令和元年度「みんなで知ろう！がんフェスティバル～これが“わたし”～」

開　催　日	令和元年８月18日（日）12:00～16:00
主催・共催	【主　催】弘前大学医学部附属病院 【共　催】未来がん医療プロフェッショナル養成プラン
会場・対象・定員・参加費	【会　場】土手町コミュニティパーク多目的ホール A/B　ポム広場 【対　象】一般市民 【定　員】特になし　【参加費】無料
参加人数	316 人
講　師	大里　絢子　（弘前大学大学院医学研究科　助教） 嶋﨑　真樹子（弘前大学医学部附属病院　管理栄養士） 佐藤　誠人　（弘前中央病院　MSW　認定がん専門相談員） 西村　司　　（青森県立中央病院　健康運動指導士） 工藤　昌子 （青森県訪問看護ステーション連絡協議会中弘南黒支部　訪問看護師）

内　　容	がん患者やその家族の視点に立った情報提供を推進するとともに、がんになってもそれと共生できる社会の構築を目指し，正しいがんの情報を提供いたします。 【プログラム】 プチセミナー①「アラカルト・ウォーキング」 プチセミナー②「治療にかかるお金の話」 プチセミナー③「食欲がないときの食事の工夫」 アトラクション：津軽三味線生演奏 プチセミナー④「在宅療養を支える訪問看護ステーションの紹介」 プチセミナー⑤「がんとこころ」

呼吸器ハンズオンセミナー2019

開　催　日	令和元年９月１日（日）14:00～17:00
主催・共催	【主　催】弘前大学医学部 呼吸器内科講座 【共　催】日本呼吸器学会 東北支部
会場・対象・定員・参加費	【会　場】青森県立中央病院３階　研修室 【対　象】初期研修医、医学部学生 【定　員】特になし　【参加費】無料
参加人数	20 人
講　　師	田坂　定智（弘前大学大学院医学研究科呼吸器内科学講座　教授）
内　　容	シミュレーターを使った気管支鏡体験、非浸襲的陽圧換気（NPPV）実践講座、呼吸機能検査、画像診断のツボなどをご紹介します。

市民公開講座「『身近な脳疾患』の治療」

開　催　日	令和元年９月８日（日）9:55～11:35
主催・共催	【主　催】日本脳神経外科学会　東北支部 【共　催】弘前大学医学部脳神経外科
会場・対象・定員・参加費	【会　場】弘前大学医学部コミュニケーションセンター 【対　象】一般の方ならどなたでも 【定　員】特になし　【参加費】無料
参加人数	50 人
講　　師	①奈良岡　征都（弘前大学医学部附属病院脳神経外科　講師） ②片山　耕輔 （弘前大学大学院医学研究科総合地域医療推進学講座　助教）
内　　容	①「学ぼう、脳卒中！」 ②「その頭痛、こうやって治します！」

臨地実習指導者育成研修「魅力的な実習を展開する方策を考えよう！」

開　催　日	①令和元年９月12日（木）9:00～15:30 ②令和元年９月25日（水）9:00～16:30
主催・共催	【主　催】弘前大学医学部附属病院看護部
会場・対象・定員・参加費	【会　場】弘前大学医学部附属病院 看護部研修室 【対　象】看護学生の実習を受け入れている施設の看護職 【定　員】30 名　【参加費】無料
参加人数	65 名（２回合計）
講　師	①木村　智子　（株式会社ビジネスコンサルタント） ②松本　大　　（弘前大学教育学部　准教授） 　小倉　能理子（弘前大学大学院保健学研究科　教授） 　井瀧　千恵子（弘前大学大学院保健学研究科　教授）
内　容	臨地実習指導に困っていませんか？教育専門家の講義を聞いて教育の基礎を知り、人材育成のスペシャリストからコーチングを学んで相手との関わり方を身につけられます。 ①コーチング ②「成人学習者の特徴と教育方法 」 　「看護基礎教育の現状　現代の看護学生の特徴」 　「実習指導者の役割」 　「演習　実習指導の実際」

第98回日本消化器内視鏡学会総会市民公開講座「短命県返上へ！おなかのがんから身を守る」

開　催　日	令和元年９月22日（日）14:00～17:00
主催・共催	【主　催】JDDW2019 第 98 回日本消化器内視鏡学会総会 【共　催】弘前大学大学院医学研究科消化器内科学講座
会場・対象・定員・参加費	【会　場】ホテルニューキャッスル２Ｆ　曙 【対　象】一般の方ならどなたでも 【定　員】250 名　【参加費】無料
参加人数	180 名
講　師	①田尻　久雄（東京慈恵会医科大学 先進内視鏡治療研究講座　教授） ②井上　晴洋（昭和大学江東豊洲病院 消化器センター　教授） ③田中　信治（広島大学大学院医系科学研究科 内視鏡医学　教授）
内　容	①「これからの内視鏡医療～内視鏡はどこまで進化しているのか～」 ②「食道がん、胃がんの内視鏡診断・治療の最先端」 ③「増え続ける大腸がんから身を守るために」

令和元年度弘前大学医学部附属病院「緩和ケア研修会」

開　催　日	令和元年10月５日（土）8:30～17:30
主催・共催	【主　催】弘前大学医学部附属病院
会場・対象・定員・参加費	【会　場】弘前大学医学部附属病院　外来診察棟５階　大会議室 【対　象】青森県内でがん等の診療に携わる医療従事者で、規定の e-learning 研修の受講を修了した者 【定　員】先着 30 名　【参加費】無料
参加人数	33 名
講　師	佐藤　哲観　（静岡県立静岡がんセンター緩和医療科 部長） 佐々木　洸太（あおもり協立病院内科　医長） 蝦名　正子　（医療法人ときわ会ときわ会病院緩和ケア科　医師） 沼倉　昌洋　（あんさん訪問看護ステーション　緩和ケア認定看護師） 佐井　菜央美（独立行政法人国立病院機構弘前病院　緩和ケア認定看護師） 佐藤　美紀 （一部事務組合下北医療センターむつ総合病院　緩和ケア認定看護師） 岡野　聡　　（日本調剤弘前薬局　緩和薬物療法認定薬剤師） 若松　歩　　（青森市民病院　がん性疼痛看護認定看護師） 一戸　真紀　（青森市民病院　緩和ケア認定看護師） 力石　圭子　（十和田市立中央病院　緩和ケア認定看護師） 八重樫　学　（十和田市立中央病院　緩和ケア認定看護師） 馬場　教子　（八戸市立市民病院　緩和ケア認定看護師） 高橋　由香子（黒石市国民健康保険黒石病院　緩和ケア認定看護師） 宮﨑　紫穂　（八戸赤十字病院　緩和ケア認定看護師）
内　容	がん等の診療に携わる全ての医療従事者が基本的な緩和ケアについて正しく理解し、緩和ケアに関する知識や技術、態度を修得することを目的とします。

第21回家庭でできる看護ケア教室「糖尿病と認知症にいいこと始めるなら今からでしょ！」

開　催　日	令和元年10月16日（水）13:30～16:00
主催・共催	【主　催】弘前大学医学部附属病院看護部
会場・対象・定員・参加費	【会　場】弘前大学医学部附属病院 看護部研修室 【対　象】一般市民 【定　員】30 名　【参加費】無料
参加人数	12 名
講　師	桜庭　咲子（弘前大学医学部附属病院　看護師） 葛西　愛子（弘前大学医学部附属病院　看護師）
内　容	笑顔でポジティブに健康寿命を延ばす生活習慣のちょっとしたコツを学びます。

令和元年度　肝炎医療コーディネーター研修会～青森県の肝炎医療コーディネーターの役割～

開　催　日	令和元年10月26日（土）13:30～16:00
主催・共催	【共　催】日本肝臓学会・弘前大学附属病院　肝臓疾患相談センター・青森県
会場・対象・定員・参加費	【会　場】ラ・プラス青い森　３Ｆ　プリムラ 【対　象】肝炎医療コーディネーター、肝疾患に従事する方 【定　員】40 名　【参加費】無料
参加人数	34 名
講　師	【特別講演】遠藤　哲（弘前大学医学部附属病院 消化器血液膠原病内科 ） 【パネルディスカッション】青森県健康福祉部がん生活習慣病対策課、 弘前大学医学部附属病院 １病棟８階 看護師 弘前大学医学部附属病院 肝疾患相談センター 相談員
内　容	【特別講演】「肝炎撲滅のために私たちが出来ること」 【パネルディスカッション】「青森県の肝炎対策について」 「肝炎医療コーディネーターの院内での活動 」

弘前市共催特別講演会「見直そう！『ことばのちから』
―子どもの発達を伸ばすために知っておきたいことばの知識―」

開　催　日	令和元年10月30日（水）18:00～19:30
主催・共催	【主　催】弘前大学大学院医学研究科附属子どものこころの発達研究センター 弘前大学大学院医学研究科神経精神医学講座 【共　催】弘前市、弘前大学教育学部附属特別支援教育センター・ 弘前大学大学院保健学研究科総合リハビリテーション科学領域
会場・対象・定員・参加費	【会　場】弘前市民文化交流館（ヒロロ４階） 【対　象】養育者、保護者、一般の方々、学生、教職員、福祉職員など 【定　員】200 名　【参加費】無料
参加人数	100 名
講　師	小山内　筆子（弘前医療福祉大学言語聴覚学専攻教授）
内　容	・全ての子どもにつけたい「言葉の力」とは？ ・乳幼児期の言語発達 ・子どもの言語発達を伸ばすための大人の関り方

秋のHighScope勉強会　質の高い幼児教育を目指して
～HighScopeはどう質の高い幼児教育を実現しているのか～

開　催　日	令和元年11月２日（土）13:30～15:30
主催・共催	【主　催】公益社団法人子どもの発達科学研究所 【共　催】弘前大学大学院医学研究科附属子どものこころの発達研究センター、 弘前大学大学院医学研究科神経精神医学講座
会場・対象・定員・参加費	【会　場】青森県武道館　第２・３会議室 【対　象】幼児教育に関心を持つ方（保護者、幼稚園保育園関係者など） 【定　員】100 名　【参加費】会員：1,000 円　一般：2,000 円
参加人数	50 名
講　師	①三上　珠希 （弘前大学大学院医学研究科附属子どものこころの発達研究センター　特任助教） ②外崎　了　　（幼児連携型認定子ども園花園保育園　園長） ③斉藤　まなぶ（弘前大学大学院医学研究科神経精神医学講座　准教授）
内　容	ペリー幼児教育計画により、質の高い幼児教育として有名な「HighScope カリキュラム」。このカリキュラムは、いったいどのようにしてその”質”を担保しているのでしょうか。今年の６月に開催したセミナーに続き、11 月に HighScope カリキュラムについての勉強会を開催します。 ① HighScope カリキュラムの価値と日本での展開 ② HighScope トレーニング報告 ③ KDI について（KDI のどこか１つのエリアに焦点を当てて）

がんプロ公開セミナー「みんなで緩和ケアを考えよう」

開　催　日	令和元年11月４日（月・祝）13:00～16:15
主催・共催	【主　催】未来がん医療プロフェッショナル養成プラン 【共　催】弘前大学医学部附属病院腫瘍センター
会場・対象・定員・参加費	【会　場】弘前大学大学院医学研究科　健康未来イノベーションセンター 【対　象】医療従事者 【定　員】50 名　【参加費】無料
参加人数	23 名
講　師	佐藤　温（弘前大学大学院医学研究科腫瘍内科学講座　教授）
内　容	小児から高齢者まで、あらゆるライフステージに対応した緩和ケアについて学べる研修会です。第１部は講演、第２部ではグループワークを実施します。 【講演】「医療の構造からケアを考える」

弘前市共催特別講演会「学校を変える『いじめの科学』」

開　催　日	令和元年11月22日（金）18:00～19:30
主催・共催	【主　催】弘前大学附属子どものこころの発達研究センター・弘前大学大学院医学研究科神経精神医学講座 【共　催】弘前市・弘前大学教育学部附属特別支援教育センター・弘前大学大学院保健学研究科総合リハビリテーション科学領域
会場・対象・定員・参加費	【会　場】弘前大学創立50周年記念会館　みちのくホール 【対　象】特になし 【定　員】300名　【参加費】無料
参加人数	100名
講　師	和久田　学（子どもの発達科学研究所主任研究員・大阪大学大学院連合小児発達学研究科 特任講師）
内　容	学校現場でのいじめに関する深刻なニュースは、相変わらず減りません。そうした状況に今までとは違うアプローチとして、科学を使うのはどうでしょうか。いじめは日本だけの問題ではありません。欧米をはじめ、世界中の専門家がいじめを科学的に研究し、エビデンスのあるいじめ予防プログラムを開発しています。今回の講演では、世界のいじめ研究を紹介し、今私たちがすべきことを考えます。

弘前市共催特別講演会「あなたはどう考える？子どものインターネット利用」

開　催　日	令和元年11月30日（土）13:00～15:00
主催・共催	【主　催】弘前大学附属子どものこころの発達研究センター・弘前大学大学院医学研究科神経精神医学講座 【共　催】弘前市・弘前市教育委員会・弘前大学教育学部附属特別支援教育センター・弘前大学大学院保健学研究科総合リハビリテーション科学領域
会場・対象・定員・参加費	【会　場】弘前大学創立50周年記念会館　みちのくホール 【対　象】特になし 【定　員】特になし　【参加費】無料
参加人数	60名
講　師	①三上　珠希 （弘前大学大学院医学研究科附属子どものこころの発達研究センター　特任助教） ②高橋　芳雄（弘前大学大学院保健学研究科　准教授）
内　容	幼児期からのメディア乱用は、世界中の発達の専門家たちが警鐘を鳴らしています。子どもの発達にとって何が良くて何がいけないのか、発達をふまえた視点で大人は何をすればいいのか、考える機会を持ちましょう。 ①「小児科医から見た、インターネットの影響」 ②「子どものインターネット依存」

第13回弘大病院がん診療市民公開講座

開　催　日	令和元年12月１日(日) 13:00～15:30
主催・共催	【主　催】弘前大学医学部附属病院 【共　催】未来がん医療プロフェッショナル養成プラン
会場・対象・定員・参加費	【会　場】弘前市民会館１Ｆ　大会議室 【対　象】一般市民 【定　員】100 名　【参加費】無料
参加人数	106 名
講　師	①石戸　圭之輔(弘前大学医学部附属病院消化器外科学講座　准教授) ②大山　力　　(弘前大学医学部附属病院泌尿器科学講座　教授)
内　容	弘大病院の専門家による、がん（悪性腫瘍）についての講座です。講師のそれぞれの立場から、市民の皆様にわかりやすく講演いたします。 ①「すい臓がんの治療について」 ②「知って得する前立腺がんの話」

第15回・第16回青森県抗菌化学療法セミナー「抗菌薬適正使用の実践」

開　催　日	令和元年12月２日(月)　【第１部】18:00～18:45　【第２部】18:45～19:30 令和元年12月３日(火)　【第１部】18:00～18:45　【第２部】18:45～19:30
主催・共催	【主　催】弘前大学医学部附属病院感染制御センター
会場・対象・定員・参加費	【会　場】弘前大学医学部附属病院　外来診療棟５階　大会議室 【対　象】医師、薬剤師、感染制御に関わっている職員 【定　員】特になし　【参加費】無料
参加人数	43 名
講　師	齋藤　紀先(弘前大学医学部附属病院感染制御センター　副センター長)
内　容	「抗菌薬適正使用の実践」

「訪問看護師対象学習会」

開　催　日	令和２年２月15日(土) 13:30～16:00
主催・共催	【主　催】弘前大学医学部附属病院総合患者支援センター
会場・対象・定員・参加費	【会　場】弘前大学医学部附属病院　Ｂ１看護部研修室 【対　象】訪問看護師 【定　員】30 名　【参加費】無料
参加人数	13 名
講　師	粟津　朱美　(弘前大学医学部附属病院　看護師) 阿保　惠美子(弘前大学医学部附属病院　看護師)
内　容	在宅における輸液ルート管理とがん化学療法の最新情報

弘前市共催特別講演会「吃音症（小児期発症流暢症）の科学
―パーキンソン病、ライソゾーム症、社交不安症との共通点―」

開　催　日	令和２年２月10日（月）18:30～
主催・共催	【主　催】弘前大学大学院医学研究科神経精神医学講座・弘前大学附属子どものこころの発達研究センター 【共　催】弘前市・青森県発達障害者支援センター『ステップ』
会場・対象・定員・参加費	【会　場】弘前大学本町キャンパス　新講義棟 【対　象】学生、教職員、専門職（心理士･言語聴覚士･理学療法士等）、医療･教育・行政・福祉関係者 【定　員】特になし　【参加費】無料
参加人数	70 名
講　師	菊池　良和（九州大学病院耳鼻咽喉・頭頸部外科　助教）
内　容	吃音症（小児期発症流暢症）の科学―パーキンソン病、ライソゾーム症、社交不安症との共通点―

弘前大学医学部附属病院緩和ケア公開講座

開　催　日	令和２年２月21日（金）18:00～19:30
主催・共催	【主　催】弘前大学医学部附属病院　腫瘍センター
会場・対象・定員・参加費	【会　場】弘前大学医学部附属病院　大会議室 【対　象】院内外の医療職、病院職員 【定　員】先着 60 名　【参加費】無料
参加人数	42 名
講　師	木村　太（弘前大学医学部附属病院麻酔科　講師）
内　容	「がん疼痛緩和に対する薬物療法と補助的治療」

講座担当：研究・イノベーション推進機構／研究推進部

弘前大学創立70周年記念リレー学術講演会「過去・現在・未来への創造」

開　催　日	①令和元年４月20日（土） ②令和元年５月11日（土） ③令和元年６月８日（土）14:00～15:30 ④令和元年７月13日（土） ⑤令和元年９月14日（土）
主催・共催	【主　催】弘前大学研究・イノベーション推進機構
会場・対象・定員・参加費	【会　場】①弘前大学創立 50 周年記念会館　みちのくホール ②弘前大学附属図書館３階　グループラーニングルーム３ ③④弘前大学創立 50 周年記念会館　岩木ホール ⑤弘前大学教育学部１階　大教室 【対　象】一般の方、教職員、学生 【定　員】① 300 名　② 40 名　③④ 85 名　⑤ 150 名 【参加費】無料
参加人数	520 人
講　師	①和田　美亀雄（弘前大学教育学部　教授） 　杉原　かおり（弘前大学教育学部　教授） ②浅田　秀樹　（弘前大学大学院理工学研究科　教授） ③関根　達人　（弘前大学人文社会科学部　教授） ④柏木　明子　（弘前大学農学生命科学部　准教授） ⑤大山　力　　（弘前大学大学院医学研究科　教授）
内　容	弘前大学における研究成果を専門外の方々にわかりやすく発信し、学術研究を通した地域との交流と対話の場として開催します。研究成果だけではなく、その研究を志したきっかけや研究者自身の生き様にせまる内容を提供いたします。大学と地域、弘前と世界、過去と現在から未来へと紡ぐ意味を込めた、全５回からなるリレー形式での講演会です。 ①「音楽の魅力　トロンボーンと声楽のコンサート」 ②「宇宙の魅力」 ③「お墓の魅力」 ④「微生物の魅力」 ⑤「医学の魅力」

令和元年度基調講演会「ICTを活用した交通と観光の最適化～MaaSの話題を中心に」

開　催　日	令和元年７月８日（月）14:00～17:00
主催・共催	【主　催】ひろさき産学官連携フォーラム
会場・対象・定員・参加費	【会　場】アートホテル弘前シティ ３階プレミアホール 【対　象】一般企業、一般の方 【定　員】300 名　　【参加費】無料
参加人数	117 人
講　師	日高　洋祐（株式会社 MaaS Tech Japan　代表取締役社長）
内　容	交通や観光に ICT を活用することは、交通渋滞解消、移動手段を考慮した宿と観光地間の連携など、全く新しい価値を生み出す可能性があり、最近は、日本でも ICT を活用した事例の一つである「MaaS」(Mobility as a Service) の取組みが注目を集めています。本講演では、ICT を活用した交通と観光の最適化について、国内外の事例を紹介していただきます。

令和元年度「第1回新規白神酵母株の分離と育種および果実酒醸造における特性」

開　催　日	令和元年７月25日（月）16:00～17:00
主催・共催	【主　催】ひろさき産学官連携フォーラム
会場・対象・定員・参加費	【会　場】土手町コミュニティパーク１階「多目的ホールＢ」 【対　象】一般企業、一般の方 【定　員】30 名　　【参加費】無料
参加人数	16 人
講　師	研究報告①殿内　暁夫（弘前大学農学生命科学部　教授） 研究報告②小倉　亮　（青森県産業技術センター弘前工業研究所　研究員）
内　容	白神山地から採取・分離した「白神酵母」の研究報告や、酵母を活用した酒類の試飲会が行われ、関係者がさらなる発展の可能性を探ります。 ①「新規白神酵母株の分離と育種および果実酒醸造における特性」 ②「分離乳酸菌を使用した生もと造り」

弘前大学標準化教育研修会「知的財産と標準化教育―ルール作りに着目して―」

開　催　日	令和元年９月18日（水）13:00～14:30
主催・共催	【主　催】弘前大学研究・イノベーション推進機構
会場・対象・定員・参加費	【会　場】弘前大学大学院理工学部　１号館５階　10 講義室 【対　象】教職員 【定　員】80 名　　【参加費】無料
参加人数	40 人
講　師	佐々木　通孝 （国立大学法人山口大学知的財産センター教育部門　准教授（特命））
内　容	本研修会は、教育・研究活動によって得られた知的財産の保護及び有効な活用により、社会の持続的発展に貢献することを目的に開催いたします。

学術講演会「翻訳で初めて見えてくる日本」

開　催　日	令和元年９月20日（金）15:00～16:30
主催・共催	【主　催】弘前大学研究・イノベーション推進機構
会場・対象・定員・参加費	【会　場】弘前大学創立 50 周年記念会館　みちのくホール 【対　象】一般の方、教職員、学生 【定　員】300 名　　【参加費】無料
参加人数	300 人
講　師	ロバート　キャンベル（国文学研究資料館長）
内　容	学術的に著名な識者を本学に招き、学術講演会を開催することで、学内教職員の研鑽意識を高め、また学生にレベルの高い学修機会を提供することを目的として、弘前大学研究・イノベーション推進機構学術講演会を開催します。

令和元年度「第１回知財塾」

開　催　日	令和元年９月27日（金）15:00～16:30
主催・共催	【主　催】弘前大学研究・イノベーション推進機構
会場・対象・定員・参加費	【会　場】弘前大学総合教育棟１階 101 号室（文京キャンパス） 【対　象】教職員、学生、大学院生、一般企業等 【定　員】100 名　　【参加費】無料
参加人数	51 人
講　師	鶴本　祥文（正林国際特許商標事務所　弁理士）
内　容	「改正著作権法に関する解説 ～授業や学会発表等で他人の著作物を扱う場合，研究でデジタルデータやデータベースを扱う場合の注意点など～」

令和元年度「第２回知財塾」

開　催　日	令和元年12月19日（木）18:00～19:30
主催・共催	【主　催】弘前大学研究・イノベーション推進機構
会場・対象・定員・参加費	【会　場】弘前大学総合教育棟２階 207 号室（文京キャンパス） 【対　象】教職員、学生、大学院生、一般企業等 【定　員】30 名　　【参加費】無料
参加人数	25 人
講　師	田中　裕介（株式会社オーシャンアイズ 代表取締役社長）
内　容	「研究プロジェクト発 カーブアウトベンチャーが持つ可能性」

令和元年度「第２回高アミラーゼ・低褐変性種麹菌の育種、白神酵母No.９株の香気成分改変株の育種マルトース・可用性デンプンを基質とした新規白神酵母の分離」

開　催　日	令和２年２月21日（金）16：00～17：00
主催・共催	【主　催】ひろさき産学官連携フォーラム
会場・対象・定員・参加費	【会　場】土手町コミュニティパーク１階「多目的ホーＢ」 【対　象】一般企業、一般の方 【定　員】30 名　　【参加費】無料
参加人数	15 人
講　師	研究報告①殿内　暁夫（弘前大学農学生命科学部　教授） 研究報告②青森県産業技術センター弘前工業研究所及び六花酒造株式会社
内　容	白神山地から採取・分離した「白神酵母」の研究報告や、酵母を活用した酒類の試飲会が行われ、関係者がさらなる発展の可能性を探ります。 ①「高アミラーゼ・低褐変性種麹菌の育種、白神酵母 No. ９株の香気成分改変株の育種マルトース・可用性デンプンを基質とした新規白神酵母の分離」 ②「白神乳酸菌、酵母と青森県特別栽培米「華さやか」を使ったお酒の開発」

講座担当：COI 研究推進機構

岩木健康増進プロジェクト活用研究会

開　催　日	①令和元年５月21日（火） ②令和元年６月24日（火） ③令和元年７月30日（火）18:00～ ④令和元年９月４日（火） ⑤令和２年２月17日（火）
主催・共催	【主　催】弘前大学 COI 研究推進機構
会場・対象・定員・参加費	【会　場】 ①～⑤弘前大学大学院医学研究科　健康未来イノベーションセンター１Ｆ 【対　象】一般の方、学生、教員 【定　員】特になし　　【参加費】無料
参加人数	205 人
講　師	①工藤　隆司　（弘前大学医学部附属病院　麻酔科） 沢田　かほり（弘前大学大学院医学研究科　社会医学講座） ②是川　あゆ美（弘前大学医学部附属病院　皮膚科） 浅野　悠　（サントリー食品インターナショナル株式会社 ジャパン事業本部　開発主任） ③水上　浩哉　（弘前大学大学院医学研究科　分子病態病理学講座） 稲益　悟志　（クラシエホールディングス株式会社　経営企画室企画部 R&D 戦略推進チーム　チームリーダー） ④多田羅　洋太（弘前大学大学院医学研究科　糖鎖工学講座） 田原　栄治　（株式会社ミルテル　代表取締役社長） ⑤田口　大夢　（ハウス食品グループ本社株式会社　基礎研究部　グループ長） 川端　二功　（弘前大学農学生命科学部国際園芸農学科家畜生理学分野）
内　容	社会医学講座では、2005 年より弘前市岩木地区（旧岩木町）の住民を対象とした大規模な健康調査「岩木健康増進プロジェクト」を毎年実施しており、本プロジェクトに関する活用研究会を開催します。 ①「非定型うつ病の新規療法開発及び発症予防プログラム開発に向けた基盤研究」 「2019 年度岩木健診 概要について」 ②「肌のうるおいについての研究」 「『水と健康』を科学する」 ③「岩木健康増進プロジェクトと痛覚閾値の測定」 「冷えとフレイルへ独自のアプローチ～超多項目ビッグデータ活用による未病状態の改善」 ④「多層オミックス解析による認知症の早期発見のためのバイオマーカー探索」 「未病状態を可視化するテロメア検査」 ⑤「 味覚・食生活と健康情報データとの関連分析を活用した新たな食スタイルの開発 」 「 味覚感受性に影響を与える因子の探索とその応用 」

脳研×高度先進×ＣＯＩ合同セミナー

開　催　日	①令和元年５月14日（火）18:00～ ②令和元年６月28日（金）18:00～ ③令和元年８月５日（月）18:00～ ④令和元年９月12日（木）18:00～ ⑤令和元年11月８日（金）17:00～ ⑥令和元年11月11日（月）18:00～ ⑦令和２年３月24日（火）18:00～
主催・共催	【主　催】弘前大学 COI 研究推進機構
会場・対象・定員・参加費	【会　場】①弘前大学医学部基礎校舎　基礎第１講義室 ②～⑦弘前大学大学院医学研究科 健康未来イノベーションセンター　１Ｆ 【対　象】一般の方、学生、教員 【定　員】特になし　【参加費】無料
参加人数	315 人
講　師	①浅野　クリスナ（弘前大学大学院医学研究科　感染生体防御学講座） ②丹治　邦和　（弘前大学大学院医学研究科　脳神経病理学講座） 佐藤　ちひろ　（弘前大学大学院保健学研究科 総合リハビリテーション科学領域） ③七島　直樹　（弘前大学大学院保健学研究科　生体検査科学領域　准教授） 堀江　香代　（弘前大学大学院保健学研究科　生体検査科学領域　助教） 藤田　敏次　（弘前大学大学院医学研究科　ゲノム生化学講座　准教授） ④稲垣　匡子　（県立広島大学　生命環境学部生命科学科　生体防御学研究室） ⑤斎藤　芳郎　（東北大学大学院　薬学研究科） ⑥金崎　里香　（弘前大学大学院医学研究科　小児科学講座　助教（テニュア）） 髙橋　芳雄　（弘前大学大学院保健学研究科 総合リハビリテーション科学領域　准教授） ⑦掛田　伸吾　（弘前大学大学院医学研究科　放射線診断学講座　教授）
内　容	①「細胞内病原体の感染メカニズムと生体防御反応」 ②「認知症（シヌクレイノパチー）の病態解明と治療への応用」 「根拠に基づく効果的リハビリテーションをめざした動物モデルを用いたニューロリハビリテーション研究」 ③「カシスが秘めるフィトエストロゲン効果」 「ORNi-PCR 法の開発およびその応用」 ④「胃粘膜レプチンシグナルの発がん促進における役割」 ⑤「必須微量元素セレンの代謝と疾患ーレドックス制御の破綻と酸化／還元ストレス」 ⑥「ダウン症関連白血病発症の分子機構 」 「脳画像を用いた自閉スペクトラム症の病態研究」 ⑦「脳 MR 画像統計解析の手法と最近の話題」

“ソーシャル・ヘルスイノベーションPJ最前線”人生100年時代の健康未来を考える

開　催　日	令和元年10月４日（金）13:00～17:15
主催・共催	【主　催】弘前大学・青森県・弘前市
会場・対象・定員・参加費	【会　場】一橋講堂・大ホール（一橋大学） 【対　象】企業・研究者・一般市民等 【定　員】先着 500 名　　【参加費】無料
参加人数	800 人
講　師	中路　重之（弘前大学COI拠点長・研究統括／弘前大学大学院医学研究科　特任教授） 鈴木　伸弥（明治安田生命保険相互会社　取締役会長　代表執行役） 田原　栄俊（株式会社ミルテル　取締役会長／広島大学　副理事） 浜内　千波（料理研究家） 宮田　満　（株式会社宮田総研　代表取締役／日経BP社　医療メディカル局アドバイザー） 水野　正明（COI総括ビジョナリービジョナリーリーダー代理／名古屋大学医学部附属病院先端医療開発部　先端医療・臨床研究支援センター長） 奥野　恭史（京都大学大学院医学研究科教授／弘前大学COI拠点BDタスクチームリーダー） 二宮　利治（九州大学大学院医学研究院／九州大学サテライト拠点PL） 井元　清哉（東京大学医科学研究所ヘルスインテリジェンスセンター教授／弘前大学COI拠点BD解析タスクチームサブリーター） 的場　聖明（京都府立医科大学大学院医学研究科　教授／京都府立医科大学サテライト拠点） 他
内　容	弘前COI拠点のめざす「健やかに老いる社会」の実現に向けて、国民の健康寿命延伸とＱＯＬ（生活の質）・ＧＮＨ（幸福度）向上を通じたSDGs達成への貢献をめざし、世界最大級の超多項目(2000)健康ビッグデータを活用したAI等最先端研究成果等を紹介し、これらを活用した本格的社会実装による新たな健康産業創出に向けて、第一線の産学官民関係者が結集し、熱く議論します。

弘前大学COI特別講演会「高血圧と眼」

開　催　日	令和元年10月16日（水）13:00～14:00
主催・共催	【主　催】弘前大学COI研究推進機構
会場・対象・定員・参加費	【会　場】弘前大学大学院医学研究科　健康未来イノベーションセンター1F 【対　象】一般の方・学生 【定　員】特になし　　【参加費】無料
参加人数	50 人
講　師	川崎　良（大阪大学大学院医学系研究科 視覚情報制御学（トプコン）寄附講座 教授）
内　容	眼科学、衛生学及び公衆衛生学分野をご専門に、全身疾患と眼疾患の関りなどをご研究されている川崎教授にご登壇いただき、今回の講演会では「高血圧と眼」と題しご講演頂きます。

シンポジウム「弘前大学ＣＯＩヘルシーエイジング・イノベーションサミット2020」

開　催　日	令和２年１月31日（金）13:00～17:15
主催・共催	【主　催】弘前大学 COI 研究推進機構
会場・対象・定員・参加費	【会　場】アートホテル弘前シティ　プレミアホール 【対　象】一般市民・学生・医療関係者・大学・企業・研究機関等 【定　員】先着 300 名　　【参加費】無料
参加人数	500 人
講　師	中路　重之　（弘前大学COI拠点長･研究統括／弘前大学大学院医学研究科　特任教授） 橋爪　克仁　（ヒューマン･メタボローム･テクノロジーズ株式会社　代表取締役） 前田　かおり（日本コープ共済生活協同組合連合会　総合マネジメント本部　本部長） 松尾　泰樹　（内閣府　政策統括官／科学技術・イノベーション担当） 宮田　満　（株式会社宮田総研　代表取締役／日経 BP 社　医療メディカル局アドバイザー） 水野　正明　（COI 総括ビジョナリービジョナリーリーダー代理／名古屋大学医学部附属病院先端医療開発部　先端医療・臨床研究支援センター長） 奥野　恭史　（京都大学大学院医学研究科　教授／弘前大学 COI 拠点 BD タスクチームリーダー） 中枅　昌弘　（名古屋大学大学院医学系研究科　看護学専攻　データサイエンス　准教授） 五十嵐　中　（東京大学大学院薬学系研究科　客員准教授） 大内　成浩　（京都府立医科大学大学院医学研究科　循環器内科　併任助教兼　京丹後弥生病院　医師） 有田　幹雄　（和歌山県立医科大学　名誉教授／角谷リハビリテーション病院　院長） 本村　純　（名桜大学　人間健康学部　上級准教授）　他
内　容	「“ソーシャル・ヘルスイノベーション PJ 最前線” QOL 健診が健康・寿命の未来を変える」をサブテーマとし、青森県の短命県脱却と県民・国民の健康寿命延伸、ＱＯＬ（生活の質）とＧＮＨ（幸福度）の最大化による「寿命革命」実現と SDGs への貢献に向けて、弘前 COI 拠点の超多項目健康 BD を基盤とした社会実装戦略と、真の「健康の未来」について徹底討論するため、産学官金民トップが一堂に会するサミットを開催します。

講座担当：COC 推進室

「採用力」向上ワークショップ　―学生と共に自社の特徴を整理しよう―

開　催　日	令和元年７月11日（木）13:30～16:00
主催・共催	【主　催】青森 COC ＋推進機構
会場・対象・定員・参加費	【会　場】八戸プラザホテル 【対　象】青森県内企業の人事担当者 【定　員】なし　【参加費】無料
参加人数	54 人
講　師	ファシリテーター：本学教員
内　容	人口減少や少子高齢化の影響及び首都圏企業の活発な採用活動により、人手不足が深刻な問題となっている県内企業の「採用力」向上を目的に開催した。

「採用力」向上ワークショップ　―学生と共に採用戦略を考えよう―

開　催　日	令和元年９月24日（火）13:30～16:30
主催・共催	【主　催】青森 COC ＋推進機構
会場・対象・定員・参加費	【会　場】アートホテル弘前シティ 【対　象】青森県内企業の人事担当者 【定　員】なし　【参加費】無料
参加人数	53 人
講　師	ファシリテーター：本学教員
内　容	人口減少や少子高齢化の影響及び首都圏企業の活発な採用活動により、人手不足が深刻な問題となっている県内企業の「採用力」向上を目的に開催した。

令和元年度COC＋シンポジウム　いま考える次の一歩　―若者の地域定着に向けて―

開　催　日	令和２年２月12日（水）14:00～17:00
主催・共催	【主　催】青森 COC ＋推進機構
会場・対象・定員・参加費	【会　場】青森国際ホテル 【対　象】青森県内企業、自治体の関係者等 【定　員】なし　【参加費】無料
参加人数	約 130 名
講　師	松坂　暢浩（山形大学学術研究院　准教授）
内　容	テーマ「若者の地域定着」

講座担当：男女共同参画推進室

女子児童対象理科実験教室「実験ガールズ2019」

開　催　日	令和元年７月20日（土）10:00～12:00
主催・共催	【主　催】青森市男女共同参画プラザ「カダール」 【後　援】弘前大学男女共同参画推進室
会場・対象・定員・参加費	【会　場】青森市男女共同参画プラザ「カダール」（アウガ５階） 【対　象】小学生女子 【定　員】20 名程度　　【参加費】無料
参加人数	25 人
講　師	弘前大学女子学生の皆さん
内　容	～大学生の「センセイ」といっしょに楽しい３つの実験を体験しよう！～ 【①化学】スーパーボールを作ってみよう 【②物理】空気砲で遊ぼう！ 【③生物】手作りペットボトルルーペで観察しよう

「2019年度女子学生による理系女子のための進路相談会」

開　催　日	令和元年８月10日（土）10:00～12:00、13:00～15:00
主催・共催	【主　催】弘前大学男女共同参画推進室
会場・対象・定員・参加費	【会　場】弘前大学 総合教育棟１階 学生課前 ロビー・ホール 【対　象】オープンキャンパスに来場する女子高校生 【定　員】特になし　　【参加費】無料
参加人数	54 人
講　師	本学の理工学部、農学生命科学部、教育学部の理系女子学生
内　容	弘前大学男女共同参画推進室では、理系女子の裾野拡大を目的として、平成26 年度から「女子学生による理系女子進路相談会」をオープンキャンパスの際に開催しています。 本学の理工学部、農学生命科学部、教育学部の理系女子学生が、女子高校生の進路やキャンパスライフ等に関する質問や相談にやさしく、わかりやすくお答えします！

「Let’s be a STEM Girl!!～地域から未来の理工系女子を～」

開　催　日	令和元年９月１日（日）13:00～16:00
主催・共催	【主　催】内閣府 【共　催】弘前市 【協　力】弘前大学男女共同参画推進室
会場・対象・定員・参加費	【会　場】弘前文化センター 【対　象】（主に）小学校高学年・中学・高校の女子児童・生徒と、その保護者の方 【定　員】100 名　【参加費】無料
参加人数	71 人
講　師	玉城　絵美（内閣府「STEM Girls Ambassador」、早稲田大学創造理工学研究科准教授、H2L Inc. 創業者）

内　　容	理系選択のその先にどんな未来があるのか、児童・生徒の皆さんとその保護者の皆さんに「理系選択の未来」を知っていただく内閣府が主催するイベントです。 理工系分野で活躍しているSTEM Girls Ambassadors（内閣府が委嘱している理工系女子応援大使）にご登壇いただき、ご自身の経験談をお話いただきます。

弘前大学男女共同参画推進室10周年×弘前市男女共同参画推進20周年記念シンポジウム「男女共同参画推進、そしてその先」

開　催　日	令和元年12月19日（木）13:30～15:40
主催・共催	【主　催】弘前大学 【共　催】弘前市、あおもりダイバーシティ研究環境推進ネットワーク
会場・対象・定員・参加費	【会　場】弘前大学創立50周年記念会館　みちのくホール 【対　象】ご関心のある方ならどなたでも 【定　員】250名程度　【参加費】無料
参加人数	147人
講　　師	【特別講演】 渥美　由喜（内閣府地域働き方改革支援チーム委員（兼務　東レ経営研究所）） 【対談登壇者】 佐藤　敬　（弘前大学長） 櫻田　宏　（弘前市長）
内　　容	ダイバーシティ推進に対する本学や関係機関の役員・幹部職員の一層の意識啓発を図ることを目的としたセミナーを開催します。この事業は本学が平成28年度から岩手大学を代表機関とする文部科学省科学技術人材育成費補助事業ダイバーシティ研究環境実現イニシアティブ（牽引型）「ダイバーシティ実現で北東北の未来を先導」の事業の一環として実施するものです。併せて、弘前大学男女共同参画推進室10周年、弘前市男女共同参画推進20周年を記念してシンポジウムを開催いたします。

令和元年度「女子高生工学系キャリアサポート」

開　催　日	令和元年12月21日（土）～12月22日（日）
主催・共催	【主　催】鳥飼宏之准教授 【協　賛】弘前大学男女共同参画推進室
会場・対象・定員・参加費	【会　場】弘前大学　理工学部 【対　象】１、２年次理系女子希望者 【定　員】30名　　【参加費】無料
参加人数	26人
講　　師	鳥飼　宏之（弘前大学大学院理工学研究科） 弘前大学の学生・大学院生
内　　容	「シャボン玉を用いた消火」をテーマに、シャボン玉中のガスの違いによる消火について学び、シャボン玉の破裂と気体の運動などを見ながら消火に適した条件を探りました。 また「シャボン玉を用いた新しい科学・技術」の発明に挑戦し、その現象を工学的に利用する方法を考察します。

担当：総務部総務広報課

弘前大学創立70周年記念講演会

開　催　日	令和元年６月１日（土）15:00～16:30
主催・共催	【主　催】国立大学法人弘前大学
会場・対象・定員・参加費	【会　場】弘前市民会館 【対　象】学内関係者・一般市民 【定　員】1317 名　【参加費】無料
参加人数	1097 人
講　師	本庶　佑（京都大学高等研究院副院長・特別教授）
内　容	本学創立 70 周年に際し、弘前大学医学部教授（脳神経疾患研究施設遺伝子工学部門）を併任された本庶 佑先生による記念講演「獲得免疫の驚くべき幸運」を開催。

担当：地域創生本部

弘大じょっぱり起業家塾2019

開　催　日	【地域ビジネス論】 ①令和元年６月28日（金）18:00～19:30 ②令和元年７月12日（金）18:00～19:50 ③令和元年８月23日（金）18:00～19:50 ④令和元年８月30日（金）18:00～19:50 【食･観光ビジネス演習】 ⑤令和元年９月27日（金）18:00～19:50 ⑥令和元年10月11日（金）18:00～19:50 ⑦令和元年10月18日（金）18:00～19:50 ⑧令和元年11月１日（金）18:00～19:50 ⑨令和元年11月15日（金）18:00～19:50 ⑩令和元年11月29日（金）18:00～19:50 ⑪令和元年12月６日（金）18:00～19:50 ⑫令和元年12月13日（金）18:00～20:00
主催・共催	【主　催】弘前大学地域創生本部
会場・対象・定員・参加費	【会　場】①弘前大学総合教育棟２階 大会議室・ 弘前大学総合教育棟３階 310 講義室 ②③弘前大学創立 50 周年記念会館２階 会議室２ ④弘前大学創立 50 周年記念会館２階 岩木ホール ⑤弘前大学人文社会科学部棟４階　多目的ホール ⑥～⑪弘前大学総合教育棟３階 310 講義室 ⑫弘前大学創立 50 周年記念会館２階 岩木ホール・会議室２ 【対　象】食と観光分野に関わる次世代経営者、マネージャー、 自治体職員、将来地域で活躍したいと考えている社会人・学生 【定　員】各回 20 名　　【参加費】無料
参加人数	39 人
講　師	【地域ビジネス論】 ①紺野　純一　（一般社団法人東北観光推進機構　専務理事推進本部長） ②海江田　毅　（株式会社日本政策金融公庫　弘前支店長）／ 熊田　憲　（弘前大学人文社会科学部　准教授） ③熊谷　淳一　（株式会社ノイ代表取締役）／岩渕　伸雄（Funky Stadium 代表） ④樋川　新一　（有限会社リンゴミュージック　代表）／ 髙島　克史　（弘前大学人文社会科学部　准教授） 【食・観光ビジネス演習】 ⑤森　樹男　（弘前大学人文社会科学部　教授）／ 石塚　哉史　（弘前大学農学生命科学部　教授） ⑥大浦　雅勝　（株式会社コンシス　代表取締役） ⑦前多　隼人　（弘前大学農学生命科学部　准教授）／ 小山　優子　（企業組合 JT&Associates　代表理事） ⑧熊谷　淳一　（株式会社ノイエ代表取締役）／ 石塚　哉史　（弘前大学農学生命科学部　教授） ⑨食：石塚　哉史（弘前大学農学生命科学部　教授） 観光：森　樹男（弘前大学人文社会科学部　教授） ⑩森　樹男　（弘前大学人文社会科学部　教授） ⑪食：石塚　哉史（弘前大学農学生命科学部　教授） 観光：森　樹男（弘前大学人文社会科学部　教授） ⑫食・観光ビジネス関係者、教員

内　　容	顧客のニーズ、自らの事業の優位性や競合他社の状況など、地域ビジネスをはじめるにあたって必要な視点，マーケティングを意識した事業計画、さらには先進事例から読み解く成功のポイントなどを学び、地域ビジネスの基本的な考え方を理解します。 【地域ビジネス論】 ①開講式／「東北の観光を盛り上げる取組」 ②「起業のための基礎」／「地域から起こすイノベーション」 ③「マーケティング志向の事業計画」／「ストリートダンスで地域を元気に」 ④「ご当地アイドルで地域の魅力を発信」／「起業家の考え方」 【食・観光ビジネス演習】 ⑤「観光ビジネス概論」／「食品ビジネス概論」 ⑥「地域観光における Web マーケティング」 「Webマーケティングによる戦略決定～ googleトレンドとSNSの活用～」 ⑦「食品開発の基礎」／「青い森の青い食品シリーズ誕生秘話」 ⑧「事業計画策定において考えるべきポイント」／「事業計画の作成について」 ⑨「事業計画の作成①・②（アイデア・コンセプトを考える）」 ⑩「事業計画の作成③・④（事業計画をまとめる）」 ⑪「事業計画の作成⑤（事業計画のブラッシュアップ）」／「事業計画の作成⑥（事業計画をまとめる）」 ⑫成果発表会・修了式（各チーム事業案発表）

弘前商工会議所会頭講演会「商工会議所と地域経済の振興について」

開　催　日	令和元年12月10日（火）16:00～17:00
主催・共催	【主　催】弘前大学地域創生本部
会場・対象・定員・参加費	【会　場】弘前大学総合教育棟４階　409 講義室 【対　象】幹部級職員 【定　員】特になし　　【参加費】無料
参加人数	約 50 人
講　　師	清藤　哲夫（弘前商工会議所　会頭）
内　　容	この講演会は、全学的に地域を志向した教育・研究・社会貢献を一層推進し、地域の再生・活性化の拠点となる大学を形成するため、地域を志向した事業の展開や、地方企業としての経営ノウハウに対する見識を深め、今後の地域志向の取組を強化するためのＦＤ・ＳＤ事業として、幹部級職員を対象に開催します。

大島理森衆議院議長講演会「開かれた自治で地方創生を～人材･知財･郷土財を高め､生かして～」

開　催　日	令和２年１月10日（金）16:00～17:00
主催・共催	【主　催】弘前大学地域創生本部
会場・対象・定員・参加費	【会　場】弘前大学創立 50 周年記念会館　みちのくホール 【対　象】全教職員 【定　員】100 名　　【参加費】無料
参加人数	約 200 人
講　　師	大島　理森（衆議院議長）
内　　容	文部科学省「地（知）の拠点整備事業」において、全学的に地域を志向した教育・研究・社会貢献を一層推進し、地域活性化の中核的拠点としての機能充実・強化に向けて，地域特性を活かした施策を大学一体となって総合的かつ計画的に推進していくにあたり、地方創生に対する見識を高めるためのＦＤ・ＳＤ事業として、全教職員を対象にした講演会を開催します。

講座担当：地域戦略研究所

第14回弘大食料研サイエンスカフェ「カラダに良い油」

開　催　日	令和元年７月７日（日）10:30～12:00
主催・共催	【主　催】弘前大学地域戦略研究所　食料科学研究部門
会場・対象・定員・参加費	【会　場】Gravity CO-WORK(グラビティコワーク) 【対　象】一般の方 【定　員】10 名　　【参加費】無料
参加人数	12 人
講　師	井上　奈穂（山形大学農学部　食品栄養科学分野　准教授）
内　容	第９回の弘前出張開催でも好評だった「あぶら」を再度テーマに取り上げます。話題提供者に山形大学農学部の井上奈穂先生をお招きして、食品としての油脂についてご紹介いただきます。

第15回弘大食料研サイエンスカフェin函館「これまでに無かった新しい品種改良のおはなし」

開　催　日	令和元年８月24日（土）18:15～19:45
主催・共催	【主　催】弘前大学地域戦略研究所　食料科学研究部門 【共　催】サイエンスサポート函館
会場・対象・定員・参加費	【会　場】函館市中央図書館　喫茶ボルヤン 【対　象】一般の方 【定　員】15 名　　【参加費】無料
参加人数	25 人
講　師	葛西　厚史（弘前大学農学生命科学部　研究機関研究員）
内　容	この 20 年ほどで生物の遺伝現象の理解が飛躍的に進み、それらの知識を駆使した新しい品種改良技術が次々と登場してきました。今回のサイエンスカフェでは、弘前大学が独自に開発した「接ぎ木で品種改良する方法」という斬新な技術をご紹介し、生物化学への最前線へ誘います。

第16回弘大食料研出張サイエンスカフェ「冷凍イチゴと凍結受精卵冷凍技術のヒミツ」

開　催　日	令和元年10月５日（土）10:30～12:00
主催・共催	【主　催】弘前大学地域戦略研究所　食料科学研究部門
会場・対象・定員・参加費	【会　場】集会所 indriya 【対　象】一般の方 【定　員】15 名　　【参加費】無料
参加人数	９人
講　師	君塚　道史（弘前大学農学生命科学部　食料資源学科　准教授）
内　容	生の野菜や果物を冷凍すると、食感はグチャグチャになってしまいますが、魚や肉は美味しく保存することができます。一方、医療の現場では受精卵がごく普通に液体窒素中で凍結保存され、解凍後も生存しています。受精卵の技術を使えば生と遜色のない冷凍苺ができるのでしょうか…。今回のサイエンスカフェでは、身近な技術でありながら、実はあまり知られていない冷凍保存の科学についてご紹介したいと思います。

第17回弘大食料研出張サイエンスカフェ「『あおもりカシス』の機能性とルーツに迫る！

開　催　日	令和２年２月16日（日）10:30～12:00
主催・共催	【主　催】弘前大学地域戦略研究所　食料科学研究部門
会場・対象・定員・参加費	【会　場】Gravity CO-WORK（グラビティコワーク） 【対　象】一般の方 【定　員】15 名　　【参加費】無料
参加人数	15 人
講　師	七島　直樹（弘前大学大学院保健学研究科　生体検査委科学領域　准教授）
内　容	あまり知られていませんが、青森県はカシスの生産量が全国１位です。また、『あおもりカシス』は地理的表示保護制度の第一号に認定されています。今回のサイエンスカフェでは、七島先生のグループによって見出された、カシスが秘める更年期症状を軽減する効果について、さらにあおもりカシスと他品種の成分やゲノム DNA の違い、そして、あおもりカシスのルーツについて、最新の知見をご紹介します。

講座担当：大学コンソーシアム学都ひろさき

大学コンソーシアム学都ひろさき「学生団体シンポジウム～６大学と学生１万人が弘前をつくる～」

開　催　日	令和元年12月１日（日）13:00～16:30
主催・共催	【主　催】大学コンソーシアム学都ひろさき（弘前大学・弘前学院大学・東北女子大学・東北女子短期大学・弘前医療福祉大学・放送大学青森学習センター） 【共　催】弘前市　【協　力】NPO 法人　SEEDS NETWORK
会場・対象・定員・参加費	【会　場】土手町コミュニティパーク　多目的ホール 【対　象】学生、市民、大学関係者、行政関係者等 【定　員】200 名　　【参加費】無料
参加人数	150 人
講　師	大学コンソーシアム学都ひろさき（弘前大学、弘前学院大学、東北女子大学、東北女子短期大学、弘前医療福祉大学、放送大学青森学習センター）に所属する学生団体・サークル等
内　容	近年、地域に関心を持ち、地域活性化や地域貢献、ＰＢＬ（Ｐｒｏｂｌｅｍ Ｂａｓｅｄ　Ｌｅａｒｎｉｎｇ：問題解決型学習法）として、ゼミや研究室、課外活動で、地域に出て活動をする学生が増え、それぞれに一定の成果をあげている。しかし、団体同士の繋がりは薄く、連携がとれないことや特定の地域のみの活動、学生の地域に根ざした活動を知らない市民が多いことが課題である。そこで、学生の活動を広く公開することで、学生が弘前市を盛り上げている現状を多くの市民が知ることのほか、大学の枠を越えた学生同士の交流の場をつくり、団体同士の繋がり強化、さらなる活発な活動を目指す。

大学コンソーシアム学都ひろさき　６大学合同シンポジウム「弘前を担うひとづくり～地域と大学生のかかわりあいを通じて～」

開　催　日	令和２年１月25日（土）13:30～16:00
主催・共催	【主　催】大学コンソーシアム学都ひろさき（弘前大学・弘前学院大学・東北女子大学・東北女子短期大学・弘前医療福祉大学・放送大学青森学習センター） 【共　催】弘前市
会場・対象・定員・参加費	【会　場】土手町コミュニティパーク　多目的ホール 【対　象】学生、市民、大学関係者、行政関係者等 【定　員】100 名　　【参加費】無料
参加人数	60 人
講　師	【講　　師】米田　大吉　（NPO 法人プラットフォームあおもり　理事長） 【パネリスト】米田　大吉　（NPO 法人プラットフォームあおもり　理事長） 辻　正太　　（株式会社 BOLBOP　代表取締役） 金ヶ崎　七虹（弘前学院大学２年） 小笠原　僚祐（青森中央学院大学２年） 鎌田　翔至　（弘前大学２年） 【コーディネーター】森　樹男（弘前大学人文社会科学部　教授）
内　容	【基調講演】「学生×企業×地域のマッチング」～気がついていない魅力と、積み残される課題～ 【パネルディスカッション】「学生のライフデザインと地域づくり」

大学コンソーシアム学都ひろさき「学生地域活動支援事業　成果発表会」

開　催　日	令和２年２月26日（水）13:00～16:00
主催・共催	【主　催】大学コンソーシアム学都ひろさき（弘前大学・弘前学院大学・東北女子大学・東北女子短期大学・弘前医療福祉大学・放送大学青森学習センター） 【共　催】弘前市
会場・対象・定員・参加費	【会　場】土手町コミュニティパーク　多目的ホール 【対　象】学生、市民、大学関係者、行政関係者等 【定　員】50 名　　【参加費】無料
参加人数	40 人
講　師	大学コンソーシアム学都ひろさき（弘前大学、弘前学院大学、東北女子大学、東北女子短期大学、弘前医療福祉大学、放送大学青森学習センター）の学生 地域活動支援事業に採択された学生団体・サークル等
内　容	学生が自らの地域について考え、地域を盛り上げる活動などを実践することで、地域課題の解決や地域の活性化につながる活動を支援し、「学生力」による魅力あるまちづくりの推進を図ることを目的とした補助金事業「学生地域活動支援事業」を実施し、学生ならではの魅力ある５事業が採択されました。そこで、採択された５事業の内容や成果を広く知っていただくため、成果発表会を開催いたします。

講座担当：むつサテライトキャンパス・深浦エコサテライトキャンパス

むつサテライトキャンパス公開講座「食育健康講座」

開　催　日	①令和元年７月31日（水） ②令和元年８月22日（木） ③令和元年９月18日（水） ④令和元年10月30日（水） 14:00～16:00
主催・共催	【主　催】弘前大学むつサテライトキャンパス
会場・対象・定員・参加費	【会　場】①下北文化会館　大集会室 ②～④むつ来さまい館イベントホールＢ 【対　象】むつ市北地域在住の生産者や販売関係者・飲食店関係者・調理や加工に興味、関心がある方 【定　員】50 名　　【参加費】無料
参加人数	95 人
講　師	①④加藤　陽治（弘前大学　名誉教授） ②③前多　隼人（弘前大学農学生命科学部　准教授）
内　容	下北地方における特産の農産物を素材に、弘前大学のシーズを活用し、その機能性や機能を活かした調理方法や加工技術を紹介します。 ①「サーモンの赤い色素アスタキサンチンで老化予防を」 ②「ブルーベリーの抗酸化力　～カラダの酸化による不調を予防しよう～」 ③「ミネラルと食物繊維の宝庫「海藻」で体調管理を」 ④「発酵食品の多様性をさぐる」

むつサテライトキャンパス大学祭

開　催　日	令和元年８月31日（土）～９月１日（日）10:00～15:00
主催・共催	【主　催】弘前大学むつサテライトキャンパス
会場・対象・定員・参加費	【会　場】下北文化会館 【対　象】一般市民、他 【定　員】特になし　　【参加費】無料
参加人数	約 15,000 人
講　師	弘前大学学生と青森中央学院大学の学生
内　容	本大学祭は、当該地域において学生が活動発表等を行うことで、賑わいの創出を図るとともに、学生のアクティブラーニングを実施し、主体的に考える力の育成や地域志向の向上を図ることを目的としています。

むつサテライトキャンパス公開講座「ジオパーク講座」

開　催　日	①令和元年９月７日（土）13:00～17:00 ②令和元年10月23日（水）18:30～20:00
主催・共催	【主　催】弘前大学むつサテライトキャンパス・むつ市
会場・対象・定員・参加費	【会　場】①東通村内のジオサイト等　②むつ来さまい館イベントホールＢ 【対　象】一般市民 【定　員】20 名　　【参加費】無料
参加人数	34 人
講　師	①根本　直樹（弘前大学大学院理工学研究科　講師） ②池田　紘士（弘前大学農学生命科学部　准教授）
内　容	①バスで東通村のジオサイト等をめぐり、フィールドワーク形式で地質について学びます。 ②テーマ「青森の無脊髄動物たち」

深浦町×弘前大学2019シンポジウム
「本当に、子供の力になる『命の教育』とは～深浦町の保健教育の取組から～」

開　催　日	令和元年11月３日（日）13:00～15:30
主催・共催	【主　催】弘前大学むつサテライトキャンパス・深浦町 【共　催】深浦町教育委員会
会場・対象・定員・参加費	【会　場】深浦町役場１階　町民文化ホール 【対　象】一般市民 【定　員】100 名　　【参加費】無料
参加人数	30 人
講　師	【シンポジスト】 ①大和　陽子　（深浦町立岩崎中学校　養護教諭） ②山下　孝子　（青森市立浪打中学校　教頭） ③小野　規子　（深浦町健康推進課　課長補佐） ④新谷　ますみ（弘前大学教育学部　准教授）兼コーディネーター
内　容	【シンポジストからの話題提供】＆【ディスカッション】 ①「『SOS の出し方教育』を受けた生徒の感想から」 ②「学校における「命の教育」の在り方」 ③「深浦町の健康推進施策と自殺予防教育の取組」 ④「保健室から捉えた思春期の子ども達の心」

弘前大学深浦エコサテライトキャンパス令和元年度第二回公開講座「地域探究講座in円覚寺」

開　催　日	令和元年12月13日（金）13:35～15:00
主催・共催	【主　催】弘前大学むつサテライトキャンパス・深浦町・円覚寺
会場・対象・定員・参加費	【会　場】春光山円覚寺 【対　象】一般市民 【定　員】35 名　　【参加費】無料
参加人数	35 人
講　師	渡辺　麻里子（弘前大学人文社会科学部　教授） 海浦　由羽子（円覚寺責任役員）
内　容	本公開講座では、大同２年（西暦 807 年）に坂上田村麿が建立したと伝えられる円覚寺の古典籍調査で発見された資料を活用し、青森県立木造高校深浦校舎の高校生や一般市民を対象に地域の歴史や文化について学び、地域の文化資源の活用について考察を行うことで課題解決能力を高めることを目的に開催しました。

むつサテライトキャンパス公開講座「歴史講座」

開　催　日	令和元年10月24日（木）18:30～20:00
主催・共催	【主　催】弘前大学むつサテライトキャンパス
会場・対象・定員・参加費	【会　場】むつ下北観光物産館（まさかりプラザ） 【対　象】一般市民 【定　員】20 名　　【参加費】無料
参加人数	６人
講　師	武井　紀子（弘前大学人文社会科学部　准教授）
内　容	近世南部藩の馬が将軍に愛好されたように、歴史上、東北地方は名馬の産地として有名でした。では、東北地方の馬はどのように歴史史料の中に登場するのでしょうか。本講座では、東北地方の馬の歴史について、平安時代の貴族の日記などをてがかりに考えてみたいと思います。

講座担当：八戸サテライト

令和元年度若手経営者のための「経営戦略サロン」

開　催　日	①令和元年７月19日（金） ②令和元年７月25日（木） ③令和元年８月22日（金）　15:00～17:00 ④令和元年９月12日（木） ⑤令和元年10月２日（水）
主催・共催	【共　催】弘前大学八戸サテライト・青い森信用金庫
会場・対象・定員・参加費	【会　場】弘前大学八戸サテライト 【対　象】平成28年度開催「イノベーション経営戦略講座」の参加者、およびその紹介を受けた方等 【定　員】25名　【参加費】無料
参加人数	63人
講　師	①髙島　克史　（弘前大学人文社会科学部　准教授） ②熊田　憲　（弘前大学人文社会科学部　准教授） ③④熊谷　淳一（株式会社 ノイエ　代表取締役） ⑤田嶋　雅美　（株式会社 フランチャイズアドバンテージ　代表取締役）
内　容	①「顧客創造に関する基礎知識」 ②「経営とイノベーション～地域企業のイノベーション戦略～」 ③「魅力的な会社になるための中小企業のブランディング」 ④「販売を加速させる『良さそう』の法則」 ⑤「新規事業について」

「『食べて納得』食育健康講座」

開　催　日	令和元年11月14日（木）14:00～16:00
主催・共催	【主　催】弘前大学八戸サテライト 【共　催】新郷村・公益財団法人シルバーリハビリテーション協会
会場・対象・定員・参加費	【会　場】新郷村都市農村交流センター 【対　象】新郷村民 【定　員】30名　【参加費】無料
参加人数	34人
講　師	加藤　陽治（弘前大学　名誉教授） 須田　忠幸（八戸プラザホテル　総料理長）
内　容	青森県産機能性食品素材について、座学と調理見学および試食を通じて頭と舌で学び、普段の食生活における健康や栄養成分への意識向上を目的として実施します。

八戸サテライト防災イブニングセミナー「地震災害軽減を考える」

開　催　日	令和元年12月５日（木）16:00～18:00
主催・共催	【主　催】弘前大学八戸サテライト・弘前大学地域創生本部・弘前大学大学院理工学研究所・公益財団法人シルバーリハビリテーション協会
会場・対象・定員・参加費	【会　場】弘前大学八戸サテライト 【対　象】一般 【定　員】30名　【参加費】無料
参加人数	40人
講　師	片岡　俊一（弘前大学大学院理工学研究科・地域創生推進室員　教授）
内　容	「三八地域の揺れ易さの特徴と折爪断層による地震動」

八戸地域学講座「はちのへまちをよくする作戦会議」

開　催　日	令和元年12月７日（土）14:00～16:00
主催・共催	【主　催】八戸市立図書館・八戸ブックセンター 【共　催】弘前大学八戸サテライト
会場・対象・定員・参加費	【会　場】八戸市立図書館 2F 集会室 【対　象】経済やまちづくりに関するお仕事に興味のある学生、ほか 【定　員】30 名　　【参加費】無料
参加人数	22 人
講　師	田中　哲（八戸学院地域連携研究センター長・八戸学院大学地域経営学部　教授）
内　容	これからの八戸をよくするためにはどのようなことが必要か、参加者の方との対話形式で語りあうイベントです。これまでの八戸の経済についてもやさしく解説し、高校生の方からご参加いただけるような内容です。

講座担当：ボランティアセンター

令和元年度第１回ボランティア講座「人が繋がる地域の居場所づくりについて」

開　催　日	令和元年12月６日（金）18:00～20:30
主催・共催	【主　催】弘前大学ボランティアセンター
会場・対象・定員・参加費	【会　場】弘前大学創立50周年記念会館２階　岩木ホール 【対　象】市民・一般、学生、教職員 【定　員】60名　　【参加費】無料
参加人数	47人
講　師	【基調講演】 山屋　理恵　（特定非営利活動法人インクルいわて　理事長） 【パネルディスカッション】 山屋　理恵　（特定非営利活動法人インクルいわて　理事長） 佐藤　千恵子（八戸学院大学健康医療学部人間健康学科　准教授） 葛西　裕美　（青森県社会福祉協議会　地域貢献活動推進室長） 李　永俊　　（弘前大学人文社会科学部　教授　ボランティアセンター副センター長）
内　容	現在、子どもの貧困や地域のつながりが希薄となることによる孤食問題への対策の一つとして、子ども食堂が全国的に活躍を見せています。子ども食堂には様々な形態があり、その地域に根差した形で実施されることが多く、公的支援とは別の、地域一体型の取組として注目を集めているところです。当講座は、子ども専用の食堂ではなく、人が繋がる地域の居場所づくりとしての子ども食堂について学びます。 【基調講演】 「子育て支援で地域と未来が変わる！～人生100年モデルをつくろう～」 【パネルディスカッション】 「子ども食堂に係る本県の現状と課題について考える」

令和元年度第２回ボランティア講座「身近な災害対策を知っておこう！」

開　催　日	令和２年１月31日（金）18:00～20:30
主催・共催	【主　催】弘前大学ボランティアセンター 【後　援】弘前市・青森県防災士会・弘前医療福祉大学
会場・対象・定員・参加費	【会　場】弘前大学大学会館３階　大集会室 【対　象】市民、学生、行政関係者、教職員 【定　員】50名　　【参加費】無料
参加人数	46人
講　師	【基調講演】 中村　智行　（弘前市総務部防災課 係長） 【防災訓練体験ブース】 ①弘前城東学園弘前市医療福祉大学救急救命研究会 ②工藤　廣道（青森県防災士会副代表理事・弘前支部長） ③弘前大学ボランティアセンター学生事務局
内　容	【基調講演】 「弘前市の水害時における洪水ハザードマップと災害対策について」 【防災訓練体験ブース】 ①「救急救命講習」 ②「災害対応カードゲーム『クロスロード』」 ③「防災食試食・避難所設備組立て体験（簡易ベッド・トイレなど）」

ともに学ぶ。考える。『インターネット安全教室』

開　催　日	令和２年２月17日（月）
主催・共催	【共　催】弘前大学・青森県警察本部・独立行政法人情報処理推進機構（IPA）・経済産業省 商務情報政策局サイバーセキュリティ課
会場・対象・定員・参加費	【会　場】弘前大学創立 50 周年記念会館２階 岩木ホールＡ 【対　象】青森県警察サイバー防犯ボランティア委嘱学生、本学学生・教職員、警察関係者、教育関係者、行政関係者、サイバー防犯活動に興味のある一般の方 【定　員】50 名　　【参加費】無料
参加人数	45 人
講　師	インターネット安全教室事務局 宮川　麻子（株式会社教育ネット　ネットリテラシーアドバイザー）
内　容	【情報提供】 ①ネット社会における子どもたちの現状 ②ネットリテラシー啓発の重要性 ③情報モラル，情報セキュリティとは ④各教材の紹介 【模擬授業及び映像教材の視聴】 ①ＳＮＳとの付き合い方 ②フィルタリング・ペアレンタルコントロール 【グループワーク】 ワークショップ及びブレインストーミング 【総　　括】 ①問題発生の対応策 ②教材のダウンロード方法や使用方法について

講座担当：イングリッシュ・ラウンジ

Shakuhachi Journrys AROUND THE WORLD 英語交流会

開　催　日	令和元年11月12日（火）18:00～20:00
主催・共催	【主　催】弘前大学イングリッシュ・ラウンジ
会場・対象・定員・参加費	【会　場】弘前大学総合教育棟１階　101 講義室 【対　象】一般市民 【定　員】特になし　【参加費】無料
参加人数	35 人
講　師	山田　史生　　（弘前大学教育学部　教授） ニック・ベランド（弘前大学教養教育開発実践センター　非常勤講師） 他、海外からの演奏者、弘前の演奏者多数
内　容	海外から尺八演奏や日本文化に造詣の深い演奏者を招き、外国人からみた日本文化についての対談と尺八演奏を交えながら、英語力を高め、国際交流を深めることを目的としている。

Ⅲ．センター関連規則等

１．センター関連規則

弘前大学生涯学習教育研究センター規程

（平成16年４月１日制定規程第144号）

改正　平成22年５月17日規程第 53号
平成23年７月28日規程第 68号　平成25年４月19日規程第 74号
平成26年５月16日規程第 61号　平成27年３月20日規程第 48号
平成27年９月14日規程第212号　平成28年３月18日規程第126号

（趣旨）

第１条　この規程は、国立大学法人弘前大学管理運営規則（平成16年規則第１号。以下「管理運営規則」という。）第６条第２項の規定に基づき、弘前大学生涯学習教育研究センター（以下「センター」という。）に関し、必要な事項を定める。

（目的）

第２条　センターは、学内共同教育研究施設として、生涯学習に関する教育（医学及び保健に関することを含む。）及び研究を行い、弘前大学（以下「本学」という。）の教育研究の進展と地域における生涯学習の振興に資することを目的とする。

（業務）

第３条　センターは、次の各号に掲げる業務を行う。

⑴　生涯学習に関する教育内容及び教育方法の研究
⑵　社会人を対象とする公開講座等の生涯学習事業の実施
⑶　生涯学習指導者の養成
⑷　生涯学習に関する情報の収集及び提供
⑸　生涯学習に関する相談事業
⑹　生涯学習に関する調査・研究報告書等の刊行
⑺　メディカルコミュニケーションセンターの業務に関すること。
⑻　その他生涯学習に関すること。

（職員）

第４条　センターに、次の各号に掲げる職員を置く。

⑴　センター長
⑵　専任担当教員
⑶　その他必要な職員

（センター長）

第５条　センター長は、センターの業務を掌理する。

第６条　削除

（センター協力教員）

第７条　センターに、センターが行う事業を円滑に実施するため、センター協力教員を置くことができる。

２　センター協力教員の任期は、担当する業務が終了するまでの期間とする。

３　センター協力教員は、学長が任命する。

（運営委員会）

第８条　センターの管理運営に関する事項を審議するため、弘前大学生涯学習教育研究セ

ンター運営委員会（以下「運営委員会」という。）を置く。
２　運営委員会の組織及び運営については、別に定める。
（事務）
第９条　センターの事務は、社会連携部社会連携課において処理する。
（その他）
第10条　この規程に定めるもののほか、センターの運営に関し必要な事項は、センター長が別に定める。

附　則
この規程は、平成16年４月１日から施行する。

附　則
この規程は、平成16年10月１日から施行する。

附　則
この規程は、平成21年２月９日から施行する。

附　則
この規程は、平成21年５月28日から施行し、改正後の規定は、平成21年４月１日から適用する。

附　則（平成22年５月17日規程第53号）
この規程は、平成22年５月17日から施行する。

附　則（平成23年7月28日規程第68号）
この規程は、平成23年７月28日から施行し、改正後の規定は、平成23年５月20日から適用する。

附　則（平成25年４月19日規程第74号）
この規程は、平成25年４月19日から施行し、改正後の規定は、平成25年４月１日から適用する。

附　則（平成26年５月16日規程第61号）
この規程は、平成26年６月１日から施行する。

附　則（平成27年３月20日規程第48号）
この規程は、平成27年３月20日から施行する。

附　則（平成27年９月14日規程第212号）
この規程は、平成27年10月１日から施行する。

附　則（平成28年３月18日規程第126号）
この規程は、平成28年４月１日から施行する。

○弘前大学生涯学習教育研究センター運営委員会内規

（平成16年４月１日制定）

改正　平成25年４月19日　平成28年３月31日

（趣旨）

第１条　この内規は、国立大学法人弘前大学管理運営規則（平成16年規則第１号）第95条及び弘前大学生涯学習教育研究センター規程第８条の規定に基づき、弘前大学生涯学習教育研究センター運営委員会（以下「運営委員会」という。）の組織及び運営に関し、必要な事項を定めるものとする。

（組織）

第２条　運営委員会は、次の各号に掲げる委員をもって組織する。

⑴　センター長

⑵　センターの専任担当教員

⑶　人文社会科学部、教育学部及び農学生命科学部並びに大学院医学研究科、保健学研究科及び理工学研究科から推薦された教員各１名

⑷　学長が指名する教員以外の職員１名

⑸　その他委員長が必要と認めた職員

２　前項第３号の委員は、学長が任命する。

（委員の任期）

第３条　前条第３号の委員の任期は、２年とし、再任を妨げない。

２　前項の委員に欠員が生じた場合の後任者の任期は、前任者の残任期間とする。

（委員長及び副委員長）

第４条　運営委員会に委員長を置き、センター長をもって充てる。

２　委員長は、会議を招集し、その議長となる。

３　運営委員会に副委員長を置き、委員長が指名する委員をもって充てる。

４　副委員長は、委員長を補佐し、委員長に事故があるときは、その職務を代理する。

（会議）

第５条　運営委員会は、委員の過半数の出席をもって成立する。

２　運営委員会の議事は、出席委員の過半数をもって決し、可否同数のときは、議長の決するところによる。

（委員の代理出席）

第６条　委員に事故があるときは、当該委員の指名した者が委員として代理出席することができる。

（委員以外の出席）

第７条　運営委員会が必要と認めたときは、委員以外の者を会議に出席させ、意見を聴くことができる。

（専門委員会）

第８条　運営委員会に専門的事項を調査し、又は企画、立案若しくは実施をするため、専門委員会を置くことができる。

２　専門委員会の名称、組織及び運営については、運営委員会が別に定める。

（庶務）
第９条　運営委員会の庶務は、社会連携部社会連携課地域交流室において処理する。
（その他）
第10条　この内規に定めるもののほか、センターの運営に関し必要な事項は、運営委員会が別に定める。

附　則
この内規は、平成16年４月１日から施行する。

附　則
この内規は、平成16年10月１日から施行する。

附　則
この内規は、平成17年10月28日から施行し、平成17年４月１日から適用する。

附　則
この内規は、平成19年４月１日から施行する。

附　則
この内規は、平成21年４月１日から施行する。

附　則（平成25年４月19日）
この内規は、平成25年４月19日から施行し、改正後の規定は、平成25年４月１日から適用する。

附　則（平成28年３月31日）
この内規は、平成28年４月１日から施行する。

○白神自然環境人材育成講座専門委員会に関する要項

（平成28年７月25日制定）

第１趣旨

この要項は、弘前大学生涯学習教育研究センター運営委員会内規約第８条の規定に基づき設置する弘前大学生涯学習教育研究センター運営委員会白神環境人材育成講座専門委員会（以下「専門委員会」という。）の組織及び運営等に関し、必要な事項を定めるものとする。

第２業務

専門委員会は、白神自然環境人材育成講座（以下「講座」という。）に係る次に掲げる業務を行う。

⑴　講座計画（カリキュラム編成を含む）に関すること。

⑵　履修及び修了等履修生の修学に関すること。

⑶　履修生支援に関すること。

⑷　その他講座の重要事項に関すること。

第３組織

１　専門委員会は、次に掲げる委員をもって組織する。

⑴　センター長

⑵　センターの専任担当教員

⑶　センター長が必要と認めた職員

２　専門委員会に委員長を置き、センター長をもって充てる。

３　委員長は、専門委員会を主宰し、その議長となる。

４　委員長に事故あるときは、あらかじめ委員長が指名した委員がその職務を代理する。

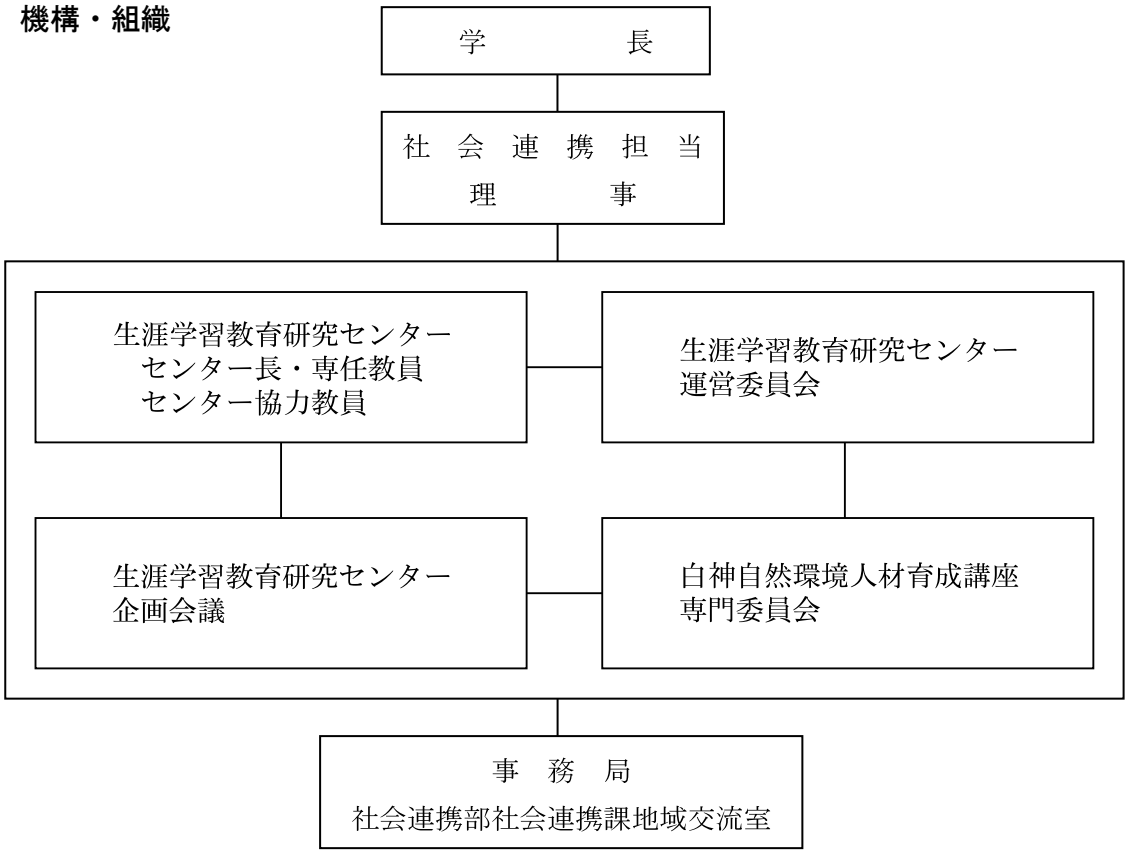
第４庶務

専門委員会の庶務は、社会連携部社会連携課地域交流室において処理する。

附　則

この要項は、平成28年７月25日から実施する。

２．機構・組織



○生涯学習教育研究センター運営委員会

生涯学習教育研究センター	センター長	伊藤　成治
生涯学習教育研究センター	講　　師	深作　拓郎
人文社会科学部	准　教　授	泉谷　安規
教育学部	教　　授	福島　裕敏
医学研究科	教　　授	松原　篤
保健学研究科	講　　師	上谷　英史
理工学研究科	教　　授	阿布　里堤
農学生命科学部	教　　授	佐野　輝男
社会連携部社会連携課	課　　長	長谷川　直生

○センター協力教員

教育学部	准　教　授	松本　大（31.4.1 ～ 32.3.31）

○白神自然環境人材育成講座専門委員会

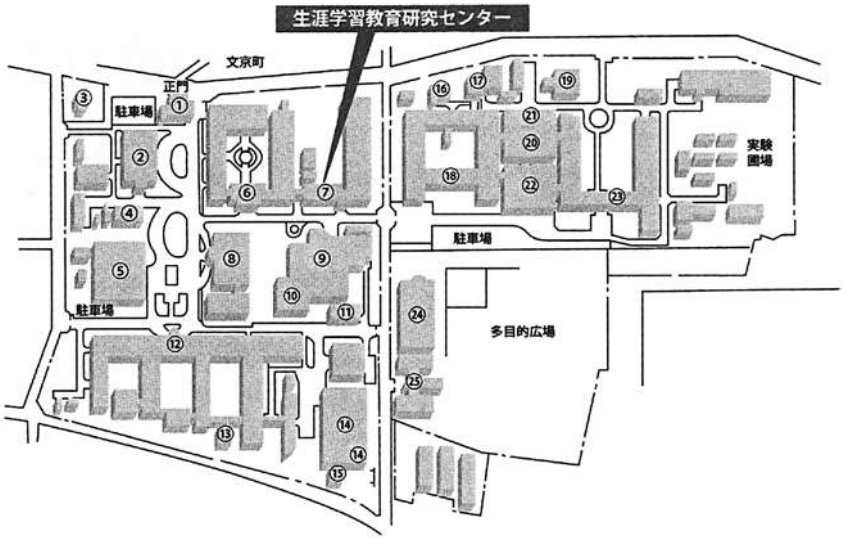
生涯学習教育研究センター	センター長	伊藤　成治
生涯学習教育研究センター	講　　師	深作　拓郎
人文社会科学部	准　教　授	金目　哲郎
教育学部	准　教　授	小瑶　史朗
農学生命科学部	教　　授	石塚　哉史
白神自然環境研究所	教　　授	石川　幸男

白神自然環境研究所　　准　教　授　中村　剛之
社会連携部社会連携課　　課 長 補 佐　金沢　伸也

（令和２年３月31日付）

３．地図・連絡先

文京地区



①案内所（守衛所）
②事務所
③弘大カフェ
④保健管理センター
⑤創立50周年記念会館
⑥総合教育棟
⑦人文社会科学部校舎
⑧附属図書館
⑨学生食堂
⑩大学会館
⑪合宿所及びサークル共用施設
⑫教育学部校舎
⑬教育学部附属
教育実践総合センター
⑭第一体育館
⑮弓道場
⑯地震火山観測所
⑰総合情報処理センター
⑱理工学部１号館
⑲遺伝子実験施設
⑳附属コラボレーションセンター
㉑創立60周年記念会館
コラボ弘大
㉒理工学部２号館
㉓農学生命科学部校舎
㉔第二体育館
㉕武道館

弘前大学地域創生本部
地域創生推進室地域創生人材育成部門
〒036-8560　弘前市文京町１番地
TEL（0172）39-3146〈直通〉
FAX（0172）39-3146

事務局：社会連携部社会連携課
〒036-8560　弘前市文京町１番地
TEL（0172）39-3980
FAX（0172）39-3919

編 集 後 記

2020年３月末日をもちまして、生涯学習教育研究センターが地域創生本部地域創生推進室地域創生人材育成部門へ再編されました。1996年の発足以来、23年間にわたり、地域の社会教育や生涯学習の振興を中心に、地域の学習要求に応える事業を数多く実施してきました。改めて、当センターの事業に関わっていただいた講師の先生方や自治体関係者の方々、研修に参加いただいた皆様には深く感謝申し上げます。

この年報を作成する３ヵ月前、新型コロナウイルスの感染が世界中で拡大しました。弘前でも学校の休校・店舗の休業要請・市民の外出自粛だけにとどまらず、さくらまつりやねぷたまつりが中止となり、弘前大学でも数多くの事業が中止・延期となりました。

そんな状況の中でも、明るい話題もありました。「青森ねぶたの文化を守るため、クラウドファンディングによりねぶた師を支援する」というニュース。全国からたくさんの応援メッセージが寄せられており、多くの支援者のおかげで第一目標の金額まで到達したとのことでした。また、売上減少に苦しむ飲食店を応援するため、テイクアウトを推進する「弘前エール飯」のプロジェクトも大きな話題となり、多くの企業や市民が賛同しました。日々の暮らしも大変な状況の中、人や文化を「支援」する人たちがいることを知り、大変嬉しく思いました。

地域社会も「人と人とのつながり」で成り立っています。社会教育･生涯学習の学びは、個人の生活を充実させるだけでなく、学びを還元することにより、活力ある地域づくりにも繋がっていきます。生涯学習教育研究センターという名称は無くなりますが、弘前大学では今後も社会教育・生涯学習の場を提供し続けていきます。

「地域を支え、地域から支えられる」のスローガンのもと、これからも生き生きとした人づくり・地域づくりに繋がるような事業を展開していきたいと思います。

弘前大学社会連携部社会連携課地域交流グループ　住吉　晶子

発行　令和２年８月31日

弘前大学生涯学習教育研究センター

年報第23号

発行　弘前大学地域創生本部地域創生推進室地域創生人材育成部門
〒036-8561　弘前市文京町１番地（TEL：0172-39-3146）
印刷　小野印刷所
〒036-8173　弘前市富田町52（TEL：0172-32-7471　FAX：0172-32-4251）